

スマッシュブラザーズ ザ ストーリー

公平

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

歴戦のファイターが異世界へまぬかれた。

果たしてなんのために呼ばれたのか

そして目的は何なのか。

ストーリーは亜空の使者と灯火の星を各々の原作とからみオリジナルストーリーにしています。

一部のキャラが脚色のため違和感あるので

ご注意ください

出てくる作品はスマブラに出てきたファイターと

その関連作からキャラクターが出ます

(スピリット中心、参戦してない作品キャラは予定にて)

作品ベース

スーパーマリオサンシャイン

スーパーマリオギャラクシー

スーパーマリオオデッセイ

その他マリオ関連

メイドインワリオ

ゼルダの伝説シリーズ

星のカービィシリーズ

スーパードンキーコング

スターフォックスシリーズ

メトロイドシリーズ
ポケットモンスター（初代〜剣盾）
MOTHER 2
MOTHER 3
F-ZEROシリーズ
ファイアーエムブレムシリーズ
ゲーム&ウオッチ
ファミリコンピュータロボット
アイスクライマー
光線銃シリーズ（ダックハントなど）
パンチアウト
アーバンチャンピオン（予定）
クルクルランド（予定）
バルーンファイト（予定）
エキサイトバイク（予定）
マッハライダー（予定）
謎の村雨城（予定）
ファミコン探偵倶楽部
ピクミンシリーズ
メタルギアソリッド
ソニックアドベンチャー2
新光神話パルテナの鏡
ゼノブレイドシリーズ
ファイナルファンタジーVII
ベヨネッタ2
どうぶつの森シリーズ
W i f i t
ロックマンシリーズ
パックマン
ストリートファイターシリーズ
ザキングオブファイターズシリーズ

バーチャファイターシリーズ（予定）

スプラトゥーン

ドラゴンクエストシリーズ

ペルソナ5

バンジョーとカズーイの大冒険

ARMS

悪魔城ドラキュラシリーズ

ボンバーマン（予定）

MINECRAFT

鉄拳

目次

始まりの章

はじまりの戦い	1
食いしん坊とドラゴンと	5
パツクンの恨み	12
天空の使者	15
ピット対ピット	19
記憶を失った勇者	24
捕らわれた姫たち	29
宇宙戦士サムス・アラン	36
ドンキー&デューデュー	42
仮面の剣士対亡国の王子	52
そしてオネットへ	66
オネット編	
失われた帽子を求めて	74
弓と矢の秘密	79
スプラタック!	86
かつて傭兵だった男	97
その名は織部つばさ	108
眠りの街	124
W i f i t	130
ニセマリオの謎	140
ナワバリバトル	153
ラリーは静かに暮らしたい	164
暴かれる真実	179

新たなる旅（オデッセイ）

191

ドラキュラ城編

帰ってきた緑の男

202

ベルモンドVSベルモンド

209

第三の姫

213

アルカードとドラキュラ

220

始まりの章 はじまりの戦い

「ここはどこだ！」

男が叫ぶ。場所はジャングルの奥地であった。

床は樽のような色と材質。まわりにはいくつかの穴の空いた樽が浮遊している。

男はまわりを見渡す。

男の風貌はMと書かれた赤い帽子と青いオーバーオールそして大きな鼻と黒いヒゲが特徴的だった。

（ここは一体どこだ！ 僕はなぜここに！）

男はまわりを見渡しこう思う。

その時、後ろから誰かが声をかける。

「にいさーん！」

声をかけたのは男に似た、背の高いLと書いた緑色の帽子に青いオーバーオール、大きな鼻と黒ひげの男だった。

「みつけた…… マリオお兄さん……」

「ルイージ！」

息切れしている緑の帽子の男を呼ぶようにルイージと

叫ぶマリオという男。

「ここは一体どこだい？ キノコ王国にはこんなところないし」

「わからない。だが、ここには僕が行かなければならない」

理由があるはずなんだ」

「理由？」

マリオの言葉に不思議がるルイージ。

「兄さん！ たしかに僕たちはいろんなところへ旅してきた。

ピーチ姫がさらわれ、そのたびにクッパを倒し

多くの国を救った。でもここは、ホントに僕たちが来る

場所なのか？」

ルイージがマリオに問いかけると草むらから大きな影が

二人のもとへ現れた。
二人は怯む。その時。

「ぐわあ！」

ルイージはその影にアッパーカットを食わされた！

「ルイージー！」

マリオは叫ぶ。しかし、ルイージはふつとばされ
穴のあ空いた樽へ入ってしまった。

そして

ボオン

ロケットのようにルイージは樽から発射した。

気を失ったルイージはどこかへと飛ばされてしまった。

マリオはふつとばされたルイージを見て唾然としていた。
そこに先程の影が近づく

その影を見て、マリオは驚いた。

「君は！・ドンキーコングー！」

影の正体はマリオよりひとまわり

大きい茶色い毛のゴリラだった。

マリオは怯む。そしてドンキーはマリオに

襲いかかった。

マリオは応戦する。

ドンキーはマリオにパンチするが

よける

ドンキーの攻撃は強力だがスキがある

そこをみたマリオは

打撃を打ち込む。

ドンキーは後ろへ吹っ飛ぶ。

先程の樽ロケットに入りそうになったが

寸前でドンキーはよけ、体制を立て直す。

ドンキーは再びマリオへ近づく。

今度は平手で攻撃。先程のパンチよりスキがなく

マリオはふつとばされる。

マリオは着地したものの体力が限界を超えていた。その時、近くにあった箱にマリオは偶然ぶつかった。その箱からはハンマーが出てきた。

マリオはハンマーを持ちドンキーに応戦する。

しかしハンマーの一振りはスキがあり、

ドンキーは避ける。

マリオはハンマーを振り続けるが当たらない

ドンキーは避けるが同時に下がっていた。

その時マリオはハンマーを振るのをやめる。

「ドンキー！ お前はパワーは強いが昔から頭の方は

俺よりは良くない！ 今だ！」

ドンキーは言っていることがわからなかった

その時マリオは思いつきハンマーを振り

ドンキーにヒットする。

しかしドンキーはガードし、ふつとばされなかった。

ニヤリとするドンキー。

しかし。

スポッ！

ドンキーは先程の樽ロケットに入っていた。

理解できないドンキー。

するとドンキーはその後樽ロケットで

吹っ飛ばされどこかへ消えてしまった。

「ハンマーを使い、ドンキーを後ろへ追い込み

樽ロケットへ入れる。ハンマーのような攻撃な

食らいたくはなく、避けるはずだ。

こんな作戦が成功するとは」

マリオはヘトヘトになっていた。

そしてマリオはその場に倒れ込んだ。

一方

どこかは知らない場所で

二人の男が暗躍していた。

「ドンキーがやられたか。まあいい、あれは
最初から踏み台だ。マリオよ。」

お前はこれからゆっくり潰してやろう。」

「少々甘くないかクツパ？ あやつはお前の宿敵だろう

ここで葬るべきじゃないのか」

「ワガハイにはワガハイのやり方が

ある。口出しをするな。

まあいい待ってろよ。マリオ」

食いしん坊とドラゴンと

ジャングルの奥でドンキーコングと対決したマリオ。マリオは勝利の末倒れてた。

マリオは夢を見ていた。

それは鉄骨が重なった工事中のビルでの話だった。当時解体屋や配管工の仕事をしていたマリオは

ポリーンという恋人をドンキーに攫われていたのだ。

ドンキーはポリーンをさらう鉄骨の上へ逃げた。

ドンキーは樽を投げマリオの邪魔をする。

マリオは樽を飛び越え、鉄骨の弱い部分を破壊しビルを破壊した。

ポリーンは助かり、ドンキーは落下して気絶した。

その時マリオとポリーンは話していた。

「マリオ！ どういうつもり！ このゴリラを見世物にするなんて」

「このゴリラは君をさらったんだ。このゴリラには罪を償ってもらわなければならない

僕が檻にとじこめて調教してやる！」

「マリオ！ あなた最低ね！ あなたはもつと

いい男だと思っただのに。もういいわ！

あなたはどこかの国のお姫様とでも結婚しなさい。

その頃私はどこかの街の市長になつてるかもしれないけどじゃあね！」

「待って！ポリーン！」

怒るように帰ったポリーン。マリオとポリーンはこれ以降会うことはなかった。

マリオはドンキーを檻にとじこめて商売を始めた。

ドンキーは檻から脱出しようとするが出られない。

(これできつい仕事とはおさらばだ。医者にも

なろうと頑張ったがこれのほうが楽だ)

マリオがそう思ってたとき

パンツ！ パンツ！

ピーナッツが勢いよく飛んできた！

「なっ！ なんだ！」

マリオの目の先には小柄なチンパンジーがいた。

チンパンジーは赤い服を着ており、赤い帽子をかぶっていた。

「アニキ！ 助けに来たよ！」

「デーディー！ 助けに来たのか！」

ドンキーは喜んだ。チンパンジーの名はデーディーという

ドンキーの仲間のようなのだ。

デーディーをみたドンキーは檻の鉄格子を力づくで

あけようとする。

「グオオオ！」

必死に鉄格子をこじ開けるドンキー。

「無理だ。この檻はそう簡単に……」

その時鉄格子が開いた。そしてドンキーは檻を破壊する。

「なっ！ そんな馬鹿な！」

ドンキーは逃げ出す。そしてマリオを睨む。

「マリオ！ 今回は見逃してやる！ 君の恋人をさらった

ボクも悪かったからな！ だがこの先お前と戦うことは

あるだろう！ その時まで勝負は預かる！」

ドンキーとデーディーは逃げ去っていった。

マリオは少し考えてこういった。

「ドンキー…… すまなかった。僕はなんてしようもないことを

彼とはもう一度戦いたい。そうすればポリーンもきつと……

よし、決めた冒険に出よう！ そして自分を鍛えてやる！」

マリオはそう決意したのであった。その後マリオは

様々な国を冒険するのであった。

マリオは夢から覚めた。

そこは先程のジャングルではなかった。
あたり一面は野原だった。

「ここは？」

「気がついたようだね。マリオ。」

マリオに声を誰かがかけた。そしてその主が
マリオの目の前にでてきた。

その顔は緑色の肌をした恐竜の子供だった。

「わっ！」

マリオは驚いて起きた。

「何だ！ ヨッシーか！」

恐竜の子供はヨッシーと言うそうだ。

マリオの知り合いのようだ。

「マリオ！ あんなどこにいたとはね。

コンゴジャングルで寝てちやだめだよ。

あそこはドンキーファミリーの縄張り

ドンキーと因縁のあるマリオがいつちやだめだ。

マリオをここまで連れてくるの大変だったんだからね。」

(あそこはドンキーの縄張りだったのか？)

でもあのとときのドンキーは正気ではなかった。

ほんとに僕への恨みか？

それにディーディーもいなかった。

彼は一体？)

マリオは考えていた。そこにヨッシーが言う。

「とにかくここから逃げよう。あれ？ ルイージは？」

ヨッシーの問いにマリオは答える。

「ルイージはきつきドンキーに……。」

マリオがいかけたその時。

「ヨッシー危ない！」

マリオはヨッシーを押し倒す。

「いたいじゃないか！ マリオ！ なんで！」

「よく見ろ！ ここに切れ目があるだろ！」

起こるヨツシーに反発するマリオ。

ヨツシーがいた場所には切れ目があった。

「これはいったい?」

二人は不思議がる。その時可愛らしい声の何かがマリオたちを呼び止める。

「お前らなぜ避けた!」

マリオとヨツシーは声の方を見た。そこにはピンク色のボールのような生き物が可愛らしい声で喋っていた。

「お前たちは村の食べ物全部盗んだ!」

特に緑色のお前! 一番食べそうだ!

食べ物を返してもらおうぞ!

マリオとヨツシーは不思議がる。そしてヨツシーは反発する。

「僕は君の村なんて知らないぞ! 勘違いしてるのか!」

「じゃあさつきそこに落ちていた僕のリンゴ1000個くったろ!」

「あれは落ちてたものと思ひ、おいしそうで……つい……」

「やっぱり食べたな! 犯人だ!」

(いやいや、どっちもどっちだろ!)

しかも1000個ってお前らどんな胃してんだ!)

二人の会話に心で突っ込むマリオ。

マリオは説明しようとする

「僕はマリオ、こっちはヨツシー。 僕たちは……」

「問答無用! ファイナルカッター」

話そうとする二人にファイナルカッターが飛ぶ

二人は慌てて避ける。そしてマリオはヨツシーにとびのり逃げた

ヨツシーはマリオを背負い猛ダツシユする。

「駄目だ! あいつ話聞かんやつだ! どうする?」

ヨツシー?」

「とにかく逃げよう。僕の足にはついてけないはずだ」

ヨツシーはそう言うが後ろを振り向いたマリオが慌てて言う

「おい! ヨツシー! あれを見ろ! あいつとんでるぞ!」

「えっ！」

そこには顔……というか体を風船のように膨らませたピンクボールのあいつが浮遊しているように
マリオ向かって飛んできた。

「あいつ飛べるのか！ ヨツシーお前も甲羅を
食べて飛べただろう。羽を出せ！」

「無理だ！ 甲羅がないと駄目だ。」

あ！ マリオこれなら」

するとヨツシーは赤い花をだす

マリオはそれを手に取る

「これはファイアフラワー！」

マリオがファイアフラワーをとるとファイアフラワーは消え
マリオは手から炎の玉が出せるようになった。

炎の玉（ファイアボール）をピンクボールへ向かって放つ
ピンクボールは空を飛びながら炎の玉を避ける。

しかし、玉の一つがピンクボールにあたり

ピンクボールは落下した。

「やったか」

マリオは手応えを感じた、その時
ポオ！

「うわあ！ なんだ？ あれは？」

マリオに向かって火の玉が飛んできた。

火の玉が飛んできた先には先程のピンクボールがいた。
マリオとヨツシーは驚いた。

それはピンクボールの頭にたいまつのような炎が
あつたのだ。

「まさか、ファイアボールを吸収して跳ね返してるのか？」
ピンクボールはどうやら炎の玉を飲みこみ
炎の玉をはけるようになったと思われる。

今度は自分達が炎の玉におわれるマリオとヨツシー
慌てて逃げる中ヨツシーは再びマリオに何かをあげる

「マリオこれを」

マリオはヨッシーから受け取った小さな羽を手に取り力を得た。

ピンクボールの火の玉が襲い続ける。

マリオに炎の玉が当たりそうになったとき

マリオは黄色いマントをだし跳ね返した。

「ぎゃあー・熱いー!」

跳ね返った炎の玉はピンクボールに直撃し

ピンクボールは痛がる。

痛がるピンクボールにマリオたちは近づき

ピンクボールを睨みつける。

「さあ、話を聞いてもらおうぞー!」

責めるマリオたちにピンクボールは恐れた状態だった

そしてしばらく話しあった

「ごめんなさいー!」

勢いよく土下座するピンクボール。

「誤解でした。僕はあなたたちを食べ物泥棒と思い……」

僕の名前はカービィ。ある日旅先のプープランドで

何者かに食べ物を盗まれたんだ。それでヨッシーが

僕のお弁当のリングを全部食べちゃったから疑ったわけ」

マリオはヨッシーを睨みつける。ヨッシーは後ろめたい表情をする。

「まあ、誤解はとけたし、カービィ僕と一緒にそいつを

探すかい?」

「探してくれるの? ありがとう!マリオ!」

「そしたらそいつの手がかりを見せてくれないか?」

「あるよ! これ!」

カービィが見せたのはなんとも言えないクレヨンで書かれた
へたなイラストだった。

「マリオ? これペンギンにみえないか?」

「そうか? ヨッシー。よくわからない絵だし」

二人は悩む中。王様の格好をした凶体のでかいペンギンが大きな荷物を抱え、慌てて逃げる。

三人は確信した。

「あいつだ！」

三人はペンギンを追いかける。

その時

ゴンツ！

マリオは何かにあたつてふつとばされてしまった。

「マリオー！」

ヨッシーとカービィは叫ぶ！

マリオはどこかへと消えてしまった。

カービィとヨッシーの目の前には

大きなトゲトゲの鉄球が落ちていた。

そして地面から何かが出てきた。

「マリオ…… 我が同胞を倒し続けた割には

あつけなかつたな」

そいつは喋った。そいつの外見は植物で

丸い頭に鋭利な歯。不気味な姿のそいつは話していた。

「お前はパッくん！」

「お前はヨッシーか！ お前も我が同胞の敵だ！

クッパ様のおみやげにいい奴らがいたようだ。

さあ、覚悟しろ！」

ヨッシーとカービィにパッくんが襲ってくる。

パツクンの恨み

マリオは謎の鉄球に遠くへとふつとばされてしまった。
残ったカービィとヨツシーの目の前には

パツクンフラワーという喋る凶暴な植物がいた。

「マリオは我がシューリンガンで遠くの彼方へふっ飛ばした

次はお前たちの番だ！」

恐れるヨツシーとカービィ

「お前なんて怖くないぞ！」

カービィが強がる。

パツクンは口から炎を吐く。

ヨツシーとカービィは避ける。

そしてカービィは一部の炎を吸い込む。

ファイアカービィになったカービィは炎を

パツクンへ向き吐いた。

「あちい！あちい！」

炎が当たり燃える。パツクン。

カービィとヨツシーは喜ぶ。

次の瞬間。

パツクンの周りにあつた炎は消えた。

「なんてな！俺は炎に強い。お前の炎なんて
きかないね！」

パツクンは首を伸ばしカービィに噛み付く

そして自分のところに引き寄せた。

「カービィ！今助ける！」

ヨツシーは卵をパツクンに投げようとする。

しかしパツクンはカービィを盾にする。

ためらうヨツシー。

「どうだ！うてないだろう！」

「卑怯だぞ！」

「カービィは気絶しているなら今のうちに」

するとパツクンはカービイをはなし、カービイになにかを吹きかけた。

「こいつは毒だ。毒が体内に入りこいつは死ぬだろう」
ヨツシーはパツクンに怒りをぶつける。

そして卵を投げまくる。

しかしパツクンは避ける。そしてヨツシーにシューリンガンというトゲのついた鉄球を口からだしぶつけようとしたとき。

「ゲホッ！　ゴホッ！」

なにかがパツクンにかかった。

それは毒の霧だった。

「これは！　俺以外に毒霧を使えるやつがいると！」

パツクンが向こうを見ると、そこには毒が溢れ出てる被り物をしたカービイがいた。

「馬鹿な！　お前はさつき俺の毒で！　ハッ！」

（こいつまさか、俺の毒を自分の体内に取り込み

自分の力にしたのか……

クソツ！　そんなの聞いてねえぞ）

悔しがるパツクンしかし

（だからなんだと言うのだ俺は毒が効かない！

むしろ困るのは毒に耐性のないヨツシーだ。

あいつの攻撃であいつの仲間は死ぬ。俺にとっては好都合！）

パツクンは微笑んでいた。そのとき

「なんだ！　うわあ！」

パツクンの下のゆかが崩れた。そこには毒が沼のようになっっていた。

「こいつはいつたい！　ハッ！」

（そうか最初から床を毒で溶かすことを狙って……

なら……）

パツクンはシューリンガンを投げた。

カービイは毒の状態、ポイズンカービイを解除し

シューリンガンを吸い込んだ。

「何っ！」

そしてそれをパツクンに向かって勢いよく吐いた
そしてシューリンガンはパツクンに直撃した。

「馬鹿なあああー！」

叫びパツクンは穴へ落ちていった。

パツクンは落ちていく中マリオとの戦いを思い出していた。
それはマリオの邪魔をするパツクンが次々と葬られる様子
だった。

果までは親玉のボスパツクンまで倒されてる様子まであった。
彼はある言葉を思い出す。

「パツクンフラワー！ お前は今までのパツクンフラワーの

怨念を合わせた完全体。マリオに倒された

すべてのパツクンの力が入ってるのだ

マリオを倒せ！ お前の一族と我がクツパのために！」

パツクンは失意のまま地の果に消えた。

一方カービィとヨツシーは毒の地形を直し、

次の場所へと向かうのであった。

天空の使者

ここは雲海。

あたり一面には雲しかない場所。
そこにエンジェランドはあった。

「パルテナ様！」

一人の少年が声をかける。少年は天使の羽をはやしている
白い着物を着ていた。

向こうには緑の髪の美しい女神がいた。

「あら、ピット。どうしたの？」

「向こうに人がいたんです。人間の」

「あら、興味深いですね。では早速見に行きましょうか」

別の場所に移動した二人。そこにはマリオが
気を失っており、倒れていた。

「これはマリオですね」

「やっぱりマリオですか」

二人は納得していた。

「お姫様と弟さんは一緒ではないでしょうか？」

「ヨッシーもいませんよ。一体どうしてこんなところに？」

二人が話しているとマリオが目覚める。

「あれ？　ここは？」

気がついたマリオにピットが挨拶する。

「はじめましてマリオ。ぼくは……」

「君は天使か？」

「えっ！　まあ一応……」

天使の少年ピットの話を遮ったマリオ。そして
マリオは話し続ける。

「そうか……　ぼくは死んだのか……」

「えっ！　いや！　その！　そうじゃなくて！」

「ああ、僕はまだピーチ姫としてないのに……」

「えっ！ まだなんですか！ ピーチ姫とまだなんですか！
マリオの眩きにピットが興味を持つ。

しかしそこに緑の髪の女神が止めに入る。

「駄目ですよピット。それ以上いうと
検閲に引っかけられますよ」

「検閲？」

不思議がるピット。女神はマリオに話しかける。

「はじめましてマリオ。私はパルテナ。このエンジエランド
に住まう女神です。これはピット。私の部下です」

「パルテナさまあー！ 人をもののように
いわないでください！」

「あら、ごめんなさい」

ピットとパルテナのやりとりを呆然とみていたマリオ。

「ここは天国ではないのですか？ なぜ僕の名前を？」

「あなたのことはここエンジエランドでも有名なんですよ」

「エンジエランド？」

ピットがマリオに答えるとマリオが質問する。

パルテナは答える

「エンジエランドは天使と女神である私パルテナが
住まう人間界とは離れた世界です。

まあ、本来は人間はこの世界には来れないのですが
女神の名前はパルテナと言うそうだ。

「なぜ僕はここにいますか？」

「私もわかりませんね。ピット！」

困るパルテナはピットを呼ぶ

「はい！ 何でしょうパルテナ様！」

「ピット！ マリオを下界まで送りなさい

この先にワープエリアがあります

そこへ行きなさい」

パルテナがピットに命令するがピットは言い返す。

「あの？ パルテナ様？ 奇跡でそのままワープ

すればいいのでは？」

それに笑顔でパルテナは言い返す。

「それを使うとあなたの神器が使えなくなります。」

それに楽なことは考えてはいけませんよ！」

「はい！ パルテナ様！」

ピットは従順に従った。

(あんなに美しいのに腹黒いなあの人)

マリオはこう思う。パルテナはマリオを見て言う。

「何か私に言いたいことでも？」

「えっ！ いえいえ、ないです。」

「そうですか……わかりました。」

笑顔で返すパルテナ。マリオは安心したようにため息を吐く。

「では行ってまいります。パルテナ様！」

「待ってください！ピット！ あなたは飛べてもマリオは

飛べませんよ。雲の床を伝って行きなさい。」

あとマリオあなたにはこれをあげます。」

ピットを止めたパルテナはマリオに力を与えた。

マリオにはたぬきのしっぽがはえた。

「あなたはしっぽをはやして飛んでたと聞きます。」

あなたが今持つてるマントは飛ぶとき大変そうなので

この力を与えました。

さあ、行きなさい！」

ピットとマリオはワープゾーンへ向かった。

二人が行ったあとパルテナは目をつぶり考え事をしていた。

(ピット……私はこのエンジエランドを守るため

しばらくここにいます。

ですが、いま世界は大きな異変があります。

二人とも気をつけて……)

するとパルテナは姿を消した。

マリオとピットは雲の床をつたいながら
ときには空を飛び、ワープエリアに近づく。

「もう少しだ！」

二人がワープエリアにつく、その時、
ビュン！

何かがピットをかすった。

「うわぁ！…なんだ！」

ピットとマリオは雲の床に足をつけた。

二人の目先には黒いピットに似た少年がいた。

ピット対ピット

ピットとマリオは下界に戻るためワープエリアを目指す。そこで、ピットにそっくりの黒い天使の少年が現れた。

「お前は一体何者だ！」

ピットは黒いピットに反発する。

黒いピットは笑いながら答える。

「俺か？ 俺はお前だ。ピットだ。」

まあ区別つけるならブラックピットとでも呼べ！」

「ブラックピット？ ……ブラピ」

「変な略し方するなっ！」

ブラックピットを笑いながら茶化すピット

ブラックピットは怒りながらも

話を続ける。

「お前。昔パルテナがメドウーサに攫われたとき

助けに冥府界まで行ったそうじゃないか。

ホントにお前みたいなのがパルテナを救えたのか？」

「何を！ お前みたいなのが調子に乗るな！」

大体お前は何しに来たんだ！」

「何をしにきたかって？ そりやお前たちの処刑だよ。

ある方が依頼してきてな。お前とそのヒゲ男！

ある方の邪魔になるってことで頼まれたんだよ！」

ピットとマリオはその言葉に反応する。

「邪魔になるとはどういうことだ！ そしてそいつは

何を考えてるんだ！」

マリオが反発する。

「悪いが答えられないね！ 答えたとしても

意味はない！」

ブラックピットはそう言う矢を放った

ピットは避ける。しかし矢はマリオの方へ

「しまった！」

マリオに矢が当たろうとしたときマリオはスーパーマントで矢を跳ね返す。

慌てて避けるブラックピット。

「やるなさすがは歴戦の冒険者！　だが！」

ブラックピットは矢を撃ちまくる。

マリオは避ける、そして別の雲の床へと足場を移す。

その時。

「うわあ！」

雲の床が消えた！　マリオはしっぽでつかさず空を飛び別の雲の床へと移る。

「気をつけて！　マリオ！　雲の床は一定の時間がたつと

消え、別の場所へ生え変わるんだ」

「そういうことは早く言えよ！」

ピットとマリオのやり取りの中、ブラックピットは矢を放ちまくる。

「どうしたっ！　まだ俺との戦いは終わってないぞ！」

「くそっ！　こうなったら！」

ピットはブラックピットからの矢をよけブラックピットに近づく。

ピットも矢を放つ

避けるブラックピット

互いに避けつつ近づいてく二人

そして二人は矢を2つに分け、2本のナイフのような武器を使った。

マリオはピットを助けようと彼らに近づくためしっぽマリオで近づく。

そこでピットはマリオにこう言う！

「マリオ！　君だけでも先に行ってくれ！」

元々君を下界に送るためにここに来たんだ

僕のことはおいてつても構わない！」

「戦いの途中だ！」

「ぐわあー！」

よそ見したピットはブラックピットの攻撃にダメージを受ける。

倒れるピット。止めを刺そうとするブラックピット。

その時、炎の玉が彼にあたった。

「くっ！」

防ぐブラックピット。火の玉はマリオのファイアボールだった。

ファイアボールを当てまくる

しかし、突然ファイアボールが跳ね返ってきた。

慌てて避けるマリオ。

「馬鹿だなあ！ 俺にも反射できる盾があるのだ！」

お前の飛び道具などこれで防げる！」

その時

「いやあー！」

ピットがブラックピットに刃でこうげきする。

ブラックピットはそれを刃でうける。

そして、ピットはブラックピットを振り切り

逃げるように飛んでいった。

ブラックピットは笑い出した。

「ハハハ！ アイツ仲間を置いて逃げようとしてるなあ！」

なあマリオ！」

ブラックピットが振り替えるとマリオがいない

マリオはワープエリアに向かっていった。

「くそっ！ させるかっ！」

マリオを追いかけようとする、ブラックピット。

しかし彼に矢がかすれた。

それはさつき逃げたピットの矢だった。

「こっちだ！ 卑怯者！ やーいマヌケ！」

挑発するピット。ブラックピットは彼へ向かった。

「どつちが卑怯ものだ！」

ピットは再び空を飛び、滑空し逃げる。

ブラックピットはそれを追いつつも考えていた。

(自分が囿になり、マリオを逃がすというわけだな。

そうはいかない！ マリオが確認できる場所に

行きそこで俺の矢を放つ。

あいつには跳ね返すマントがあるが

真上から狙えばあいつとて防げないだろう)

ピットを追いかけるブラックピット。

するとブラックピットはマリオを見つけ

上昇した。

そしてマリオの真上から狙い撃ちをする。

「引つかかったな！」

ニヤリと笑いそう言うピット。

ブラックピットは矢を射ようとするが、身動きができない。

「何だ！ これは？」

ブラックピットの体は雲に固められていた。

「一定時間で消えたり、現れる雲の床さ。

お前をその場所に誘導するために、僕は逃げたのさ。

今のマリオの位置を狙うにはあの場所。

僕はそれを計算し、誘導したのさ。

雲の床がその位置に現れたとき

お前は雲の床に固まる。

とんだ誤算だったな！ ブラックピット！」

「くそっ！ 離せっ！ このっ！」

もがくブラックピット。ピットは一気に近づきこう叫んだ。

「ダッシュユアツパー！」

「ぐわあ！」

ブラックピットはピットのダッシュユアツパーで遠くへ

吹っ飛んだ。

「さあ、マリオ！今のうちに！」

マリオはワープエリアへとたどり着く。その時

上から矢が降ってきてマリオをかすれた。

上にはブラックピットが落ちてくるように攻めてきた。

「残念だったな！ 俺はあえてワープエリアに

落ちるよう計算していたのだよ。

「ここで弓矢を当てれば……」

ブラックピットは弓矢をひく。その時、矢が

ブラックピットをかすれる。

「させるか！」

矢を撃ちながらブラックピットに近づくピット

二人はワープエリア上空で刃を交えていた。

その時、ワープエリアから稲光のようなものが。

「なんだ！ うわあ！」

マリオ、ピット、ブラックピットの三人はその光に

巻き込まれた。

そして光は消え、三人の姿も消えた。

場所はかわりここはどこかのどかな街。

上空から誰かが降ってきた

「うわああああ！」

マリオである。マリオが落ちている中、誰かが助けた。

「だいじょうぶか？ マリオ？」

「ピットか！」

ピットはマリオを抱え地面に着地。

「ここはどこだろう？」

ピットは不思議がる。マリオはその時、看板を

見つけこうつぶやいた。

「オネット……」

記憶を失った勇者

ここは森の奥。そこでひとりの青年が倒れていた。青年は目を覚ます。

起き上がりここはどこだ？と、あたりをキョロキョロ見回す青年。すると彼に突然どこからか声が聞こえた。

「リンク……リンク……聞こえますか？」

私の声が」

青い服を着た青年、リンクはあたりを見回すが誰もいない。

「私は遠くからテレパシーで伝えているのです。

あなたはリンクの名をもつもの。

あなたにはしてもらいたいことがあります」

青年は不思議がる。

「あなたにはこの世界を闇に包もうとする

ガノンドロフと

その協力者を倒してもらいたいのです。

ガノンは私の力を狙い、

あなたの力を狙うでしょう。

ですが、あなたには仲間を集め

ガノンを倒してほしいのです。

引き受けてくれますか？」

リンクは頷く。

「ではリンク。まずはオネットという街を

めぐってください。そこにあなたの仲間がいます。

そして、その途中であなたは馬に出会うでしょう。

そのものを仲間にしなさい。

そしてあなたと同じ……」

声はここで途切れた。

リンクは自らの剣マスターソードと盾ハイリアを見つめる。そして彼は歩きはじめた。

彼には記憶がないようだ。自らが何者か

それがわからず。しかし、声の主をたすけなければならない。

その気持ちだけは本物と思った。

彼が歩いていると向こうから誰かやってくる。

それは青いマントをつけた地位の高いものの格好をした

ショートヘアの青年だった。

リンクは話しかけようとする。しかし

マントの青年はリンクに斬りかかる。

リンクはハイリアで防ぐ。

弾き返されたマントの青年の剣。リンクはマントの青年に

斬りかかる

二人は剣で剣をうけ、互角の戦いをしていく。

リンクはマントの青年を追い詰める。

その時

「ぐわっ！」

リンクは後ろからダメージを受けた。そして腕を負傷した。

そこには赤髪の剣士の青年がいた。

赤髪の青年はマントの青年と協力し

リンクを追い詰めようとする。

その時、

二人の青年の剣を2つの剣が受け止めた。

一人は緑の木こりのような洋服を着た少年で

もう一人はそれがさらに小さくなったような少年だった。

二人はリンクを助け、二人の青年をリンクより遠くの

場所へ誘導した。

その時、突然背中に白毛のある雌馬が現れた。

背の高いほうの木こりの少年は

マントの青年の剣を振り切り、

リンクに近づき、手当をする。そして、リンクを雌馬に

乗せた。

リンクは叫んだ。二人を見捨てることができず。

しかし二人の木こりの服の少年は、リンクを巻き込まないよう、二人の青年剣士と戦っていた。雌馬はリンクを抱え森の中を走っていった。一方、パッケンフラワーをたおし、マリオと食べ物泥棒を探していたカービィとヨッシー。ヨッシーはカービィを乗せ森の中を探索していた。「ねえー。お腹空いたよー!」

「さっきありったけの木のみ食っただろう。僕も空いてんだからあまり言うなよ」

「けち! ヨッシーのケチ!」

「んじゃ降りろ! 僕は特別に乗せてるんだぞ!」

二人は口喧嘩をしている。その時カービィは気づく。

「あつ! あれは!」

カービィが見た先には食べ物泥棒が寝ていた。

恐る恐る近づくとカービィとヨッシー。

するとカービィは食べ物が入った袋をムチを使ってとらえ引き寄せた。

「やったー! あれでもなんか軽い!」

カービィは袋中身を見た。

「あー! 空っぽだ! 村の一年分の食事をよくも!」

カービィは怒って泥棒に近づく。そして耳元で大声で叫ぶ。

「みんなのたべものかえせー!」

泥棒は起きたが、気絶してるようだった。

しばらくして泥棒が意識を取り戻した。

「何! 食べ物返せだ! 村人の食べ物を」

大王であるこのデデデが取ろうが問題ないだろう!」

「あるよ! しかも君大王なの?」

そんなやつが村の食べ物を独り占めなんてゆるさない!」

カービィはハンマーを手にデデデを叩こうとする。

デデデは何かを思い出すように事を言う。

「あつ！ そうだ！ 食べ物はある！

クツパ城に」

「クツパ城？」

カービィは不思議がる。ヨッシーは反応する。

「クツパの仲間なのかお前！」

「違う！ あやつとはただ協力してるだけだ。

オレ様は死ぬまで遊んで暮らせるお金と引き換えに

食べ物を奴らに渡したのだ」

「ひどい！ お金と引き換えるなんて！

食べ物が必要ならばみんな死んじゃうんだぞ！」

「預かってるだけだと言っていた。だから

クツパ城へ行けばあるはずだ。じゃあ

オレ様はこれで」

デデデは猛ダッシュで逃げる。

「あつ！ 待てっ！」

デデデは逃げるその時。

ガンツ！

デデデは通りがかかる何かにぶつかり、気絶した。

それは先程のリンクとリンクを乗せた雌馬の姿だった。

「誰だい！ 君は？」

ヨッシーは訪ねる。リンクは馬からおり、自らの名前と

先程の状況を伝える。

「剣士に切りかかられたか。ケガは大丈夫なのか？」

ヨッシーが訪ね、リンクは頷く。リンクは倒れてる

デデデを気にしており、あやつは大丈夫なのか？と

二人に訪ねる。カービィがそれに答える。

「大丈夫だよ！ てかあのままにしとこう。

それよりもあいつはクツパ城にみんなの食べ物を

送り込んだんだ。早くクツパ城に行き、食べ物を

取り返さない」と

リンクはそれを言うカービィに対し、まずオネットという

街に行き仲間を集めるのが先ではないかと訪ねる。

「そんなことをしてたら食べ物腐ってみんな食べられなくなっちゃうよ!」

「カービー! リンクの言ってることはあってるよ

クツパ城はなかなか行けるとこじゃない。

それにその街にはマリオがいるかもしれない。

そんな予感がするんだ」

カービーはヨッシーの言葉に少し考えた。

「わかった。その街に行つて仲間を集めたらクツパ城へ行こう。絶対食べ物返してやる」

カービーのその言葉にリンクは少し笑顔になった。

ヨッシーが訪ねる。

「ところでこの馬、名前なんていうの?」

リンクは少し考え、エポナと答えた。

「エポナってことは女の子だ。よろしくエポナ」

ヨッシーはエポナの体をなでる。

リンクはしばらくして体の怪我を直し、

ヨッシーやカービーをエポナに乗せ、自らも乗り、

オネットへ向かいエポナを走らせた。

捕らわれた姫たち

ここはどこか。

そこにはマリオに敗北した。パッくんフラワーが寝ていた。

「パッくん起きろー！」

誰かがパッくんを起こす。パッくんは起きる。

「あれ？ あなたはクツパJrのおぼっちゃま

なぜコチラに？」

読んだのはトゲトゲの亀の甲羅をつけた

亀に似た姿の子供だった。

「お前はヨッシーとカービィにやられ

地のそこへ落ちた。それをパパの魔力で助け、

この僕の砦に連れてきたわけ」

「そうか…… やはりあのとき俺はあのピンクボールに

負け……くやしい……」

パッくんは涙を流す。

「パパからの言伝だと、ラリーが乗っとてるオネットという

街があるそうだ。そこに向かってほしいとのことだ」

「御意！ ただいま行ってまいります！」

するとパッくんは地に潜り、その場から姿を消した。

「つておい！ 場所知ってんのか？ パッくん！」

クツパJrが声をかけたその時、後ろのモニターになにか映った。

「パパー！」

モニターに大柄の亀に似た生き物がいた。

「おお、私のかわいいジュニアよ。

早速パッくんをオネットに向かわせたようだな。

ジュニアお前には他にやってもらおうことは

あるからな。頼んだぞ」

「わかったよパパ」

大柄な亀、クツパ大王との通信はここで切れた。通信を終えたクツパはモニターで何かを見ていた。それ檻に閉じ込められた、桃色のドレスをきた金髪の姫君であった。

(ああ……マリオ、今どこにいるの?)

姫はひとりそう思う。すると彼女に誰かが声をかける。

「あの?」

「誰?」

姫が後ろを振り向くとそこには幼さが残る、額に金の飾り前髪を分けてる、金髪の可愛らしいドレス姿の少女がいた。「私の名はゼルダ。隣の牢獄で囚われていましたが、

こつちに移されて……」

あなたはピーチ姫ですね」

ピーチは少し驚きゼルダに訪ねる。

「あなたのお噂はお聞きしています。キノコ王国のお姫様でかつて大魔王クツパにピーチ姫の力を恐れられ、誘拐されたとか」

「ええ、まあ……」

「そこに勇敢なマリオという王子様が現れて貴方を助けた。そしてキノコ王国には平和が訪れたいい話じゃありませんか」

「まあ、そうだけど……」

ゼルダは目をキラキラし、戸惑うピーチに近づく。「で、今回もクツパはあなたの力を恐れこんなところに閉じ込めたんですよね?」

ピーチは少し考えこう言う。

「え? まあ、違うんじゃないかな?」

「へ?」

啞然となるゼルダ。ピーチは答える。

「確かに最初はクツパはキノコ王国を乗っ取るため私がクツパを倒せる力があるのを恐れ、

閉じ込められたわ。

でも、クツパは……」

「クツパは？」

ゼルダが気になるように問いかける。

「私のことを好きになっちゃったみたい！」

「え？ ええー！」

驚くゼルダ。

「つてことはクツパはピーチ姫を自分の

お嫁にするために

さらったつてことですか？」

「まあ……そういうことになるわね。

私はそんな気はないけど……」

「なーんだ。少しガツカリしました」

ゼルダは座り込みため息をつく。

「でも確かにあのクツパと結婚するのは無理ですね。

生理的に無理ですし、性格嫌いだし」

「そうよ。私乱暴な人嫌いだもの！」

でも、あの子が少し可愛そうなのよ」

「あの子？」

「彼には子供がいるのジユニアという。

あの子は私のことをホントのお母さんと思

思ってるみたいなの」

「クツパはその子に自分の母親とし

ピーチを結婚させようと

してるんだわ。許さない！」

少し怒るゼルダ。ピーチは訪ねる。

「ねえ？ あなたはなぜこんなどこにいるの？」

ゼルダは落ち着き答える。

「わかりました。お答えしましょう。

私たちの一族は代々魔王ガノンと戦ってきた
家系なのです」

「ガノン?」

「私の一族がいるハイラルは代々

その魔王ガノンの災いから

長らく世界を守ってきた。

私のこのゼルダの名は

先祖代々の名前なのですよ」

「そうなの?」一族で長く戦ってきたとは

大変ね」

ピーチは感心する。

「今、クツパと手を組んでいるガノンドロフは

そのガノンが復活した姿なのです。

彼はトライフォースの力を使い

世界を自らのものにしようとしてるのです」

「まあ! なんて乱暴なの!」

クツパより許せないわ!」

怒るピーチにゼルダは自らの手の甲を見せる。

そこには3つの三角が光っていた。

「これは?」

「知恵のトライフォースです。ガノンは

これを狙ってるのです。」

ガノンは力のトライフォースを

もち、私は知恵、

そしてもう一つ勇気のトライフォース

を手に入れることでガノンは強大な力を得るのです」

「そうだったら世界はガノンのもの?」

ピーチの問いにゼルダは頷く。

「それなら、早くその勇気のトライフォースのある人を

探してガノンを倒してもらいましょう」

「ええ。今彼はオネットという街に向かっています。

私がテレパシーで伝えましたので」

「テレパシー? まあいいわ……とりあえずここから

抜け出して……」

二人が話すと外から物音が

「何事だ！」

見張りが物音の方に駆け付ける。

看守がいなくなり、ゼルダは魔法で檻の鍵を開ける。

「ゼルダ、すごいわねあなた何でもできるのね」

「何回も抜け出そうとしましたからね。それよりも

早く出ましょう」

ピーチとゼルダは走る。すると誰かが引き止める。

それは忍者のような青いスーツをきた男だった。

男は素早い動きでゼルダを糸でとらえる。

「きやあ！」

「ゼルダ！」

糸に絡まれ離れることのできないゼルダ。

そこに何かが糸にあたり糸が解けた。

ゼルダは開放され、ピーチは彼女に心配そうに近づいた。

「ゼルダ、大丈夫？」

「ありがとう。ピーチ」

ピーチは安心した。そして二人は向こうを見る。

向こうにはオレンジ色のパワードスーツをつけた戦士がいた

「二人とももたもたしている場合ではない。逃げるぞ！」

「あなたは？」

「話はあとだ！ これだけ騒いだからすぐに他の兵がくる

さっさと逃げろ！」

ピーチの問いにオレンジ色のスーツの戦士はそう答える。

二人は戦士の後ろに隠れる

青いスーツの忍者はパワードスーツの戦士に襲いかかる。

忍者は手裏剣を投げる。戦士は片腕についた筒のような

銃で撃つ、忍者は避ける。

忍者の素早い動きにサムスはついていけない。

戦士は、ゼルダとピーチを守りつつ、銃を忍者へ向け

撃ち続け逃げる。

忍者は追いかける。

すると戦士は二人を片手で一人ずつ抱えた。

「えっ?」

「きゃー!」

「時間だ逃げるぞー!」

そういったとたん戦士は全力疾走で逃げ出した。

忍者は追いかけてやうとする。すると

ポウン

爆発が起きた。忍者は爆風に巻き込まれた。

爆風は広がり

戦士は二人の姫を抱え急いで逃げる。

一方モニター室ではクツパが駆けつけ部下に問いかける。

「何事だ!」

「何者かが時限爆弾か何かを使い、一部爆破させたようです」

「馬鹿者! 外部の侵入を許しておつて!」

するとクツパはピーチのいた檻の監視モニターを見る。

「ピーチがいない! くそっ! 誰だ!」

クツパは急いで犯人を突き止めようとする。

すると誰かが声をかける。

「慌てるなクツパ。シーカー族の忍者の他に

もう一人刺客がいるのだ」

声の主は大柄な邪悪なオーラをまとった男だった。

「どういうことだ? ガノン?」

「ここにはある目的でできたバウンティハンターが

いる。そいつと因縁のある宇宙海賊をつれてきた」

ガノンは微笑む。

一方、逃げ切ったサムスと二人の姫。

二人の姫を開放するサムス。

「痛いじゃないの!」

「いきなり何するんですか!」

しかもあんなに派手に爆発して、私達まで

巻き込まれたらどうするのです?」

「あれしか方法がなかったのだ。時限爆弾をありと

あらゆるここに置き、爆破させそのスキにげる。

最初からの手はずだったのだ」

「だからって!」

ピーチは戦士に反発する。その時。

ガッ!

何者かが戦士の頭を掴み、戦士をさらっていく。

そいつの姿は戦士よりひと回り大きい

おぞましい羽のはえた、ドラゴンのような生物だった

そして彼は叫ぶ

「サムスウウウウ!」

宇宙戦士サムス・アラン

二人の姫を助け、

脱出したオレンジ色のパワードスーツの戦士。

しかし、突然彼の頭を掴み、上空へと連れて行つた。

そして連れられて言つたドラゴンのようないきものは
こう叫ぶ。

「サムスウウウウー！」

サムスと叫ばれた戦士はドラゴンに壁に頭をつけられ
ひきずられた。

「ぐわあああー！」

サムスは苦しがる。

ドラゴンはサムスを地面に叩きつけた。そして、
口から火をはこうとしたその時。

「アチィー！」

ドラゴンのしつぽに炎が。そこでゼルダは言う。

「化け物！ デインの炎で燃えなさい！」

ドラゴンは必死に炎を消そうとする。

ピーチは急いでサムスに近づきドラゴンから遠のかせようと
する。

「コムスメエー！」

ドラゴンはゼルダに向かって飛び込んでいった。

その時

ボガア

「ギャアアアー！」

ドラゴンの目に何か当たるそしてそれは爆発した。

当たつたのはサムスが発射したミサイルだった。

目を覆い隠しジタバタするドラゴンそして

ドガッ！

「ギャアアアアー！」

大きなボールのようなエネルギー弾を発射したサムス。

ドラゴンは吹っ飛んだ。

ピーチとゼルダは気を失ったサムスを立たせ二人で抱えてその場を後にした。

「マテエエエー！」

ドラゴンが追いかけてようとするその時

部屋は大爆発を起こした。

ピーチとゼルダはサムスをかかえ逃げる

「ゼルダよく持てるわね。重い……」

「魔力で力あげてますからね」

するとサムスが反応する。

「二人とも……この先にスターシップという船がある

そこに乗る。操縦は任せてくれ……」

すると大きなオレンジ色の宇宙船があった

三人は急いで乗る。

「ここ狭いわね」

「普段は一人乗りだからな、今から脱出する」

サムスはボロボロの体の中、スターシップの操縦桿を

握りその場を脱出した。

ピーチが出た場所を確認する。

「ここクツパ城じゃないわ。大きいお面がついた

大きな船よ」

それは大きな仮面のついた巨大な戦艦だった。

サムスはスターシップを操縦し下へ降りていく

その時、アラート音がなった。

「どうしたの?」

「エンジントラブルだ! まさか! 奴らがエンジンに

何かを」

「どうなるんです!」

「不時着だ!」

「えー!」

突然のトラブルにあわてるピーチとゼルダ。

スターシップはあたり一面野原のある湖へ不時着した。

一同は気を失う。その後ピーチとゼルダは目を覚まし、サムスをスターシップから下ろす。

「大丈夫？　サムス？」

手当をしようとする、ピーチはあることに気づく「あなたやっぱり……」

サムスは夢を見ていた。幼い頃の夢である。

彼……いや彼女は幼い頃、家族を宇宙海賊に殺された。

彼女は子供の頃鳥人族が住まう惑星ゼーベスにて幼い頃から過酷な訓練をしてきた。

そして彼女は銀河連邦の一員になり、その後

腕利きのバウンティハンターになった。

彼女の着ていたパワードスーツは鳥人族の技術を

駆使して作られたもの。

彼女はそのスーツの力を使い、化け物であるメトロイドの駆除不可能な任務を成し遂げてきた。

彼女が任務中見つけたベビーメトロイド。こやつは

サムスを母親のように慕っており、サムスも大事にしていたしかし、それが先程のドラゴン、リドリール率いる

宇宙海賊に盗まれたのだ。

家族の仇であり、ベビーを盗んだリドリールは

サムスにとって許せぬものだった。

サムスはリドリールを追い先程の戦艦、ハルバードへ侵入した。

サムスはリドリールに襲われそうになる。そこで夢から目覚めた。

「ー」

「気が付きましたか？　サムス？」

サムスはゼルダに魔法で処置してもらっていた。

サムスの姿はパワードスーツでなく

全身が青いインナースーツをきていた

金髪のポニーテールの姿の凛々しい女性として
素顔が現れた。

「なぜ？ 私の名前を？」

「先程の化け物が叫んでましたので……」

先程は助けてくれてありがとうございます」

サムスは少し考えゼルダに言った。

「人質になってるのを見過ぎせなくてな。

まあ、任務のついでだ」

「任務？」

「私の大事なものをあの化け物、リドリーが盗んだのだ

それを取り返すため、あの船に潜入したんだ」

「そうだったんですか……」

ゼルダは治療をしながら納得する。

するとピーチが訪ねる。

「でも、あなた女だったのね。スーツが解除されたとき

姿が出てきて驚いたわ。

どうしてすぐに言わなかったの？」

サムスは少し考えピーチに話す。

「私は仕事柄、女性だということに少しだけ

コンプレックスがある。女性というだけで

男どもは私のことをなめてくるからな。

すまない。隠すつもりはなかったんだ」

「そうだったのね」

ピーチは納得する。そしてサムスが立ち上がる。

「まだ治ってませんよー！」

「大丈夫だ。魔法というのは長く使っていると

お前に負担がかかるんじゃないのか？」

私は大丈夫だ」

ゼルダはとめるが笑顔でサムスはこう答えた。

「これからどうするの？」

「エンジンの部品を集めよう。そうだなこの辺に街が

「あればいいのだが」

ピーチの問いにサムスが答えるとゼルダは提案する。

「ならオネットという街に行きましょう。」

「この辺にあるはずです。」

そこにはもしかしたら部品があるかもしれないよ」

「わかった。そちらへ向かおう。ところで……」

納得したサムスは二人に何か聞こうとする。

二人は首をかしげる。

「まだ、名前を聞いていなかったな。みたところ

貴族かなにかに見えるが？」

サムスがそう言うと二人は笑い紹介する。

「私はピーチ。キノコ王国から来たの」

「私はゼルダ。故郷はハイラルです」

二人が自己紹介するとサムスも言う。

「私はサムス。賞金稼ぎだ」

「賞金稼ぎ？」

「ああ。宇宙のな」

三人は話しながらオネットに向かい歩いていった。

一方、ガノンのいる部屋。

ここに一人入ってきた。

そこには先程サムスに敗れたドラゴン、リドリリーがいた。

しかもその姿はサイボーグのような姿だった。

「無様な姿になったな。リドリリー」

ガノンがそういうとリドリリーは爪をたてガノンを襲う。

ガノンはよけ、ガノンの頭の隣の壁にリドリリーの

爪が刺さっていた。

「フンッ！ まだ制御できぬか。まあ、いい

せいぜい頑張れよ」

ガノンはその場を立ち去る。リドリリーあらため

メタリドリリーはこう思っていた。

（サムス……マツテイロ。ツギアツタラ

コムスメモロトモキサマハ……)

ドンキー&デューデュー

ジャングルの奥。そこで

マリオとの戦いで負けた、ドンキーコングが倒れていた。
ドンキーは目を覚ます。

「ここは？ どこだ？ ボクは一体？」

ドンキーはあたりを見て、自分のナワバリのジャングルと気づく。

「そうか思い出した。たしかデューデューと

バナナを食べてるとき突然デューデューに

矢が刺さりそうになり、ボクが庇ったんだ

そして、うつすらだが、マリオと戦い、ボクは
負けた」

ドンキーは思い出し、地面にパンチし悔しがる。

「くそっ！ こんな形でマリオと戦うなんて

操ったやつは一体誰だ？」

するとドンキーに誰かが近づく。

「デューデュー！ 無事だったのか？」

それは檻にとじこめられたドンキーを助けた
赤い帽子の小猿だった。

ドンキーがデューデューに近づく。その時。

デューデューは木製の銃をドンキーに向けて発射した。
ドンキーは避ける。

「どうしたんだ？ デューデュー？」

ボクがわからないのか？」

デューデューは2つの木製の銃、ピーナッツポップガン
でドンキーを攻める。

ドンキーは避けながら逃げる。

「デューデュー！ どうしたんだ！」

ドンキーはその場に落ちてるライフル型の
木製の銃、ココナッツキャノンを手にし、

デューデューに向け、発泡した。
弾はデューデューにあたった。

デューデューは気絶する。

デューデューに近づくドンキー。

「デューデューー！ デューデューー！」

彼らとの出会いは数年前に戻る。

ドンキーはマリオの祖父の飼っていたゴリラ

克蘭キーコングの孫である

克蘭キーは脱走し、年数が立ちその孫、

ドンキーがジャングルの王者になっていた。

デューデューはその時仲良くなった。

彼の弟分である。

しかしドンキーは街へ行くと

マリオがポリーンという女性と付き合ってるのを見つける。

(克蘭キーがどんな思いをしたか！

マリオ、お前を困らしてやる！)

ドンキーは突然、マリオの前に現れ

ポリーンを攫った。そして工事中のビルの頂上へ上がった。

「マリオ！ 悔しかったらここまで来い！」

ドンキーはタルをつかって邪魔をする。

マリオはタルを避け、上へ登り、鉄骨の弱い部分を破壊し、そしてビルを崩した。

ポリーンはマリオに助けてもらったが

ドンキーは真つ逆さまに落ちて気絶した。

マリオはドンキーをとらえ見世物にした。

しかし、デューデューによって逃げる事ができたのである。

その後、ドンキーはビニールハウスを襲うも失敗し、ジャングルへ帰った。

帰ったそばから二人は克蘭キーという老ゴリラに怒られた!

「何をしておる! お前たち! いろんな人に迷惑をかけおって!」

「ゴメン! ボクは克蘭キーのためだと思って」

「もういいんじゃない、ドンキー。」

たしかにマリオとは因縁があるがもう昔のことじゃ。もう考えんで良い」

落ち込んだドンキーをなだめる克蘭キー。

「それよりもクレムリン軍団がワシらの大事な

バナナを全部盗みよった」

「なんだって!」

驚くドンキーとディーディー

ディーディーが聞く?」

「そもそもクレムリンって何なのさ?」

「クレムリンはな海賊集団で、キングクルールという

やつが率いている。

奴らは残虐非道で各地からいろんなものを盗んでいる。

キングクルールと言うやつは厄介でう。

あやつはすごく強いからな」

克蘭キーが説明すると、ドンキーが自主満々にこういう。

「だいじょうぶさ、克蘭キー!」

そんな奴らボクとディーディーが

ぶっ飛ばしてやんよ」

克蘭キーはそれを聞いて心配そうにいう。

「ドンキー…… たしかにお前は強い。

だが過信はいかんぞ。奴らは

お前が想像する以上に強いはずだ

まずは修行に……」

しかしそこにはドンキーとディーディーはいなかった。

「あいつらめっ！ 人の話は最後まで聞けと言つとるのに
まあ……よいわ。」

ドンキー、デューデュー、あと頼んだぞ」

ドンキーとデューデューはクルールのもとへ急いだ。
部下であるクリッターという人型ワニをたくさん倒し、
やがてクルールの船に侵入した。

「なんだ！ お前は？」

「ボクはドンキー！ そしてこいつはデューデュー！

さあ！ みんなのバナナを返せ！」

ドンキーがでっぷりとした体格の人型ワニを挑発する。

「ザコが！ このクルールに勝てるわけ無いだろう」

ボスワニと思われるこいつはクルールと名乗る。

するとクルールはドンキーに向かって王冠を投げる。

「うわっ！」

避けるドンキー。するとその王冠をデューデューが
広い投げ返した。

「くらえっ！」

王冠は猛スピードでクルールに当たろうとする。

するとクルールは大きな壺のようなものを用意した。

そしてそれは掃除機のように強い吸引力があつた。

王冠はツボに吸い込まれ次の瞬間、猛スピードで吐き出し
デューデューに向かった。

「ぐへっ！」

叫び声がした。しかしデューデューは無事だった。
王冠に当たったのはドンキーだった。

「ドンキー！」

「ハッハッハッ！ 自ら当たりに来るとは

間拔けなゴリラだ！」

しかしドンキーはおじけなかった。ドンキーは王冠を
しっかりと持っていたのだった。

「何さー！」

驚きのあまり口を開けるクルールにドンキーは
野球の投手ようなフォームで豪速球で

王冠をクルールに投げた。

「させるかー！」

しかしクルールはラッパの銃で吸い込む

王冠は吸い込まれた。

(よしこれで発射すれば)

クルールは引き金をひく。しかし王冠は出ない。

(あれ？ おかしいな？ この！ この！)

クルールは何回も引き金をひく、その時。

ポオン

銃は爆発した。王冠が銃の中に詰まり、無理に

引き金を引いたから爆発したようだ。

動きが止まったクルール。

そこにディーディーが上から降って来て

王冠のないクルールの頭を踏みまくる。

「ギャー！ 痛い！ 離れろ！」

「じゃあ離れるよ」

ディーディーは言われたとおりクルールから離れた。

「全く！ ヒッ！」

クルールは驚く。それはかなり近づき睨むドンキーであった。

「やだなー ドンキーさん。ほんのジョークだよおー

奪ったバナナは返すから、命だけは見逃しを！」

土下座を何回もするクルール。

しかしドンキーは許さなかった。

そしてドンキーはクルールにパンチを連打しまくる。

「ウギャアア！」

ボコボコにされた クルールは船の外に

ふつとばされ、海の中へ。

「クルール様！ みんなクルール様を助けるぞ！」

部下の人型ワニ、クリッターたちはクルールを助けに

海に飛び込む。

ドンキーとデューデューは盗まれた大量のバナナを奪い返し、ジャングルに帰っていった。

そして月日がたち、ドンキーとデューデューはバカンスをしていた。

しかし、突然デューデューに矢が向かってくる。それをドンキーがかばったのである。

矢を受けたドンキーは凶暴化し、ジャングルで暴れたのであった。

そしてマリオに負け、正気に戻ったのである。

「デューデュー！ 起きろ！」

時は今に戻り、デューデューの暴走をとめ、気絶したデューデューをドンキーが起こしていた。

「あれ？ ドンキー？ オイラは一体？」

目が冷めたデューデュー。

「気がついたか、デューデュー。」

お前は正気を失っていた。ボクはその状態で

マリオと戦ったからわかる」

「正気を失ってた？ どういうことだい？」

「ボクが当たった矢がおそらく関係あると思う。」

そうだ！ クランキーに聞いてみよう

クランキーならなにか知ってるはず」

「そうだね！ クランキーのそこに行ってみよう！」

二人はクランキーの家に急いだ。すると二人は信じられない光景をみる。

「ドンキー！ 来るんじゃない！」

クランキーが叫ぶ。そこにはクランキーを檻にとじこめて、高笑いするクルールとその部下

クレムリン軍団がいた。

「クルール！ 生きていたのか！」

ドンキーはクルールをみて叫ぶ。

「俺はワニだ！ あんなんでは死なんよー」
ベロベロバーをして挑発しながらそう言うクルール。
ドンキーは怒りのあまりクルールへ突っ込んで
走ってく。

「バカ！ 来るなど言ってるじゃろー！」
克蘭キーが叫ぶ。するとドンキーの足元が崩れ、
ドンキーは地面に落ちた。

「ドンキーー！」
デューデューが叫ぶ。そこにクルールが
笑いながら喋る。

「馬鹿めー！ ドンキー。」

お前の動きはお見通しだ！」

ドンキーは落とし穴に落ちて這い上がろうとする。

「ドンキーー！ 今助けるよー！」

ドンキーを助けるため樽型のメカ、バレルジェットを
背中に背負い空を飛ぶデューデュー。しかし、

「ぐへっ！」

デューデューが鉄球に当たる。デューデューは
そのままドンキーの入った落とし穴に入ってしまう。

「デューデューー！」

デューデューは気を失っている。

デューデューを抱え必死に落とし穴から
上がろうとする。

「ハッハッハッ！ とどめだー！」

クルールがラップパ型銃をドンキーたちに向ける。

その時。

「ぐへっ！」

何かがクルールの顔にあたり、クルールが吹っ飛んだ。
後ろにはカービィの村の食べ物盗んだ、
デデデがいた。

「なんだ！ お前は！」
起き上がったクルールが聞く。

「俺様の名前はデデデ。偶然立ち寄ったら

この騒ぎだったから、助太刀してやったわ」

「くそっ！ このアヒル顔が！ 覚悟しろ！」

腹を立てたクルールは起き上がり、ラツパ銃から鉄球を発射した。

デデデにそれは向かう。次の瞬間、

デデデが思いつきりハンマーをフルスイングし

その鉄球を跳ね返した。

「ゲー！」

鉄球はクルールにあたり、クルールは吹っ飛んだ。

「覚えてろよー！」

叫ぶクルール。それを追いかける部下のクリッターたち。

事態が収まり、デデデは克蘭キーを助ける。

ドンキーたちも穴から這い上がる。

「ありがとう。どなた様じゃ？」

「俺様はデデデ大王。ププランドの王である」

「なんと！ 一国の主とは！ 失礼した。」

おい！ ドンキー！ お前も頭を

さげるのじゃ」

克蘭キーはデデデに頭をさげ、

ドンキーとディーディーも無理やり下げる。

「しかし、お前たち！ どこへ行ってたんじゃ！

ワシはバナナをくれと脅され、クレムリンどもに

捕まってたのに！」

怒る克蘭キーに

ドンキーたちは申し訳なさそうに

こう言う。

「克蘭キー、ごめん。」

実はそのことで聞きたいことがあって」
クランキーに自分が暴走したことと、矢のことを伝える
ドンキー。

「なるほど。そんなことがあったのか。」

おそらくその矢には何か力があるのかもしれない。

そういえばクルールがもつてたのう。

もしかしたら、お前さんやデューデューに

当たったのはクルールかもしれない。

もしかしたら他に矢の被害にあってるやつが

いるかもしれない」

「えっ！ そりゃ大変だ！」

クルールの話にドンキーは驚く。

「ドンキー、デューデュー！ 矢の謎を解くんじや

そのためにたびに出ろ！ クレムリンが

また動くかもしれないし

とりあえずオネットという街に迎え

わしの感がそこだと言ってる」

「わかった。クランキー！ ボクに任せてよ！」

「頼んだぞ。ドンキー、デューデュー。それとじや」

ドンキーを呼び止めるクランキー。

「またマリオと会うことがあるじやろうが

その時は力を合わせるのじや

争ってはいかん」

少し考えドンキーは言う。

「わかったよ、クランキー。」

デューデュー行こう」

「うん！」

デューデューとともに旅立つドンキー。そこに

デデデが話す。

「俺様も行く」

「いいのかい？」

デーデーが決意したデデデに聞く。

「この先、俺様を森でとっちめた、

ピンクのボールのやつがいるかもしれない

そいつを一緒にたおしてほしい」

「そいつは悪いのかい？」

デーデーが聞く。

「ああ、俺様の食べ物を盗んだからな」

「そいつは悪い！ よし、クルールのついでに

そいつもとっちめよう」

こうしてドンキー、デーデー、デデデは

オネットへ向かい旅立つのであった。

「ところで、オネットってどこだ？」

こう言うドンキーに二人は呆れてた。

仮面の剣士対亡国の王子

デデデをとつちめて、オネットトへ向かう、リンク、カービィ、ヨッシー。

3人はリンクは馬のエポナに乗っていた。カービィは喜びながらこう言っていた。

「お馬さん楽だね。誰かさんと違い」

ヨッシーは少しムツとしていた。しかしリンクが落ち着かせる。

カービィはまたお腹をすかせていた。

「あー！ お腹空いた！」

「まだ言うか！」

「僕は食べ物をいくら食っても足りないんだよ」

ヨッシーは納得が行かないが

二人が口論になる度がリンクは止める。

するとヨッシーは冗談混じりにこう言う。

「そんなこと言っていると空から剣でも落ちて

きちやうんじやない？」

「ハハハ！ そんなことあるわけ無いじゃん」

カービィは笑う。すると

グサツ！

「うわっ！」

エポナの目の前に小さめの片手剣が

エポナは少しびびりして興奮するが

リンクが落ち着かす。

降ってきて地面に刺さった。

(ホントに降ってくるなんて……)

怖がるヨッシーとカービィ。すると誰かが言う。

「剣をとれ！」

ヨッシーとカービィはリンクを見るが

リンクは必死に横に首を降る。

「ここだ！ カービー！」

その声は木の上からだった。

見上げた3人。するとそこには銀の仮面を顔につけた

カービーと同じ背丈のマントをつけた

騎士風のボール型の男がいた。

「剣を受け取れ！ カービー。そして私と戦え！」

「君は一体誰？　そしてなぜ僕の名前を」

「なっ！」

仮面のボール男は少し驚く。

（どういふことだ！　まさか記憶を失ってるのか）

「我が名はメタナイト。ププブランドの大王

デデデの元にいる」

「デデデの手下か！　食べ物返せ！」

カービーは名乗ったメタナイトに怒るように言う。

「待て！　カービー。私もあの男に対して

疑問に思うことはある。私の野望、それを

成し遂げるためには彼の部下でならなければいけない

理由がある。

そして……」

すると突然メタナイトはマントをコウモリの羽に

変え、カービーの元へ急速に近づいていった。

「さあ！　私と戦え！　カービー！」

カービーは剣を吸い込む。すると

カービーは緑の三角帽子を被り、剣を持つてる姿

になった。

リンクはその帽子をみて少し驚く。

その帽子は彼を助けてくれた二人の少年剣士の

帽子と同じだったからである。

カービーは襲いかかるメタナイトの剣を受け止める。

カービーはコウモリの羽で飛行しながら剣をふってくる

メタナイトに応戦するが、カービィは劣勢になる。

「やるな！ 記憶を失ってもやはり星の戦士。」

我が後輩として申し分ないな」

「後輩？ 星の戦士？」

カービィは疑問になりながら戦う。

そしてメタナイトはカービィの剣を弾く。

「あっ！」

カービィの剣は宙に放り出され地面に刺さる。

「どうした？ その程度か？ 最強のコピー能力

浮遊能力を持ってても剣の腕がないと

陛下やクツパ大王、そしてガノンなど倒せんぞ！」

リンクとヨッシーは反応する。

（あのカービィもどき、なぜクツパのことを？

しかもカービィのことをなんであんなに？）

ヨッシーは考える。

メタナイトは剣のないカービィに斬りつけようとする。

その時。

馬から降りていたリンクがメタナイトの剣を受け、

カービィを庇う。

「どけっ！ ハイラルの剣士！ お前の剣の腕など

私には及ばない！」

リンクはメタナイトと互角に戦う。しかし

リンクは劣勢になり尻もちをついてしまう。

「伝説の勇者の名をもってても剣の腕が無ければ

意味がない。強くなれ！」

メタナイトがそう言ったその時

カンッ！

「な！」

メタナイトの仮面に何かが当たった。

そこには剣を持ったカービィがいた。

（弾いた剣を吸い込み、そして再びソードカービィに

なつたわけか。さすがカービィ、侮れん

だが、それがどうした剣の腕は私の方が上だ）
メタナイトはカービィに斬りかかる。

しかしカービィはよけメタナイトに斬りかかる。

「何っ！」

カービィが優勢になる。しかしメタナイトは
うまく避けカービィの後ろをとる。そしてカービィは
それを受ける。

「私はお前と違い、剣を構えながら空を飛べる

そこがお前との差だ！」

メタナイトが再び優勢になるしかし、カービィは
剣を受け再びメタナイトを追い詰める。

（なっ！ どういうことだ！ 剣の腕は私の方が
上なはずなのに）

「お前はリンクをバカにした！ だから許せない！」
カービィはメタナイトと剣を交えながらこう言う。

（なるほど。こいつ、仲間のピンチで強くなっているわけか
そして私の攻撃を見抜いてると）

「今だ！」

カービィの剣はメタナイトの仮面に当たる。

「しまった！」

必死に剣を受けようとするメタナイトだが、
仮面に何度もカービィの剣があたる。

（そんな！ この私がカービィに！）

メタナイトは絶えれず、そして、カービィの剣を
受け、吹っ飛んだ

「ううっ！」

地についたメタナイト。そこには真つ二つに割れた
メタナイトの仮面がおかれてあった。

カービィ、ヨッシー、リンクの3人は仮面の取れた
メタナイトに近づき、そして彼の素顔をみる。

それは、カービイを濃い青の色にしたような黄色い目のボール型の生き物だった。

「こいつカービイにそっくりだ」

「ホントだー」

ヨッシーとカービイはこういい、リンクも驚いてじーっと見ている。

メタナイトは気がつく。

「くっ！ カービイ私はまだ戦えるぞ」

メタナイトはこう言う。リンクは水たまりに指をさす。

メタナイトは水たまりを見た。

「なっ！」

メタナイトは仮面が取れてることに気づき

マントを自分にかぶせた。

そしてしばらくすると、元の仮面をつけたメタナイトに戻った。

「カービイ、今日は私の負けだ。だが、お前はまだ弱い

あと、ハイラルの騎士。お前もだ。

これから強い敵に会うであろう。

私よりもな」

そこでカービイは聞く。

「ねえ？ 教えて？ キミは僕のことを知ってるの？」

メタナイトは少し驚く様子はあったが

カービイに説明をする

「どうやら本当に知らないようだな。わかった。

私、メタナイトは宇宙を守る星の騎士だ。

悪しき存在ナイトメアを封印し、後輩たちを

鍛えていた。

その中で一番若く、落ちこぼれがいた。

それがカービイ。お前だ」

「えっ！ 僕？」

「私は日々日々お前に剣を教えた。しかし何度やっても

お前は上達せず、挙げ句の果にはこっさり
訓練をサボり他の星にいつてるではないか！
しかもいざ会ったら、記憶がないだと
ふざけてる！」

メタナイトは怒る。そこでヨッシーは聞く。

「カービィ？ 何か心当たりないの？」

カービィは思い出す。

それはププランドの民にデデデから食べ物を
盗まれ、村人から懇願される前のことだった。

カービィは気を失っており、大きな星が

地面に刺さっていた。それは乗り物に見える。

カービィは偶然通りかかった村人に起こされていた。

「気が付きましたか？ どうかお願いします！」

デデデのやつがこの国の食べ物を

全部とつちまっつて、あなた様が頼りです」

カービィは頼まれこう答えた。

「よし！ わかった。悪者退治なら

このカービィにおまかせ」

「ありがとうございます！」

村人は何度も頭を下げた。

カービィはデデデ退治に向け旅に出る。

しかしカービィは心の中でこう思っていた。

（しかしなぜ僕はあんなところで寝てたのだろう。

それまでのことよく覚えてないし。

まあ、いいか！）

この後カービィはマリオたちと対決し

現在の状況になった。

そして話は現在に戻る。今の話をカービィは
皆にした。

「なるほど。おそらく、星の戦士の頃のごとは
落下のショックで忘れてしまったようだね」

ヨッシーか冷静に分析する中、メタナイトは
呆れ、こう思う

(カービー……かなり面倒なことになってるな
これだとカービーがガノンたちを倒すのは
気が遠くなりそうだな。

だがもう一つ希望がある)

メタナイトはリンクの方を見てこう言う。

「ハイラルの勇者よ。まさかお前も記憶がないのか？」
リンクは頷く。

「なるほど。では語るか。」

お前は何千年も続くハイラルの勇者、

リンクの名を持っているはずだ。

伝承によると

災いのガノン現れるとき、ハイラルの姫、ゼルダと

勇者が力を合わせ、それを倒すということだそうだ」

するとリンクは自分にテレパシーで送った

少女の声を思い出す。

あの声の女の子、彼女がゼルダ姫なら

俺は守る！

そう心の中で決意するリンク。メタナイトは

続けていう。

「だがその剣の腕はまだまだだ。」

私が鍛えてやろう。そして、君たちには

私の船をガノンから返してもらわなければいけない」

「ガノン？ さっきリンクが倒すと言ってた敵の？」

ヨッシーが問うとメタナイトは答える。

「そうだ。ガノンは私の船、ハルバードを奪い、

今も上空にある。」

私はそれを奪還する仲間を探していた。

そこで君たちには手伝ってもらいたい」

そこでカービーがメタナイトに言い返す。

「それよりも、デデデを追っかけるのが先だ」

「だめだ、カービィ！」

あのバカ大王のことは忘れろ」

「でも、食べ物が……」

「カービィ！ おそらくデデデはガノンと

取引してるはずだ。ガノンを倒せば……」

カービィと口喧嘩をしていたメタナイトだが突然うなりだす。

「ううっ……」

「どうしたの？ お腹痛いの？」

カービィは心配そうに近づく、その時

リンクは何か気づき、とつさに剣を抜く。

するとメタナイトがカービィに斬りかかってきたのである。

その寸前でリンクは剣で剣を受けたため

カービィは無事だった。

「メタナイト！ いきなり何を！」

ヨッシーが聞く。するとメタナイトが言う。

「残念だったな！ 俺はメタナイトであつてメタナイトでない！」

3人は驚く。そしてメタナイトは

自らの仮面の左側を一部破損させ、こう名乗った。

「我が名はダークメタナイト！」

メタナイトの影だ！ メタナイトは死に

今この体は私ものになっている」

よく見るとメタナイトの体は黒になっていた。

そして、ダークメタナイトはこう言う。

「私の目的はただひとつ！ カービィ！」

貴様の命だ！」

するとダークメタナイトは剣を向けカービィに襲う。まだソードカービィの状態だったカービィだが

とつさに反撃できず、ただ驚くだけ。
しかし、その時リンクがダークメタナイトの剣を
剣で受けた。

「どけっ！ お前では相手にならない」

リンクはダークメタナイトと戦う。しかし、
相手にならず、剣を弾き返される

リンクは剣を拾おうとするが

ダークメタナイトが背後にまわり

後ろから剣をつきたてられる。

「剣士が背後を見せるのか？」

リンクは悔しいが動けない。

その時、ダークメタナイトにヨッシーが
卵を投げる

そしてカービイがダークメタナイトに斬りつける。

しかし卵は避けられ、

カービイの剣をダークメタナイトは受ける

「カービイ！ 私はメタナイトと違う！ 死ぬ！」

ダークメタナイトはカービイを斬りつける。

「うわああ！」

カービイは追い詰められる、その時、

何者かがダークメタナイトを斬りつけた。

「何！ 私が追いつけなかっただど！」

その早い剣さばきはダークメタナイトを苦戦させる。

しかしダークメタナイトは体制を立て直し応戦する

だが、連戦で疲れが出ていた。

ダークメタナイトは隙を見せた。

「しまった！」

突然現れた素早い剣士の剣がダークメタナイトに

あたった。そして剣士は姿を見せる。

それはリンクが戦っていた青いマントの若い青年剣士
だった。

「ええい！ 邪魔が入ったか。」

今はまだこのメタナイトの体になじまん。

が、カービィ！ 貴様の命絶対に終わらせてやる」
そう言うのとダークメタナイトはマントで全身をおおい
そのまま消えていった。

ヨッシーはカービィを背負い、リンクに近づく。

「大丈夫かい？ リンク？」

「僕の心配は？」

カービィが嫌な目でヨッシーに尋ねるが
ヨッシーは無視をしリンクを心配する。

リンクは立ち上がり、ヨッシーたちに心配をさせない
様子だった。

近づいたエポナも心配してる様子だったが

リンクはエポナの体をなで

彼女にも心配させない様子だった。

するとリンクにダークメタナイトと戦っていた
マントの青年が近づく。

「大丈夫か？」

リンクは心配する彼をみて

表情を変え、すぐに剣を構えた。

「待ってくれ！ 僕は敵ではない。」

第一君たちを助けたんだ。信じてくれないか？」

リンクは警戒するものの剣を納める。

「君は誰？」

カービィが尋ねる。

「僕はマルスよ」

青年はマルスと名乗る。

リンクは何故、マルスの洗脳が解けていたのか
気になっていた。

リンクは自分と戦っていたことを
覚えてるか聞いた。

「覚えていないが、感覚は覚えている。
あのとき僕が覚えてるのは……」

マルスは語りだす。

マルスの話によると、彼はかつて
仲間たちと戦っていた。

彼の国、アリティアは滅ぼされるも

太平の世のために戦っていた。

そして、悪しき者を滅ぼし、彼は

滅んだ故郷を立て直しその国の王となっていた。

しかし、彼の国に何者かが潜入。

それは着ぐるみのようなプリムという戦闘員だった。

マルスたちは抵抗して闘った。

マルスは自らの婚約者シーダを助けに

彼女の部屋に立ち寄った。

「シーダ！ 大丈夫か？」

「マルス！」

マルスが助けに行くと青い長髪の女性シーダが
地面に手と膝をついていた。

マルスはシーダを心配に思い彼女に近づく。

「マルス様……わたしを助けに来てくれたのね

ありがとう」

「当然じゃないか、シーダ。ここにも

ぬいぐるみみたいなあの敵が？」

「ええ。でも兵士や私が退いたわ。早く避難しましょう

他の兵や民も含め」

「そうだな」

マルスとシーダは城から逃げようとする。

その時巨大な男が道を塞いだ。

「お前は！」

その姿はガノンドロフであった。

「悪いが貴様の国には滅んでもらおう」

ガノンは雷の魔法でマルスとシーダを翻弄する。

マルスは雷をよけガノンの懐に入り剣で勝負する。

「小賢しいザコが！」

ガノンはマルスの剣を自らの大剣で弾き返す。

「マルス様！」

シーダがやりを持ち駆けつける

「邪魔だ！ 小娘」

「うっ！」

ガノンは向かうシーダに手を向けると

シーダは衝撃波のようなもので遠くへ

弾き飛ばされてしまった。

「シーダー！」

シーダは頭を打って気を失っていた。

「よくもシーダを！ うっ！」

マルスはガノンに剣で貫かれていた。

「悪いなマルス。お前の力が必要なのだ。

我が野望のために」

ガノンは倒れたマルスを肩で抱え、その場をあとにした。

「マ……ルス……」

シーダは目をあげマルスがガノンに

連れてかれる様子を見ていた。

そして再び気絶した。

そしてマルスは洗脳され、リンクと戦うのだが

その時のことは覚えていなかった。

しかし、洗脳が解けたあとのことは覚えていた。

「うっ…… マ……はっ！」

マルスが見ると、リンクを助けた緑の帽子と木こりの

ような服を着てる子供の剣士と

それを更に小さくした猫目の剣士が

赤髪のマントの少年を追い詰めていた。
マルスは止めにはいろいろと立ち上がるその時
ビュン

光線が二人の子供剣士にあたった。
マルスは光線の出先をみた。

そこには白い髪のツインテールで黒いローブを
来ている少女がいた。

ボロボロになっている二人の子供剣士。
そこにどこからともなく、子供剣士を
斬りつけるものが現れた。

それはマルスに似た髪の色をもつ
たくましい体つきの右腕を
むき出しにしている青年剣士だった。

青髪の剣士と赤髪の剣士は二人の
子供剣士を追い詰め、二人を倒した。

「なっ！」

驚くマルス。赤髪の剣士たちは
二人の子供剣士を連れて行った。

マルスはここまでのことをカービイたちに話した。
リンクは少し残念そうにしていた。

あの二人が負けたとは……二人はどうなったんだ。
リンクはそう思っていた。

(あの少年たちも心配だが、シーダはあの後
無事なのだろうか。それは気がかりだ)

マルスはそう思っていた。そこでヨッシーが
声をかける

「マルスも僕たちと一緒にいこう。」

マルスの故郷にもそのうちたどり着くかも
しれないし」

「そうそう。旅は道連れ」

(調子いいな。カービイは)

ヨツシーに乗っかるカービー。

マルスは彼らに言う。

「もちろん。僕は君たちを信じる。

それにあの仮面の騎士とはもう一度戦いたい」
マルスは決意する。

「よし。それならオネットにさっそく行こう」

「こら！ カービー先行くなって！」

走るカービーをヨツシーが追う。

リンクはエポナに乗りゆつくり進む。

マルスはリンクに話しかける。

「リンク、昔聞いたことあるのだが、

かつて傭兵をやっていた男がいたんだ。

その男は剣の指導をしているそうだ。

その男に教えてもらえばあの仮面の騎士に

も腕が届くんじやないのか？」

リンクはそれを聞いて決意した。

その男のもとに修行し、メタナイトに勝つ！

そう決意した。

そして一行はオネットへ目指した。

そしてオネットへ

ガノンが乗った戦艦ハルバードから脱出した。ピーチ、ゼルダ、サムスの3人の女性。彼女たちはサムスの宇宙船、スターシップが不時着し、エンジンの代わりになるものを探しにオネットを目指していた。

「随分と遠いのか？ そのオネットというのは？」
パワードスーツが破壊され、素顔をみせてる
青いインナースーツのサムスが聞く。

「ええ。私には感じるのです。すぐ近くにあると」
「そうか。頼りにしてるぞゼルダ」

「はい」

ゼルダとサムスはこう話していた。

ピーチはサムスのインナースーツをみてこういった。

「サムス、その格好ちよつと恥ずかしくない？

　　こういうのもなんだけど裸に見えるし」

サムスは冷静に返す。

「パワードスーツになるときは

このインナースーツをつけなければならぬ

この服は潜入捜査に適しており、身軽に動ける

パワードスーツほどではないが

耐久性はある。

一応普通の服もあるがお前たちの護衛にはこれが適してると思ってるな」

（堂々してて、頼もしい。）

リンクもこんな感じかしら？）

（女性なのに恥ずかしくないのかしら？

変な人）

ピーチとゼルダはそれぞれそう思っていた。

すると、どこからともなく声が聞こえた。

「ピーー！ ピカーー！」

サムスたちの目の前には川があつた。

川は激流であつた。

その向こうには小島があり、

そこにうさぎの耳のような長い耳の

黄色い色をした尻尾の大きい、赤い頬の

生き物がいた。

「何かしらあれ？」

「ちよつと凶暴かも」

ピーチとゼルダは戸惑う。しかしサムスは

「助けよう！」

「えっ！」

ピーチとゼルダは驚く。ゼルダは言う。

「でもサムス！ この激流じゃ無理ですよ！」

サムスは黄色い動物のいる島の木の枝に

狙いを定めた。自身の持つているパラライザー

のモードを切り替え、ムチのように

木の枝に捕まつた。

そして、黄色い動物のいる島へ移つたサムス。

「もう大丈夫だ！ さあ、私に……」

「ピカッ！」

サムスが手を差し伸べようとしたとき

黄色い動物は勢いよく頭突きをした。

サムスは突き飛ばされた。

「サムス！」

ピーチとゼルダは叫ぶしかし、寸前でサムスは

ピーチとゼルダのいる地面に

パラライザーのワイヤーで捕まっていた。

ピーチとゼルダは引き上げる。

すると、そばにはさきほどの黄色い動物が

いた。

「さっきの頭突きでこっちまで移動したのか！」
黄色い動物は3人のからに向かって高速移動し
飛びかかってきた。

「二人とも私から離れろ！」

ピーチとゼルダから離れ黄色い動物の注意を
引きつける。

サムスはパラライザーで攻撃した。しかし
黄色い動物は麻痺せず立ち向かう。

(どういうことだ？ パラライザーがきかない)
黄色い動物は電撃で攻撃してきた。

サムスはそれを避ける。

(こいつ！ 電気の抵抗がある生き物か！)

電気の攻撃は聞かないわけだな。

しかし、これで引きつけ、

ゼルダやピーチからは遠ざけた。

あとはどうするかだ)

サムスは逃げながらそう思いパラライザーの
ワイヤーで気に捕まり、

木の影に隠れ黄色い動物の黄色い動物の様子を
伺っていた。

黄色い動物は警戒してあたりを探す。

すると何かが黄色い動物にあたった。

「ピカッ！」

それは大きな大根だった。

ピーチとゼルダが地中から引っっこ抜いて
それを投げていた。

「ピーチ、これって食べ物なのでは？」

「いいのよ。これ当たると地味に痛いよ」

ゼルダは疑問を抱きながら大根を投げ

ピーチは楽しそうに投げていた。

黄色い動物はこの地味な攻撃を痛がっていた。

「バカ！ お前たち！ 私がなんのために

ここに来たと思ってるんだ」

「何言ってるのよサムス。私達は友達じゃない
友達を見捨てることはできないわ」

「そのとおりです。サムスは私達を助けてくれた。

私もあなたを助けてたい。エイっ！」

ゼルダは黄色い動物の周りに集まった野菜に
魔法で火をつけた。

「デインー！」

「ピカッ！」

黄色い動物は炎のダメージを受ける

「やったあ！」

ゼルダは喜ぶ。しかしサムスは反論する。

「だめだゼルダー！このままではこいつが燃えて

死んでしまう」

「でも、このままじゃサムスが……」

二人が話ししてるその時。サムスが身隠れしている木に
何かがあたった。

サムスは寸前でジャンプし地面に着陸した。

「今のは雷！ やつがやったのか」

雷はサムスが身隠れしていた木を燃やした。

その時燃える木とゼルダが燃やした野菜により
野原は炎で燃え盛る。

「ピカアッ！」

黄色い動物は炎によりダメージをくらう。

サムスは必死になり、炎の中へ進んだ

「サムス！ 無茶よ！」

「大丈夫だ！ これぐらいの炎私には！」

サムスは炎の中に入り黄色い動物をたすける。
動物は気を失っていた。

「炎が！」

ピーチは驚く。

「水だ！」

サムスはピーチと共に川で水を組み必死に消そうとするが炎のは消えない。

(私のせいだ)

ゼルダは自らの行いを悔い念じた。

そしてゼルダのその願いに答えるよう川の水の多くが浮き出し炎の上にかぶさった。

炎は消えた。

しかし水の量が多く

それが原因でゼルダたちもどこかわからぬ場所に流されてしまった。

気を失っていたゼルダ。ゼルダはピーチとサムスに起こされる。

「ゼルダ！ 大丈夫か？」

「ここは？ 私達助かったの？」

ゼルダは目を覚ます。

「よかったわ、ゼルダ。あなたが助けてくれたのよ」

「私がいみんなを助けたの？ よくわからないけど」

「お前が助けたいという願いが、私を

助けたのだ。私にもよくわからないが」

3人は安心したようだった。

「あとこいつもだ」

サムスは先程戦っていた黄色い動物を抱えていた

「こいつ生きてんの？」

ピーチは疑問に感じる。

「でもよく見ると……かわいい」

「たしかに……かわいいわね」

ゼルダとピーチはさつきまで恐れていた黄色い動物をかわいいと思い始めた。そして、動物は

目を覚ます。

「ピカ……ピカ？」

目が冷めた動物に身構える、ピーチとゼルダ。しかしサムスはおじけなくそいつを抱えてたサムスは笑顔で言う。

「安心しろ。こいつはもう攻撃しないだろう。」

しかしこいつはなんて名前なんだろうな」

「ピカチュウ」

サムスが疑問に思うと動物はそう鳴く。

「きつきと鳴き声が違うわね」

「これが名前かもしれない。なるほど」

ピカチュウか」

ピーチが鳴き声に疑問をもつサムスはこう言い返した。

「よろしくな、ピカチュウ」

「ピカ！」

ピカチュウは答える。その後ピーチが話しかける。

「でも、あれから結構流されたわね。」

あの宇宙船大丈夫かしらね？ オネットも

どこにあるかわからないし」

「スターシップからは距離がある。心配は

するな。ん？ どこに行くんだ？ ピカチュウ？」

ピカチュウはいきなり飛び出した。

ピカチュウについていく3人。その先には街があった。

「ここが……オネット？」

「ピーチ、間違いないです。ここがオネットです」

「この街がオネットか……」

「ピカ！」

サムスたちはオネットにたどり着いた。

そしてオネットにたどり着いたのは

サムスだけではなかった。

「やっとなどりついたよ。ドンキー。」

もうドンキーが道迷うから時間かかっちゃったよ」

「確かに、ドンキーについてくるとろくなことないな」

「二人ともひどいなあ。ついたからいいじゃないか」

森からドンキーたちがオネツトへやってきた。

またある場所では。

「あ、街が見えるよ」

「どうやらついたようだね」

カービィとヨツシーがオネツトを見つける。

馬のエポナに乗ってるリンクとマルスも

オネツトを確認する。

「あそこがオネツトか。あそこになにかあるんだね

リンク」

リンクは頷く。リンクはゼルダという少女が

ここにいると確信し、オネツトへ向かっていた。

そして、ここにもオネツトにたどり着いた

者がいた。

「イテテ、全く……一体ここはなんだ？」

「ブラックピット！ 生きてたか」

オネツトの外側に不時着したブラックピット

そこにクツパの部下のブラックンフラワーが

合流する。

「お前は確かブラックンフラワーといったな

俺に何のようだ？」

「お前、マリオやオリジナルに負けたそうだな」

ブラックンフラワーの言葉にブラックピットは

機嫌悪そうに返す。

「うるさい！ お前こそなんだ

俺に何のようだ」

「お前がピットやマリオと共にこのオネツトに来たのは

知っててな手をかそうとしたんだ。

「そういえばお前、弓と矢はどうした？」

ブラックピットは自身の武器、弓と矢を
持ってなかった。

「落ちた衝撃にどっか行っただらろう？」

「あんなおもちや必要ないね」

「必要ないとはなんだ！ あれは普通の人間が
持ったら大変なことになるんだぞ！」

パクションフラワーは怒る。

「だが、クツパ様から一つ預かってるものがある」

パクションフラワーはそう言うのと、口から何か出した。

「うわっ！ 汚え！」

パクションフラワーからでたのは唾液まみれの

黒い杖だった。

ブラックピットは必死にふき、その杖を手にとった。

「それは狙杖だそうだ。天界から奪ったものに

お前専用にくツパ様がカスタマイズしたそうだ」

「へえ！ いいねえ！」

ブラックピットは狙杖を気につた。

「待ってるよピット。これでお前を倒してやる。

行くぞパクション！」

「おい！ まて！ 俺をおいてくなー！」

ブラックピットは飛び立ちオネットへ向かう。

パクションフラワーはそれを追う。

こうして各々が一つの街オネットに集まった。

そしてまた、新たな戦いが始まるのであった。

オネツト編

失われた帽子を求めて

ここはオネツト。住宅が多く、栄えてる街である。
ここにマリオとピットが雲海から
ワープしてやってきた。

「ここは一体……確かマリオはオネツトと言ったね」
「看板にはそう書いてあった。とりあえず人を探るか」
探索をしようとするマリオにピットは一つ気づく。

「マリオ、君帽子はどうしたんだい？」

「えっ？」

マリオは帽子をかぶってなかった。

「ない！ 帽子がない！ どこへ行ったんだ！」
慌てるマリオ。

「とにかく街の人たちに聞いてみよう」
マリオとピットは街を歩く。すると前髪がながい
金髪の少年。

「すいませーん。この人の帽子みませんでしたか？」

赤くてMって書いてあるキャップ帽ですが」

ピットが訪ねると少年は答える。

「そんなの知らねえよ。ん？ お前まさか！」

少年はマリオを見て気づく。

「いたぞー！ 賞金100万円！」

「なっ！」

驚いてる二人に金髪の少年は小さなボールを
2つ投げた。するとドーベルマンやシベリアンハスキー
に似たような犬が現れた。

「行け！ ヘルガーー！ グラエナ！」

奴らを捉えろ！」

「なんだあー！ 一体！」

ヘルガーとグラエナは金髪の少年に命令され
マリオとピットを襲いかかる。

「どうなってんだ？ 一体！」

「僕にもわからない！ マリオ！ 今はひたすら
逃げるしかない！」

マリオとピットは2体の犬から逃げる。

骨をまとった犬ヘルガーはマリオに向かってひのこを
吐き出した。

「うわ！ あいつ！ 炎を吐くのか！」

マリオとピットは路地裏に逃げる。

そこは行き止まりであった。

「ハアハア……」

金髪の少年は息切れしつつマリオとピットを
追っかけていた。

「あそこに逃げれば行き止まりだ。 追い詰めたぞ

ハア…ハア…」

金髪の少年は路地裏を見た。 しかしマリオとピット
はいなかった。

ヘルガーとグラエナはそこで立ち止まっていた。

それを見た金髪の少年は2匹を蹴り始めた。

「お前ら！ それでもこのポーキー様の家来か！
しくじりおって！」

ポーキーという金髪の少年グラエナと

ヘルガーの腹を何度も蹴った。

上空へ逃げたピットとマリオはポーキーの醜さ
を見ていた

「あいつ自分の飼い犬を……なんてやつだ」

マリオはピットに持ち上げられ、空を飛んでいた。
しかし長くは飛べなかったので再び人の

いない路地裏にたどり着いた。

「こんなところにいると怖い人にお金取られるかも

あつ、でも僕たち持ってなかったね」

「そんなやつがいたって僕が返り討ちにしてやる！」
ピットの話にマリオが返す。するとそこに何者かが現れる。

「うわっ！ 出たっ！」

そこにはシルクハットの形をした小さいオバケがいた。

「出たな！ テレサ！」

「待つて！ 僕は君たちの敵じゃない」
オバケは言い返す。

「君はいつたい？」

「僕の名前はキャツピー。カブロン族という一族さ」

最近、奇妙な事件が起きててねえ」

「奇妙？」

すると、キャツピーは壁を見せる

すると落書きが多くペンキで多く落書きが描いてあった。

「落書きがこんなに！ なんでだ！」

ピットが驚くとキャツピーは答える。

「わからない……。あと奇妙なのは

この犯人だ。目撃者の証言でこんな
指名手配があるんだ」

するとマリオとピットは目を疑った。

「これはマリオじゃないか！ しかも賞金100万！

ありえない！ こんなもの！ しかも

落書きだけで100万とは奇妙だ」

「だろう？ マリオは心当たりある？」

マリオは首を横に振る。

「一体誰が？ 誰かが変装しているのか？」

悩んでる3人。するとキャツピーはあることに気づく。

「そういえばマリオ？ 帽子は？」

マリオは知らぬ間になくなったと話す。

「しようがない……」

キャツピーはマリオの頭にのっかり

マリオの帽子の形になった。

「これは？」

「しばらくはこの姿で君と冒険しよう。」

さっそく犯人探しだ」

マリオ、ピットはマリオの帽子になったキャツピーと

共にマリオに化けた落書き犯を探るのであった。

マリオたちが歩いてると屋根の上に

楽しそうに銃を撃ち合ってる少年少女がいた。

少年のほうは青い髪をして一つ結びしてる男の子。

女の子はシャツを着ており長いもみあげのような

オレンジの長髪の女の子である。

二人はインクの入った銃で互いに撃ち合っていた。

「あの二人はインクを使ってたたかってる！」

アイツらが犯人か？」

ピットが怪しがる。

「違うよ。ピット！ 彼らはナワバリバトルを

してる種族さ」

「ナワバリバトル？」

キャツピーの言葉に気になるピット。

「ナワバリバトルは彼らの一族、インクリングの

伝統みたいなものさ。インクを辺り中にか

その色の範囲の大きさで得点を稼ぐのさ

今日はナワバリバトルの開放日だっけな」

マリオとピットはなるほどと思う。

すると先程までナワバリバトルをしていた

二人がいきなり止まりだした。

「どうしたんだ？」

不思議がるピット。すると

インクリングの二人は銃口を向け
マリオたちに撃ってきた。

「えっ！… 何で！… なんでえー！」

怒涛の連射に逃げるマリオとピットであった。
場所は代わり

戦艦ハルバードの中、クツパが雲に乗った
部下ジユゲムから報告を受ける。

「何？ デデデの食べ物が偽物だと！」

「はい、あれはレプリカでした」

「くそっ！ デデデめ！ まあよいわ。

約束を破ったらププランドを消滅

するという作戦だ。デデデめ後悔するがいい」

「それとこれが」

ジユゲムはクツパにあるものを差し出す。

「これは！… マリオの帽子！」

「はい。雲海の雲の床に落ちてました」

クツパはそれを持ち、微笑み炎をはいた。

そしてマリオの帽子は跡形もなく消えてしまった。

「マリオ！ お前は帽子がなければ

何もできないことはワガハイは知っている

これで貴様は役立たずとなったのだ

フハハハ！

さて、あとは逃げたピーチちゃんを

捕まえるとするか」

クツパの笑い声が辺り一面に広がっていた。

弓と矢の秘密

ここはオネット。

ここではカモとイヌがいがみ合っていた。そのいがみ合っているとくに手袋をした一人の男がいた。そいつは弓と矢を持っていた。それは黒い弓矢であった。

「あそこに文字通りカモがいる。試しうちしよう」男は弓を射る。そして弓矢は放たれた。

弓矢は悪のオーラをまとい、カモを貫き、イヌにもあたってしまった。

串刺しみたいになり、2匹は死んだようだった。

「なんだつまらん」

男が矢を回収するため近づき、矢を引っこ抜いた。

男はその場をあとにしようとした。

すると、死んだはずの

カモとイヌが起き上がったのである。

「何いー」

襲いかかるカモとイヌだが、男は慌てて逃げ切る。

「これは面白い。利用できる」

一方場所は変わり、

パクンフラワーとブラックピットは

オネットのカフェで

外にあるテーブル席で話していた。

コーヒーをおいてその場をさった

オレンジ髪のバイトの女性、モナは

二人を不思議そうに見ていた。

「というわけだ。人というものは都合の悪いことは忘れ、自分の都合のいいことだけ覚えてる。

そして悪い思い出だけ明確に覚えており

そのインパクトが強いといい思い出は忘れるわけだ」

バックンが哲学をブラックピットに話す。
ブラックピットはつまんなそうな顔をしており
こう聞く。

「なあバックン、そりやもう三回目だぜ？」

そんな哲学よりも俺の弓と矢について聞かせて
くれないか？」

「あーそうだったな。わかった」

バックンは語りだす。

「お前はピットに似せクツパ様がお作りになった
ピットのクローンだ。そしてその神弓も
また同じ。」

それにはクツパ様の魔力がまつている。
本来の持ち主のお前が使っても問題ないが
普通の人間だと話は別だ。

同じ弓矢を軍団の他のメンバーが持ち
それを使ってるのだがな」

バックンが語るとブラックピットは聞く。

「その差とはなんだ。矢を制御できず

手がボロボロになるとかか？」

ブラックピットの問いに首を横に振る

「いいや、違うな。」

矢にあたったものを凶暴にし、そして

クツパ様かガノン、どちらかが支配するよう
なっている。

クツパ様やガノンはそれで最強の兵士軍団を

お作りになられるのだ」

ブラックピットは納得する。

「お前の矢もその効果がある。」

だから早く見つけないと悪用するやつがいるからな」
バックンがそう話していると、

隣で大量のパンを食べる者がいた。

「うまい」

「こら！ カービィ、食べ過ぎは良くないよ」

そこにはパンをたくさん食べるカービィとヨッシーがいた。

(リンクとマルスは別行動したのだが

やっぱりこいつのオモリは無理だ)

困ってるヨッシー。すると

「ワン！ ワン！」

犬の鳴き声が出た。カフェにいた

チワワやトイプードルがびっくりして隠れてた。

「何だ一体？」

振り向くカービィとヨッシー。

ブラックピットやパッくんも見ていた。

そこには暴れてるイヌとカモがいた。

2匹は無差別に人を襲っていた。

イヌとカモは偶然その場にいたモナに

近づき襲おうとする。

驚きのあまりモナは動けなかった。

モナにイヌが飛びかかろうとしたときなにかが

モナをかばった。

それはパッくんフラワーだった。

「大丈夫か？」

駆けつけたブラックピットがモナに声をかける

「すぐに逃げるんだ」

「は、ハイ！」

モナは店の奥に引っ込んだ。

すると、誰かがパッくんフラワーに声をかける。

「あーっ！ お前はパッくん！」

生きてたんだな！」

カービィが手を指し、叫ぶ。

「戦いはあとだ。今はあの犬を止めるのだ

あの犬は暴走している。止めなければいけない」
パツクンはそういう。

犬はその場にある缶を蹴った。

そしてその缶は床に辺り爆発した。

「うわー、やばいの持つてるー！」

パツクンは目をふこうとする。

そこでブラックピットが止める。

「あの缶、爆発したろ。発火したらどうすんだ！」

「じゃあどうすれば？」

そうパツクンが悩んでる中、ヨツシーは

卵を投げる。

するとイヌは怯む。しかしカモには当たらない。

イヌはまた缶を蹴る。ヨツシーはそれを卵をなげ

応戦。

しかし、投げてるうちにヨツシーの卵をは残りが
なくなつた。

「くそっ！ どうすれば近づけるんだ」

その時、イヌに何かがかすれた、かすれた弾は

ベンチに辺りベンチを粉々にした

それはブラックピットの狙杖であつた。

(これは強力だ！ 面白い！)

畏怖するも興味を持つブラックピット。

その時イヌを捕まえるものがいた。

それはパツクンフラワーだった。

「いまだブラックピット！ 俺ごと撃て！」

「なっ！ パツクン！」

パツクンは地中に潜り、イヌの後ろに回っていた。

そして、イヌを後ろから掴んで話さなかつた。

カモはそんなパツクンをくちばしでつつく。

「早くしろ！」

ブラックピットは躊躇する。

バンツ！ バンツ！

銃声がした。

しかしブラックピットは撃っていないかった。

撃った弾はイヌとカモに命中し2匹は倒れてた。

その銃を売ったのはガンマンの格好をした中年男性だった。

「大丈夫か？ お前たち」

パックスンは倒れたイヌから離れ、カービィやヨツシー

ブラックピットはガンマンのもとへ集った。

「俺は皆からワイルドガンマンと呼ばれてるものだ。

あの犬はダックハント、猟犬だ。

餌のカモといがみ合ってたのだろう」

「なんで暴れたの？」

紹介したワイルドガンマンはカービィに尋ねられる。

するとパックスンは答える。

「ブラックピットの弓と矢を誰か使ったのだ

しかもこの状況になるということは

悪意がある男が射たのだろう」

「なんでそんな危険なものをほっといたのだい？」

ヨツシーは問う。

「攻めるならブラピを攻めろ。なくさなければ

こっちはならなかった」

「ブラピ？」

ヨツシーとカービィは疑問に思う。

「おい！ お前まで変な名前で呼ぶな！

俺はブラックピットだ

弓と矢をなくしたのは事故だ。

責任は俺がとる。探すぞパックスン」

するとブラックピットはパックスンを持ち上げ

どこかへ去った。

カービィとヨツシーは啞然としてた。

すると

「ワン！ ワン！」

犬の声があった。ワイルドガンマンに向かって
さっきの犬が吠えていたのだ。

「あれ？ さっき死んだはずじゃ」

「急所をはずした。もちろんカモもだ」

「グワツ！ グワツ！」

「ワン！ ワン！」

カモとイヌは向かい合っていた。

「コラコラ喧嘩するでないダックハント

お前たちには今から協力してもらうのでな」

イヌとカモはガンマンのその言葉に不思議がる。

「今からお前たちにはタッグを組んでもらい

このドラゴンとピンクボール、そしてこの俺と

共にあのブラピとやらがなくなった弓と矢を探す

あれが他の人たちに渡ったら大変だからな」

カモとイヌのコンビ、ダックハントは

納得行かないもののガンマンの言うことを聞いた。

カービィとヨッシーは賛成したが

ヨッシーは疑問に思う。

「おじさん戦えるの？」

「心配ない！ ヨッシー君。俺には愛銃光線銃が

ある。

ダックハントがfrisbeeや空き缶を投げたときに

役に立つぞ。

それに俺はダックハントの言葉がわかるのでね

いたほうが便利だぞ」

「それは心強い！ ボクにも銃を教えてよ」

「いいぞ、カービィ君」

ヨッシー、カービィ、ワイルドガンマン、

ダックハントはカフェをあとにした。

一方カフェの店員モナは去りゆくブラックピットと
バックンフラワーを見上げていた。

「あのとき助けてくれた素敵な方。 なにも

言わずに去ってしまっうなんて

ああ、また会いたい」

モナは最後にこういう

「バックンフラワー様……」

一方カフェをあとにしたカービイたちは

インクを連射しまくるインクリングを見つける

「なんだ？ アイツらは」

するとヨツシーは追っかけられてるマリオと

ピットを見つけるのだった。

「マリオ！」

ヨツシーたちは慌てて駆けつけた。

スプラタック!

二人のインクリングから逃げ惑うマリオとピット

「何で俺たち追われてんだ?」

「わからない。マリオを狙っているのか?」

ピットとマリオの帽子になつてる

キャツピーが話していた

ヨッシー、カービィ、

ダックハント、ワイルドガンマンは

遠くからその様子を見ていた。

「マリオだ助けなきゃ」

ヨッシーはカービィを乗つけて急ぐ

「行け! ダックハント! 俺が援護する!」

ダックハントはワイルドハントに言われ

カモと共にインクリングたちに向かう。

インクリング二人はマリオを追っかけながら

インクの入ったスプラッシュシューター

で射撃する。

マリオたちはインクが当たる

「うわっ! インクが!」

「これぐらいなら大丈夫だ。しかし強力な攻撃されたら

僕たちは立てなくなる」

インクを気にするピットにキャツピーがそう教える

その時

バンツ バンツ

インクリングの足元に銃弾があたる。

その後インクリングにタマゴがあたり、

火の玉が飛ぶ。

そこにダックハントが現れ挑発する。

インクリングの2体はダックハントを追う。

「マリオ!」

ファイアカービイを背負った
ヨッシーがマリオと合流する。

「君たちは確かヨッシーとカービイ！」

「あつ！ お前は！ さっきのブラピ！」

カービイはピットを見てこういう。

「違う、僕はピット！ ブラピではない！

ってブラピに会ったの？」

ヨッシーとカービイは頷く。

「よく見たら羽は白いし、印象が違うね。

詳しい話は場所を変えて話す」

マリオたちはヨッシーの言うとおりにし

場所を変えて話した。

その際インクはあらい流した

「ブラピが矢をなくしそれを誰かが広って射て

そうになったのか」

「しかもあのパクションフラワーも一緒か」

ピットとキャッピーが納得する

「マリオが指名手配とは信じられないな

早くその偽物を探さないと

でもその前にあの子どもたちを

なんとかしなければ」

マリオ、カービイ、ヨッシー、

ピットの4人は悩んでいた。

その時向こうから声がする。

「みんな特売だも。特売だも」

たぬきのような男が店商売をしていた。

近づくマリオたち。マリオをみて男は言う。

「君はマリオだも！」

(ますい、この男もさっきの金髪のごどもみたいに…)

ピットは警戒していた。しかし

「いらっしやいだなも。僕はたぬきち

オネットいちの品揃え、たぬきち商店の店主だなも」
たぬきはマリオたちを出迎えてくれた。

「えっ！ マリオを通報しないの？」

ピットはそう言うがたぬきは返す。

「マリオは噂だと」

落書きで指名手配されてるが

そんなことするはずないも。

犯人は他にいるはずだも。

キノコ王国やヨースター島、サラサランドを

救った男がそんなことできないだも」

たぬきは語る

「しかし、落書きは消してほしいだも

そのために当社があるルートから手に入れた

代物があるだなも」

たぬきは木箱をみせそれを開けた。

するとそこには黄色い頭の水を発射する機械があつた。

「名前はポンプ。水を入れるとそれを発射する。

水圧は抜群できれいな汚れもおとせるだも。

モードを切り替えると水圧で空を飛べることも

できるだも。

マリオ！ まずはお試しに使ってみるだも」

マリオはポンプを背負った。

すると、ポンプが反応する。

「アナタガアタラシイモチヌシデスネ。

ワタシハポンプ。

オヤマーサマガツクッタ」

「喋った！」

ピットがびつくりする。

「ハイ。アナタノオナマエハ？」

「僕はピット。そして君を背負ってるのはマリオさ

帽子の名前はキャツピーさ」

「マリオサンデスネ。」

コングトモヨロシクオネガイシマス」

「よろしくね。ポンプ」

キヤッピーがマリオの代わりに返事する。

マリオはさっそく壁の汚れをポンプの水流で洗い流す。

「すごい！ 汚れが消えてるー！」

ヨッシーは驚く。

「どうだも。それは無期限貸し出しということにするだも。」

他、いろんな商品があるだも

見ていくだも」

たぬきちは売り込む。しかしピットが言い返す。

「ごめんなさい、たぬきちさん。僕たち

お金がなくて」

「私が払うわ！」

「えっ！」

マリオたちの後ろから突然誰かが話しかけた。

それは金髪で大きなリボンをつけてる女の子だった。

「君は一体？」

ヨッシーが疑問に思う。

「私はポーラ。お金ならたくさん持ってる。」

その代わりに私に協力してほしいんだ」

ポーラはたくさんのお金をマリオたちに見せる。

そのお金で、食べ物や様々なアイテムを買った

マリオたち。

そして、ポーラという少女にマリオたちは

案内されるのであった。

一方ダックハントは二人のインクリングに

追われていた。

「いいぞー！ ダックハント！ その位置だ！」

ワイルドガンマンは遠くからインクリングの二人を
愛銃の光線銃で狙っていた。

そして狙いを定め、発射した。
発射した弾は2発。

その玉は少年のインクリング、イカボーイに
あたった。しかし、

「なにっ！ 通り抜けた！」

そうか、インクだから通り抜けるのかならば……」

ワイルドガンマンは弾にインクをつけ

装填する。その時

「ぐわー！ なんだ！」

ワイルドガンマンはインクまみれになっていた。

「狙撃か！ ぐわあ」

狙撃場所を確認するとイカボーイが見当たらなかった

「なにっ！」

するとガンマンの後ろでスナイパーライフル型の

スプラチャージャーを向けていたイカボーイがいた。

(いつの間に！ ハッ！ インクリングはイカの姿になり

自ら塗ったインクの中に入り移動できる。

やつのカラーは青。それを利用しあいつは

背後にまわれたのか。

しかし俺もそれを知らないわけではない

あえてインクのない場所に今立ってるわけだ

なぜだ？)

ガンマンはあたりを見る。

そして青いインクのある部分があることに気づく

(俺が銃を装填する間にインクを近くに塗り

さらにインクを近くに塗ってイカになり

インクの中に忍び込んだのか)

ワイルドガンマンは気づくもイカボーイは

ガンマンに引き金を引きとどめを刺した。

ワイルドガンマンはインクまみれで倒れ込んだ。

一方ダックハントはインクリングの少女

イカガールから逃げていた。

ダックハントは缶をけり、逃げながら

イカガールに攻撃する。

しかし缶は中々当たらない。ダックハントのイヌは疑問に思っていた。

缶を銃で当てコントロールするものがない

ガンマンに何かあったか。

インクリングはスプラシューターでダックハントを攻撃していた。

インクをよけ走るダックハント。ダックハントは周りに三角の小物を見る。それに近づいたその時バァン。

オレンジの爆風とともに爆発した小物。

ダックハントのイヌはオレンジのインクまみれになっていた。

イカガールは近づきスプラシューターで

止めを刺そうとする。その時
バンッ！

イカガールになにかあたり爆発し、

大きな爆風が起きた

それは缶だった。

ダックハントのカモが缶を持ち上げそれを

イカガールにぶつけたのだ。

爆風がやんだ。するとそこには

イカガールの姿が見当たらなかった。

カモは探す。その時
ビュン

カモにどこからともなく現れたイカガールにスプラシューターで撃たれてしまう。

カモはインクまみれになり徐々に下降する。

カモは地面に着陸した。

イカガールはインク入りの三角の爆弾、
スプラッシュボムを爆発させあたりに
イカガールと同じ色、オレンジのインクを
ばらまいたのだ。

そしてイカガールはイカの姿になり
インクに潜伏し、カモを狙い撃ちしたのであった。
あたり一面オレンジのインクとなったフィールド。
カモとイヌは追い詰められていた。
カモとイヌはオレンジのインクまみれで倒れ
動ける状態ではなかった。

その時

「ウワッ！」

イカガールの手になにかあたった

イカガールの手は溶けかかっていた。

それとともにスプラシューターを落とす。

イカガールは慌ててオレンジのインクの中に
飛び込もうとするがオレンジのインクは水で
流されてしまい。逃げ場を失う。

イカガールは落としたスプラシューターを
片手でひろい走る。

そして息を切らしながら隠れながら逃げる
その時

イカガールに大量の水がかかった。

「イヤアアア！」

イカガールは叫びながら服を残し

跡形もなく溶けてしまった。

イカガールに水をかけたのは死角から
ポンプで攻撃したマリオだった。

マリオのそばにはヨッシーとポーチがいた。

「解けちゃったよ。ポーチほんとによかったのか？」

「大丈夫よ。たぶん……」

ポーラは不安そうにキャツピーに答えた。

「ポーラ、君が予知でここへ案内した。

インクリングの二人を止めるために

早くガンマンのおじさんを探そう」

「それなら心配ないわ。空を飛べるピットと

カービイが彼を助けてるわ」

「しかしあつちには青い男の子のインクリングが

いるはずだ」

「心配ないわ、キャツピー。時期に来るわ。

マリオ壁に隠れて。ヨツシーはダックハントを助けて」

マリオとポーラは壁に隠れる。

すると壁がインクびっしりになる。

青い髪のインクリングの男の子、イカボーイが

マリオに向かってスプラスコープを撃った。

イカボーイは怒ってる様子だった。

一方ヨツシーはマリオに気を取られてる間に

ダックハントを助けた。

マリオとポーラは壁に隠れていた。その時

青い三角の小物が壁を超え転がってきた。

「！ 危ない逃げて！」

ポーラが言ったときはもう遅く、イカボーイの

投げたスプラッシュボムは爆発した。

マリオたちは倒れ込んでいた。

イカボーイはイカガールのスプラシューターを

ひろい、マリオへ近づく。その時

イカボーイの足元になにかあたった。

イカボーイは足場を崩す。

すると向こうにはワイルドガンマンが

カービイとピットとともに立っていた。

「どうだ水をつけた弾の味は」

足場を崩すイカボーイだがイカの姿になり
青いインクに隠れようとした。

その時

「グワァー！」

イカボーイになにかあたってそれは

缶だった。

投げたのはダックハントを助けたヨツシーだった。

缶は上に高く飛んだ。

「今だ！ ガンマン！ 撃て！」

ワイルドガンマンは缶を撃ちまくると

中から大量の水が出た

水は青いインクをすべて流し、その水は

イカボーイにどつきりかかったのであった。

「ウアアアアア！」

イカボーイは叫びながら服を残し跡形もなく
溶けてしまった。

「終わったか。缶の破片を修復し、

水を入れといたのが勝った理由か。

しかしこれで良かったのだろうか？」

そういうヨツシー。カービー、ピットは

ワイルドガンマンを運び飛んでいた。

そしてヨツシーのもとに集まった。

マリオとポーラも

ヨツシーとダックハントのもとに集まった。

「彼らは水に弱いのだ。矢の仕業でああなくても

かわいそうだったね」

「そうでもないそうよ」

落ち込むキャツピーにポーラが言う。

するとあたりのインクがみるみる消えていった。

「どういうことだ！ なんで消えてんだ？」

「このインク微生物が分解するそうよ。」

それに矢から開放された彼らは死んでないと思うわ
あそこを見て！」

「えっ？」

疑問に思うピットはポーラの言ったとおり見ていた。
そこにはうつ伏せで倒れていた、イカガールと
イカボーイがいた。

「あれはさっきの！」

「助けなきや！」

カービィとヨツシーはかけつけようとする。
その時ポーラが止める

「待った！ イカちゃん裸なのよ。」

あなた達見に行くつもり？」

一同は戸惑う。

「私が先行くからあなた達はまってて！」

ポーラがマリオたちにいい聞かしてる間に
イカボーイとイカガールは気がついた。

「ここはいつたい？ ……ってなんで裸なの!？」

必死に体を隠すイカガール。

「どうした？ ガール！ ……ってうわああ！」

「きゃああ！ 見ないでよ！ エッチ！」

お互いに体を隠す。そこにポーラが現れる。

「あなた達。これを着なさい！」

ポーラがインクリングたちに服を投げる。

「なんだ！ お前は！ いきなり現れて

服投げるなんて」

「落ち着けよガール」

怒るイカガールをなだめるボーイ。

「そうね。いきなりはごめんなさい。

今からあなた達には仲間になってもらうのよ。

あの人たちと」

インクリングの二人は服を着る。

ポーラは駆けつけたマリオたちを紹介した。

(この人たちさつきまで戦った記憶が……)

何かを思い出しそうなイカボーイ。

「あなた達は矢に操られていたの。それで

マリオたちと戦っていたのよ。

いつもなら服と一緒に戻るけど

裸で戻ったのは矢の影響かもね」

イカボーイとイカガールは赤面し、

その後申し訳ないようにイカガールはこういった。

「そんなことがあったのか!」

ごめんなさいみんな

これからはみんなと一緒に戦うよろしくね。

ほら、ボーイも」

「えっ! うん」

ボーイは戸惑いつつ答える。

「そしたらみんなで行くわよ。」

「行くってどこに?」

ピットは聞く。

「アジトよ。みんなが待ってるわ」

ポーラは自分のアジトの連れて行くとマリオたちを案内した。

するとイカボーイは心の中で思っていた。

(何故だろう。よく思い出せないけど。

ガールのために戦った記憶が……)

あのときガールがやられて……)

考えるイカボーイ。それを見たイカガールは話しかける。

「ほら! 行くよ! みんなにおいてかれるよ!」

笑顔で近づくとイカガールにイカボーイは顔を赤くしていた。

かつて傭兵だった男

マリオたちは突然矢に撃ち抜かれ、暴走していた
インクリング二人を倒し、彼らを助けた。

そしてマリオたちはポーラという少女に
彼女のアジトへ連れてかれるのであった。

そこはオネツトの住宅街より少し離れたところだった。
野原が多く木が一つあった。

その木の中には階段があった。

ポーラについてゆきマリオたちは木の中を進む。

「なんか怖いね」

「そう？ 何かあるか楽しみじゃない？」

インクリングの二人がそう話している。

そしてポーラに案内されたマリオたちは
中へ入る。

そこはガラクタが多い部屋だった。

「ネス、ジェフ、プー！ 彼らよ、マリオよ。」

すると奥から3人の少年が現れた。

一人は柔道着の少年。一人はメガネと金髪の少年。
そしてもう一人は赤い帽子の横縞ボーダーの少年
だった。

「紹介するわ。柔道着の子がプー、

メガネの子がジェフ。そして

赤い帽子の子がネスよ。」

「よろしく」

「よっ！」

「はじめまして」

それぞれが挨拶する。

「君たちは一体？」

ピットが聞く。ポーラがそれに答える。

「私達は超能力者。ジエフはメカニックだけどね。彼らは私が集めたの。」

ある日私は夢を見た。この世界を覆い尽くす闇を。

それに対抗できるのは70人の戦士と聞いたのよ」

「70!」

ヨツシーは驚く。

「ネスたちは私がテレパシーで集めた人たちなの。」

誰が70人の戦士かはわからないけど

彼らにはその手伝いをしてるのよ。

そしてもう一人」

「もう一人?」

ピットは聞き返す。

「そう、テレパシーで送ったのよ。」

同じテレパシーができる少女に

オネットの場所を。

彼女は強く求めた。何かを倒す力を。

彼女とは同調し、名前も聞いた。

確か名前はゼルダ」

「ゼルダ?」

ヨツシーがポーラの話に聞き返す。

「ヨツシー、知り合い?」

イカガールが聞く。

「僕は知らないが、連れがその娘を探してる。」

僕の連れ、リンクは今どこにいるのだろうか?」

そして場所は変わる。

リンクはオネットにある馬小屋にエポナを預け

マルスと共にオネットを探索していた。

「僕が住んでいた国とはだいぶ違うね。」

建物の構造が違う」

マルスは住宅街に驚いていた。

リンクとマルスは商店街のようなところにつく。

「いらっしやい！ いらっしやい！ 安いよ！」

女性の声が聞こえる。リンクとマルスはその場に立ち寄る。

「お兄さんたち見てらっしやい！ 私はアンナ

行商してるんだ。」

赤いポニーテールの少女アンナが

人差し指を顎につけ売り込む。

リンクとマルスは怪しがる。

（リンク、こういう押し売りは関わるのは良くない

別の店にしよう）

リンクは頷く。その時。

「お姉さん。この薬草20個頂戴。それとこの剣も」

「お兄さん。目が高いね」

アンナから物を買ったのは

オレンジのバンダナをしている、

剣を持った少年だった。腰のポケットには

ハムスターがいた。

「ねえ、お兄さんたちもなんか買ってよ。

安くするからさあ」

リンクとマルスはやむおえず薬草や傷薬

を何個か買った。

（絶対顔覚えられた。今後も会いそうな気がする）

マルスは少し後悔していた。そこに誰かが

声をかける。

「おーい！ 待ってよー！」

声をかけ、後ろから息を切らして駆けつけたのは

先程アンナから薬草を買っていた

オレンジのバンダナの少年だった。

「僕の名前はエイト。」

ポケットにいるこいつはトーポ。

実は俺、剣の修行してるんだ。

俺もついてっていいかな？」

バンダナの少年エイトはこう言う。

それにマルスは答える。

「それは無理だよ。僕たちにも旅の目的はあるし

第一君のせいであの行商女に顔覚えられたし

あの娘に覚えられたらこの先……」

「そうなのか？ まあいいじゃんか」

マルスは断る。しかしリンクは彼が

仲間になることに賛成した。

「えっ？ いいの？ ありがとう」

「正気か？ リンク！」

マルスは驚くがリンクは仲間が多いほうがいいと

伝え彼を説得した。

「ありがとう。えーと……名前は？」

「僕はマルス、こっちはリンク。」

僕は故郷に帰るため、彼は……

守るべきもののために強くなるため

旅をしている」

「そうか、そういえばこの街に剣の達人がいるようだ。

確か昔傭兵をやってたようで。

俺も剣の修行したくてね」

マルスとリンクは少し驚く。そして

マルスは少しうんざりする。

(嫌な偶然だ。まあ、これも運命か)

渋々マルスはエイトを仲間と認めた。

リンクたちは街を探索する。

すると女性の叫び声がある。

「きやあ！ 何なんですか！」

「いいじゃねえか、ねえちゃん！」

女子高生の女の子がゴロツキに襲われていた。
必死に抵抗する、女の子。

「待て！ やめるんだ！」

マルスが止めに入る。

(まあ！ イケメン。しかも隣の金髪の人も……)

女の子は心の中でこう思っていた。

「なんだてめえ、引っ込んでろガキが！」

ゴロツキがマルスに喧嘩を売る。

「暴力は良くない。女の子を話すんだ。」

「この！」

マルスは殴られて倒れる。

「マルス！ このよくも！」

「待て！ エイト！ こんなところで暴力沙汰は

いけない。僕の目的は彼女を逃がす。

見る彼女はもういない。

もう目的は果たしたんだ」

ゴロツキが振り返ると女の子はいなかった。

「なっ！ よくもいい女だったのに！」

再び殴りかかるゴロツキ。その時。

「やめろ！ みつともない！」

マントをつけた緑色の髪の剣士の格好をした

青年がいた。

「なんだ！ お前！」

襲いかかろうとするゴロツキ。しかし青年は

彼の攻撃をかわした。

そして彼を倒す。

「くそっ！ 覚えてろ！」

ゴロツキは逃げた。

「大丈夫か？ 君。」

緑色の髪の剣士はマルスの手をとる。

「ありがとうございます。そういえば先の娘は？」

「ここです。」

すみに隠れてた女子高生の女の子が現れ、
マルスに例を言う。

「先程はありがとうございました。」

私の名は橘あゆみ。この近くにある探偵事務所では
働いているんです」

「僕の名前はマルス。無事で何よりだ」

「あの私の事務所この辺なんです。お茶でも……」

「ありがとう。でも僕たちはこれから
行かなくちゃいけないんだ。」

剣の達人にあうために。」

（剣の達人？）

あゆみの誘いを断ったマルス。

剣の達人という言葉にひっかかった緑色の髪青年は
マルスに話しかける。

「そしたら、私の家に来ないか。連れの人も

あゆみさんも一緒に」

「えっ！ あっ！ 私はいいです。」

事務所に戻らないといけないし」

あゆみは断りその場を去った。

（うー、私のバカ！ イケメンがあんなに
いんのに……）

あゆみが去ったあと、マルスは青年にこういった。

「僕たちも遠慮します」

「そうか、剣の達人を知ってるのだが」

「えっ！ 本当か！ じゃあお言葉に甘えて」

ベレトの言葉に誘われるエイト。しかしマルス
は止める。

（エイト！ 失礼だろう。あの男確かに

腕の立つ剣士だと思うが、ここは……）
マルスとエイトがやり取りをしているが

リンクはついていった。

「リンクー！」

「お連れがあれじゃアンタも

大変だな。先行くぜ」

エイトはリンクについていく。

「全く一人とも」

マルスはついていく。

一方ある場所にて

(やっぱりついていこうかしら)

あゆみが悩んでいた。その時

「うっ！」

あゆみは何か刺され、その場に倒れた。

そして起き上がった。

そこに先程のゴロツキが現れた。

「おい！ てめえ何を！ うっ！」

あゆみはゴロツキをパンチでふつとばした。

そしてゴロツキは壁にめり込み動くことはなかった。

動かなくなったゴロツキに近づいたあゆみは

彼の懐にある禍々しい気を帯びた剣を手にし

その場を立ち去るのだった

リンクたちはオネットのはなれにある、

一軒家にいた。

「どうぞ」

紅茶と菓子をクリックたちに出す。緑色の髪の剣士

ソファに腰をかけたリンクたちに次ぎ自らも

対面するように椅子に座る。

「僕の名前はベレト。昔は傭兵をしていた。

だけど、戦いの途中に負傷してしまったようなんだ」

「ようだとはっ。」

ベレトの言葉にマルスは不思議がる。

「どうやら死に近い重症だったようだ」

「えっ！ マジかよ。それでよく助かったな」
エイトは驚く。

「助けてくれた者たちがいて、そのついで

この街の離れにいる」

ベレトの言葉に納得する一同。マルスが問う。

「事情はわかった。次は僕からあることを

頼みたい」

マルスは要件を言おうとする。

「わかってる。剣の訓練だろう。」

「僕で良ければ相手になろう」

「いいのですか!?!」

マルスはベレトの返事に反応する。

「構わない。そのためにここへ来たのだろう。」

もう少ししたら訓練だ。準備頼んだぞ」

一同は喜んでいる表情する。

「やったぞー！ よし早速やるぞ。リンク、マルス！」

「エイト！ あまりはしやぐな」

リンクは騒いでる二人を見ているものの、
訓練をし、そしてゼルダ姫に会えることを
期待していた。

一方場所はポーラの拠点に戻る。

ポーラはずっと電話をしていた。

「ポーラどうかしたの?」

ヨッシーが問う。

「おかしいわね、知り合いの探偵事務所で
働いてる女の子に電話してるんだけど

事務所も携帯もかからないのよ」

「なんで探偵に?」

ピットが問う。

「マリオが指名手配されてることと

弓と矢の秘密。これを解決するには
人が必要と思って

だから知り合いの娘に電話してんだけど
どうしたのだろう？」

場所はベレットが住んでいる家に舞台は変わる
外にはポケットから携帯が鳴り続けている
橘あゆみが立っていた。

あゆみは禍々しい剣を手にとって家に向かっていった。

ベレットの家の庭ではベレットが三人の剣士をまとめて
訓練させていた。

リンクが正面から斬りかかるがこれをベレットは
剣で弾き、横から斬りかかるマルスにも素手で対応。
エイトは後ろから斬りかかるが足を蹴られ転倒する。

「エイト！ 流石に後ろは卑怯だ」

「卑怯もあるかよ！ モンスター相手じゃ

そうも言つてられない！」

「そうだな。 よし休憩だ」

ベレットはエイトに注意したあと三人を休憩させた。

休憩に家の中へはいる三人。エイトは疲れた様子だった
「全く、とんだスパルタだぜ。あの先生は」

「エイト、訓練をさせて頂いてるんだ。

文句を言うんじゃない」

「わかってるけどよ、マルス。

しかしリンクはどうだ。なあ、リンク」

エイトはリンクを呼ぶしかしエイトは驚いていた。

「マジかよ！ お前俺達より訓練されていたのに

汗一つかいてねえぜ！ どういうことだ？」

大げさに驚くエイト。

「お前が未熟なんだ、エイト。」

僕にはわかるんだ彼が長く戦っていたことが。だが、どういったことか記憶がないようにで

剣の腕も落ちてるようだ。」

リンクは自らが何者かとゼルダ姫を

守るほどの剣の腕を身につける

そのことしか考えてなかった。

「少し気分転換に外に出てくる」

「おい！ 訓練後にまた外かよ！ マルス！」

するとリンクもその場を退出した。

「お前もか？ 全くなんだ？ あの二人？」

マルスは外に出て剣の修行をしていた。

するとそこにあゆみが近づいてきた。

「あゆみさん！ なぜここに？」

マルスは驚く。するとあゆみは服を脱ぎ始めた

「な、何をしてるんだ！」

マルスは止めようとするがあゆみは下着姿になった。

そしてブラジャーのホックをとろうとする。

するとマルスはあゆみの手を止めた。

「やめろ！ 年頃の女の子がこんなことをするんじゃない！」

それに僕には婚約者がいる。」

「こん……やく……しゃ……」

あゆみは涙目になり気を失う。

マルスは倒れかけた歩みをキャッチする。

するとそこに誰かが来た。

「マルス……どういことだ？ それ？」

そこに来たのはエイトだった。

「マルス！ 何やってんだ！」

「エイト！ 誤解だ！」

「誤解もあるか！」
エイトは剣を抜きマルスへ迫る。

その名は織部つばさ

マルスに助けられた少女。橘あゆみは突然凶暴になりごろつきの剣を奪い。

ベレトにより修行しているマルスたちのもとへ向かった。しかしこのことに関与している少女がいた。

それはあゆみがマルスと会う前カフェで話していた二人の少女がいた。

「つばさ。元気してる?」

「あゆみもどう? 探偵の助手大変でしょ」

「うん、でも楽しいよ」

「へえ、そうなんだ」

「つばさも芸能界スカウトされたんでしょ」

「うん。もうすぐでデビューなんだ」

青いロングストレートヘアの織部つばさという少女があゆみと話していた。

カフェで二人でご飯を食べ終わり二人は解散した。

その時、あゆみはゴロツキに襲われ

マルスに助けられていたのだ。

一方つばさは家に帰って自主勉強中居眠りをし

夢を見ていた。

「つばささん」

「誰?」

つばさの夢で誰かが話しかける。

そこに青いストレートヘアの赤い服を着た少女がいた。

「あなたは?」

「私の名はシーダ」

「シーダ?」

「いきなりでごめんなさい。私はアリエティアという

国に住んでいたの。でも突然国を攻められ

私は……」

「えっ！ 死んじゃったの?」

状況が飲めこめないものの、シーダの話を聞くつばさ。

「いま私は仮死状態にあってるのと思います。」

あなたにあることを手伝ってほしい」

「あること?」

「アリティアの王子、そして私の……想い人の

マルスを探してほしいのです」

「想い人って彼氏?」

「え? ええ、まあ…… というより婚約者……」

シーダは恥ずかしそうに言う。

「へえ、いいなあ。マルスってイケメンなの?」

「イケメン?」

「かっこいいの?」

期待するつばさ。

「ええ、まあ……」

「いいな、イケメン王子と結婚だなんて」

「あの……つばさ? 今この状況で言うことでは……」

シーダは戸惑いながら話を止める。

「あ、そうだった。なんで私にその王子様を

あわせてほしいの?」

「私はマルス様にあいたい……そう願っていたら

あなたにたどり着いたのです。」

マルス様はこの街にいるはずです。

私は彼が無事なことの確認

と私を心配しないでほしいことを

伝えてほしいのです」

「そうだったの。わかったよ。その人を探す」

「ありがとう。つばさ」

シーダは感謝する。

するとシーダは何かを察する。

「つばさ。あなたの友達、あゆみが

なにか、その……危ないなにかに……」

「えっ？ それってホント？」

「わからないけれど、町の外れの方にそれを感じます」

「それってあの大きなお屋敷のほうか。わかった」

するとつばさは目を冷ました。

「今の夢は一体？ そうだ、あゆみ！」

つばさは急いであゆみに電話をする。しかし

彼女は出ない。メールも送ったが既読もつかない。

すると電話がかかってきた。それはあゆみの番号とは違う番号だった。

「この番号は……もしもし」

「つばさ！ 私ポーラ」

「ポーラ？ どうしたの？」

それはマリオたちと一緒にいる金髪の少女

ポーラだった。

「あゆみに電話したけどつながらなかったの。

あなたが知ってると思い……」

するとつばさは電話を突然切り、急いで家を出た。

「つばさ！ どういうことかしら？ 二人とも」

ポーラはいきなり電話を切ったつばさに苛立っていた。

「ほんとに頼りになるのかい？ そのあゆみって人？」

ピットが疑問に思う。

「大丈夫よ。彼女探偵のタマゴだし」

「えっ！ たまごなの？」

驚くピット。しかしポーラは心配していた。

（寝てたりとか、用があるなら仕方ないけど、でも何か心配なのよね）

一方つばさは街のはずれにある、ベレトの屋敷へ

向かっていた。

するとそこに剣を持つて屋敷に向かう

あゆみがいた。

「あゆみー！」

近づくとつばさ。

「あゆみー！ 私よつばさよー！」

あゆみの目はぼーっとしており

つばさの言葉を見無視する。

「どうしたの？ 一体？」

するとあゆみはつばさを突き飛ばした。

「きゃあー！」

その力は強いものだった。

(なんて力なの？)

つばさは気を失った。

しばらくして翼は目が覚めた。

そこはベレトの屋敷にある休憩所だった。

(ここは……あのお屋敷？ 私はなんでこんなところに？)

すると何者かがつばさに近づく。それはリンクだった。

(え？ イケメン！ この人がマルス様？)

するとそこにベレトもやってくる。

「気がついたようだね」

ベレトがつばさに声をかける。

(こつちもイケメン！ マルス様はこつちか？)

「大丈夫かい？」

心配するベレト。

「倒れてる君を外に出てたリンクが助けたんだ。

あ、リンクはこつちの彼。僕の名はベレト。

リンクはここで剣の修行をしているんだ」

「そ、そうなんですか……ありがとうございます」

(やだあ、こんなにイケメンがいて私幸せ

でもマルス様ではないのね……)

つばさは心の中でこう思っていた。

その時、外で剣の弾き合いの音がした。

「マルスとエイトが自主練か？」

(え？ 今マルスって)

剣の弾き合いの音に気がつくベレト。

リンクとともに外へ出る。

つばさもマルスという名前が気になり

ベレトについていく。

3人は外にでてある光景を見ていた。

それはマルスがエイトに本気で切りかかり

戦っていた。

「どうしたんだ！ 二人とも」

ベレトが声をかける。

「マルス！ お前女の子に手出しするなんて！」

エイトはマルスに切りかかりながらそう話す。

「よせ、エイト！ 誤解だ」

二人は戦っていた。

(あのマントの人がマルス……たしかにイケメン。

でも私はリンクの方が……)

するとつばさはあることに気づく。

それは下着姿で横になっていたあゆみの姿だった。

あゆみに気づきマルスとエイトのもとへ走る

つばさ

「危ないぞ、君！」

ベレトは止めようとする。

一方リンクは戦ってるマルスとエイトを見ていた。

すると彼はブーメランを取り出し

彼らに向かって投げた。

ブーメランはエイトの手にあたり

エイトから剣を手放した。

「なにすんだ！ リンク！ お前こんな外道を

許すのか？」

エイトはリンクに向かって怒る。

それに対してマルスはため息を付き、剣を収め
エイトに言う。

「エイト！ 誤解だ彼女は突然僕にあつて

服を脱いだそれだけだ。

僕は彼女をとめた。何もしていない。

第一彼女がここにいるのがおかしいだろう？

彼女は何者かに操られ、僕を不意打ちしようとした
多分それだ」

マルスは怒りながら言う。

「えっ？ そうだったの？」

「単純なんだよ君は、そもそも街の時だつて

あの行商人に……」

マルスはエイトに説教をする。

その間つばさは気を失つて下着姿のあゆみに近づき
声をかける。

「あゆみしっかりして！ こんな格好で寝たら

風邪ひくわよ！」

あゆみは目を覚ます。

「あゆみ！ よかった……」

ベレットはあゆみが目覚め、二人に気づく

するとベレットは禍々しい剣を手にするあゆみに気づく。

「まずい！ その娘から離れろ！」

「えっ！」

つばさはベレットの方を振り向く。

その時つばさは気づく。

「何……これ？」

つばさの腹部にはあゆみが剣を刺していた。

「えっ？ あゆみ……どうして……」

大量の血がでて倒れ込むつばさ。

するとあゆみはそれを見てボツとした目が
普段の目に戻り叫ぶ。

「いやああああー！」

マルスはエイトに説教をやめ

マルス、エイト、リンク、ベレトは

あゆみと翼に近づく。

「おい！ 君大丈夫か？」

ベレトは必死に叫ぶ。

「そんな！ わたしがつばさを……」

嘘よ、こんなの！」

するとマルスはあゆみの持っていた剣に気づく。

そしてそれを手にするマルス

「この剣があゆみさんを……」

するとマルスに異変が。

「マルス！ どうした！ うわっ！」

突然エイトに斬りかかるマルス。

「なんだよさっきの仕返しかよ！」

エイトは避けながら対応する。

（あの剣？ 呪いでもあるのか）

ベレトは剣を持ち、マルスに挑む。

そしてリンクも駆けつける。

一方、つばさは生死の境をさまよっていた。

そこにシーダが近寄る。

「つばさ……ごめんなさい……」

こんなことになるなんて。

私のせいね。せつかくマルス様に会えたのに」

シーダは残念がっていた。

「あなたを死なせない。あなたが死んだら意味ないわ」
シーダはつばさに近づき彼女を抱きしめる。

すると二人は光に包まれた。

エイト、ベレト、リンクはマルスと戦っていた。

マルスはエイトをふりきりベレトと戦う。

(マルス、元から強いと思ったが

あの剣の力で……)

ベレトはマルスから距離を取り

剣を振るう。

剣はムチのように伸縮自在になっていた

「スゲー！ ベレトの剣がムチみたいになった」

ベレトの剣に閃くエイト。

マルスを追い詰めるベレト。

「すごいぞー！ 先生！ いいぞ、もっとやれ」

しかしマルスはベレトのスキを付き、

ベレトを逆に追い詰める。

その時、マルスになにか当たる。

それは先程エイトに当たったブーメランであった。

リンクがブーメランでマルスに挑む。

マルスは近づき剣で応戦する。

しかしリンクはマルスと一度戦っており、

マルスの動きを見切っていた

マルスの剣を弾くリンク。

「リンクー！ いいぞー！」

エイトはリンクを応援する。

しかし、マルスはリンクの足を蹴り

リンクを倒す。

倒れたリンクを踏みつけるマルス。

「うわあー！」

踏みつけられたリンクは叫ぶ。

ベレトとエイトは駆けつける。

その時、誰かがマルスに槍を向けた。

一同は誰だ！ と思い、止まる。

それは髪を縛り変わった鎧をつけた青い髪の少女だった。
その少女に反応するあゆみ。

「つばさ！ 平気なの？」

「もう大丈夫！ それよりあゆみ服を

早く着たほうがいいわ」

「えっ？ きゃあ！ なんで私下着姿に！」

あゆみは急いで服を着る。つばさは

自分の不思議な格好に驚いていた。

（それはカルネージフォーム、

私があなたと一つになった姿です）

「槍が喋った！」

変わった鎧を着たつばさは槍から聞こえた声に
反応する。

（私です。シードです。あなたを助けるため

私はあなたの槍となり、戦う決意をしました。

あなたは戦いには慣れてないはずですが

ですがそこは私がんばります）

「えっ！」

つばさは戸惑う。そこに剣を拾ったマルスが攻撃をする。

「えっ！ えっ！」

あたふたするつばさ

しかし槍を持った手は無意識にマルスに応戦する。

「えっ！ 手が勝手に！」

（マルス様の動きはわかっています

てりゃー！）

マルスの剣を弾くつばさ。

そしてマルスに槍を向ける、つばさ。

「どうしたの、シード？ マルスに止めを」

（私に任せてつばさ）

するとカルネージフォームは解除され

もとのつばさに戻る。

そして幻影のようにシーダが現れマルスに声をかける。

「マルス様、私よ。シーダよ。」

私は大丈夫です。なのでどうか正気に……」

そしてシーダの幻影はマルスにキスをした。

それを見たつばさは顔を赤くする。

マルスの目はもとに戻る。

「シー……ダ」

マルスはこうつぶやく。一方エイトは

呪いの剣を拾う。

「エイト！ その剣は！」

ベレトは止める。

「心配するなよ先生。俺は呪いはきかねえんだ。」

この通り。

この剣は持つておくぜ」

呪いの剣をさやに収めるエイト。

それに対してリンクは心配する。

「大丈夫だ。もし暴走したら俺を切ってくれ」

リンク」

(エイト……ただのお調子者と思っていたが

切られることを覚悟し呪いの剣を収めるとは

素晴らしい度胸と勇気だ)

ベレトは心の中でそう思っていた。

(今のはシーダどうしてここに

そしてこの娘は……)

マルスはずばさを見つめてた。

「つばさ大丈夫？」

「うん、大丈夫。あゆみも」

「私は平気。でも私はあなたを……」

「大丈夫よ。気にしないでね」

あゆみとつばさは仲良く話していた。

ベレトは皆を家の中に入れた

つばさはシーダのことをマルスに話した。

「シーダが！ きみに？」

でもなぜ君に？ そして彼女は無事なのか？」

「なんで私の中にいるかはわからない」

でも、シーダは大丈夫と言っていた」

「彼女は昔から自分より他人を優先する。

彼女らしいな。

シーダはどこかで生きてるのかそれは良かった
するとそこに誰かが声をかける

「マルス様……」

つばさの横から突然幽霊のように
女性が現れた。

その女性は青髪のロングストレートで

目の部分を仮面で隠していた。

「なんだ！ 魔物か！」

エイトは構える。

「違います！ ひどいわ。

こんなんで魔物と判断するなんて。

だいたいあなた、マルス様に切りかかった子ね」

「えっ！ なんて知ってたんの？」

エイトは剣を構えるのをやめる。

「その丁寧な喋り方とこの声、シーダ？」

つばさは勘づく。

「さすがつばさ。わかってるわね」

しかしベレトは疑う。

「君が何者かはわからない。

だがほんとに味方なのか？」

するとシーダと名乗る女性が答える。

「疑われるのは承知です。

でも、私は友人であるつばさを守りたい。

そしてマルス様……私はあなたのためならこの身は」

するとマルスは声をかける。

「シーダ、ほんとに君なのか？」

「どうしてその姿に」

「私の本体は仮死状態……まだ目覚めておりません。」

私はあなたに会うためつばさの心にはいり

そして彼女を助けるためこのミラージュと

呼ばれる姿になったのです」

「そうか……」

とにかく生きてたんだね。よかった。

君は今どこに？」

「それは私にもわかりません。」

ですが私が覚えてることをお話しましょう

私はマルス様があの魔人に連れ去られたあと

気を失ってわからないのですが……」

そしてシーダは語る

シーダは気を失っていた。しかしかすかに

自分を助けようとする者たちの声が聞こえた。

それは国のものではなかった。

「ここはだめか？」

「そんなはずはない！ あきらめてはいけない」

「生存者を探さないと」

何人かの声が聞こえた。

そして

「いたぞー！」

「団長に報告だ！」

「この娘、この国の王女かしら？」

声がある中、シーダは何者かに姫抱っこされ

外へ連れ出された。

「それから私は夢の中でマルス様を思い続けていたの」

「そうだったのかシーダ。しかし
こうして君と再開できた。こんなに嬉しいことは
ないよ」

マルスの言葉にシーダは微笑む。

「マルス様……ありがとう。でも今の私は

つばさのミラージュのシーダ。

本当の私は今もどこかで眠っている」

「会いに行くさ、シーダ。

剣の修行が終わったらすぐに向かう」

するとベレットがこういう。

「マルス、アリテティア行き馬車を明日手配しよう」

「いいのか？」

「ああ、君とリンクの剣の腕みて

もういいだろうと思ってね

それに君の国だろう。心配と思ってね」

「ありがとう。しかしベレット、君は一体」

「僕はただの傭兵だった男さ。エイトはしばらく

いてもらう」

「なんでだよ！」

「お前はまだ未熟だからさ」

「そんなあ」

一同は笑う。

その後シーダはこういう。

「マルス様、私はしばらくつばさと行動します。

実は気になることがあって」

「気になること？」

マルスは問う。そしてシーダがつばさを見て言う。

「つばさ昨日電話があったわよね。

あゆみに」

するとあゆみは驚く

「えっ！」

あゆみは急ぎ着信履歴を確認する。

するとポーラからの不在着信とつばさからの不在着信が何個かあった。

「こんなにー！ つばさごめんー！」

「いいのよ。でもなんでポーラは電話してきたの？」

「前から頼まれたことがあって……」

つばさは首をかしげる。

「ラクガキ犯がマリオという。」

「あ！ あれか！」

するとマルスは話に割り込む

「すまないがそれは一体？」

「ラクガキがオネットの至る所にかかれてて

それがあの有名な冒険家。マリオの仕業という話」

あゆみが説明する。

しかし、一同はマリオを知らない様子。

「みんなマリオを知らないの？」

マリオはキノコ王国を救った

有名な人よ。知らないの？」

「キノコ王国は知っている。」

しかしマリオは知らなかったな」

「私もマリオという名は初めて聞いたわ」

シーダはそういう。つばさは少し驚き、説明する。

「キノコ王国を悪い魔王から救い

姫様も救い出したという冒険家よ。

そんな彼がラクガキをして街の人を困らしてるのは

おかしいと巷で話題になってるのよ」

しかしリンクは思い当たることがあった。

ヨッシーから以前マリオの名は聞いており

その人のことではないかと

マルスに伝える。

「ヨッシーの仲間？ そうか、それなら……」

マルスは決意する。

「シーダ、僕もしばらく残る。そのマリオという

人は僕の仲間の仲間なんだ。

彼を助ける理由はある」

リンクも頷く。

それを聞いたベレトは答える。

「そうか……この街を出るときがきたら

僕に声をかけてくれ。馬車を手配する」

「ありがとう。ベレト」

感謝するマルス。そこでエイトが反応する。

「オレもいくぜ！」

「お前は修行だ！」

「なんでだよっ！」

ベレトに怒られるエイト。

一同は再び笑う。

「とにかくマリオの冤罪を証明するため街に戻るね」

あゆみはこう言い、つばさとシーダは頷く

あゆみ、つばさ、シーダの3人はベレトに例をし

オネットに戻った。

リンクとマルスも

わかれるエイトに手を振り

あゆみたちとともにベレトの元をさる。

「行っちゃまったな。あいつら。」

さて、先生！ 修行の続きだ！」

張り切るエイト。するとベレトは聞く。

「エイト？ 君はなんのために旅をする？」

「俺？ 俺は呪いで姿を変えた仲間を助けたいんだ。

その呪いをとくため呪いをかけたやつを倒すため

修行してんだ」

「なるほど。ただ強くなりたいわけではないんだな

いいだろう。相手になる」

ベレットとエイトはたがいに剣を交えた。

そしてベレットは考えていた。

(僕がここにいるのはもう少しだけだ。

もうすぐマルスの故郷の近くにある

学院の先生になる。それまではエイト君に付き合おう)

眠りの街

「そう、そんなことがあったのね。わかったわ
待ってるわね」

電話をしていたポーラ。マリオたちに伝える。

「みんな。探偵のたまごのあゆみって娘がくるそうよ

お友達も連れて」

「やっど連絡が取れたか。でも大丈夫なのか？」

不安になるピット

「大丈夫。お友達もいるし」

するとピットはあることを思い出す。

「そういえばここに来る前、金髪の少年が

ボールから犬を出して僕たちを襲ったが

それが何だろうなとおもって」

するとメカニックのジェフが説明する。

「それってポケモンですかね？」

「ポケモン？」

「ポケモンはこの辺に住んでいる特殊な生き物です。

普段は野生でもいますが。捕まえてペット……

いえ、家族のように接してる人もいます。

僕のもいますよ」

するとジェフは芋虫のような生き物を出してきた。

「これはデンジムシ。電気の技を使えます」

「へえ」

感心するピット。

「ポケモンはいま世界に900匹近く確認されています」

「そんなにいるのー！」

驚くピット。ジェフは落ち着いて答える。

そして手のひらサイズの赤と白のボールを出した

「ポケモンは捕獲するときには

このモンスターボールを使います。

これは驚異のメカニックで

ポケモンが心地よく住めるようになっていようです。

ここがポケモンの犬小屋のようなものです」

ピットは疑問に思う。

「えっ？…こんな玉に住めるの？…すごいな

ポケモン」

ジエフは関心する。ピットにあることを伝える

「ポケモンには人気なのがい

このピカチュウなんか人気ですね」

ピットにピカチュウのホログラムを見せるジエフ。

「へえ、人気あるんだね。ポケモン」

一方このオネットに来た

素顔のサムス、ピーチ、ゼルダは

連れのピカチュウとは別行動をしていた。

ピカチュウはオネットの建物に興味を持っていた。

オネットにはポケモンがモンスターボールから

出ていて普通に暮らしてる様子があった。

ピカチュウは歩いていると眠気がしてきた。

「ピカ……」

ピカチュウは道端で眠ってしまった。

しばらくして起きるピカチュウ。

すると素顔のサムスがピカチュウの近くに

歩いてきた。

「ピカピー！」

サムスと呼ぶピカチュウ。そして彼女に近寄る。

「なんだ？…お前は！…近づくな！」

すると素顔のサムスはピカチュウを蹴り飛ばし

こういった。

「ピカッ！」

シヨックになるピカチュウ。

すると向こうからゼルダとピーチが歩いてきた。

「ピカ！ ピーカ！ ピカピー！」

二人を呼ぶピカチュウ。

すると二人は喋る。

「何あれ？ 私達をよんでるの？」

「汚らしいわ。あんなのかまっていたら

ドレスが汚れるわ」

そう言い通り過ぎる二人。

「ピ……ピカア……」

ピカチュウ泣き叫ぶ。

一方ここはオネットの市街地。

ここではあたり一人ひとりとポケモンたちが寝ていた。

そこにはピカチュウがいた。ピカチュウは

うなされて眠っていたのだ。

起きていたポケモンがいた。それは

薄いピンクの丸いポケモン、プリンだった。

プリンは歌い続けていた。

一方もう一匹起きているポケモンがいた。

それは二足歩行で五円玉を糸でつなげたものを

持つてるバクのようなポケモン、スリーパーである。

スリーパーは念じてる様子だった。

寝ているものは皆うなされていた。

おそらくプリンの歌は相手を眠らせ、

スリーパーは悪夢を見せてるようだ。

この区域に入るものは皆プリンの歌を聞き眠ってしまい悪夢を見ているようだ。

ピカチュウは悪夢を見続けていた。
それはバトルに負け続ける夢である。
そしてピーチたちから石を投げられて
泣いていた。

ピカチュウは悪夢にうなされ続けていた。
その時、空から何者かが降りてきた。

「かわいそうに……これも悪しき人間の力だ」
それは白い人型のポケモンであった。

そのポケモンは黒い玉を作りそれをプリンに向かって
投げた。

「プリンッ！」

攻撃があたりプリンは気絶した。
するとプリンの歌はおさまった。

気づいたスリーパーはサイコネシスで
攻撃する。

しかし白いポケモンにはきかない

白いポケモンは先程プリンに投げた黒い玉で
スリーパーを攻撃した。

スリーパーは避けられずそのまま当たり気絶した。

「人間たちの勝手な好奇心でポケモンたちが

苦しんだ。

やはり人間はひとり残らず消さなければ！」

そうすると白いポケモンはテレポートで消えた。
すると街の人たちは起き上がる。

「あれなんでこんなところで？」

「なにかひどい夢を見てたような」

そして一人起きた。それは二足歩行で歩いてる
ギターを持っていた白い犬だった。

「あれ？ 僕は？」

そうだとしかりサイタルをしているとき

まんまるのポケモンが突然歌い出して

その歌が心地よく寝てたのだ。

最初はいい夢だったのだが

突如悪夢を見るようになり

何度も起きようとしても

起きれなかった。

あれは一体？」

するとプリンが起き上がる。

プリンは思い出す。

とたけけのリサイタルでついつい口ずさみ

歌っていたら周りが眠りだしたと

そして怒って帰ろうとしたら

突然なにかに刺され、永遠に歌わされた

記憶があると

その時、唯一寝てないスリーパーがいたが。

スリーパーも何かに刺され

眠っているものに悪夢を見せていたので

スリーパーは起き上がったあと

どこかへと歩いて去っていった。

すると向こうから

誰かがやってくる。

「こんなところにいたのか。探したぞ」

素顔のサムスがピカチュウを見つける。

しかしピカチュウは笑顔で眠っていた。

(何かいい夢を見てるのだろうか、このまま

そっと運ぶか)

サムスはピカチュウを優しく、起こさないように

運んだ。そしてその場を去るサムスとピカチュウ。

白い犬のミュージシャン

とたけけはコンサートを再び始めた。

一方プリンは

自分の歌を聞いてもらうために

サムスとピカチュウについてくのであった

W i i f i t

サムスとピカチュウはとたけけの元をさり
ピーチと合流しようとする。

ピカチュウは後ろからついてくプリン
を気にしていた。

「あいつの勝手にさせたほうがいい。

気にするな。害はなさそうだ」

しかしピカチュウはプリンの歌には
眠る作用があることを説明する。

「眠る歌？ 心配するな。

寝てる間に襲うことはないだろう」

サムスの対応に納得いかないピカチュウであった。

サムスとピカチュウ、そしてついてきたプリンは
ピーチとの待ち合わせの場所につく。

そこには w i i f i t と大きな文字で書かれていた
トレーニングジムがあった。

サムスとポケモン2匹はそこに入る。

そこにはレオタード姿のピーチが
ヨガをしていた。

「うう……痛い……」

「もつとりラックスして……」

ピーチのそばには緑のタンクトップを
着ている女性がいた。

その女性は髪を一つ縛りにして
肌は白かった。

「ピーチ、何してんだ？」

「あ、サムス！ 来たのね」

サムスはピーチに声をかける。

白い肌のトレーナーはサムスを見て反応する。

(こ、この人は！)

「この人にヨガを誘われてね。無料体験してんの
あなたたもやってみる？」

(無料体験という言葉に誘われたか。
危なっかしいな)

サムスはピーチの言葉に対しこう考え
話す。

「私は遠慮しとく……」

すると突然トレーナーがサムスの手を握る。

「あなたは！」

サムスは少し戸惑いながら彼女をみる。

(なんだ？ この人は？)

私のことを知ってるのか？ 民間人が

この姿の私を知ることはないはずだが)

「素晴らしい！」

「え？」

トレーナーの言うことに冷静に聞き返すサムス。

「何という体つき。この筋肉、このスタイル。」

そしてこの胸！ 素晴らしい。

どういったトレーニングをなさっているのです？」

目をキラキラさせトレーナーはサムスに問う。

サムスは戸惑いながら言う。

「私の場合は故郷の星が過酷でな。」

その崖に登ったり、かなりのスパルタの

トレーニングをした」

「なるほど！ それで、こんな理想的な……

素晴らしい……」

(なんだ……この人……)

「是非、どうでしょう！ ヨガ！」

「いや、私は……」

「いいから、いいから。」

トレーナーは半ば強制的にサムスをヨガに誘う。

(サムス……羨ましい……)

前からいいスタイルと思つてたけど……)
少し嫉妬するピーチだった。

ピカチュウとプリンはポケモンフードを食べながら
ピーチとサムスのヨガを見学していた。

サムスはインナースーツではなく
へそ出しのタンクトップとホットパンツの姿に
なった。

トレーナーとピーチはそのサムスの姿に見とれていた。

(こう見るとすごいわね。筋肉)

(やはり、私の目にはくるいはなかった！)

二人の視線にサムスは戸惑う。

(何だ？ この二人……なにかやらしい目で
見てるような?)

ピーチとサムスはトレーナーの指示に従う。

「私はこの店、W i i f i t からとり

W i i f i t トレーナーと呼ばれます。

トレーナーやトレーナーのお姉さんなども

呼ばれますが別にどう呼んでも構いません」

W i i f i t トレーナーは自己紹介をする。

「まずは準備体操をしましょう。

足の屈伸、1、2、3、4……」

準備体操をある程度したあとに

W i i f i t トレーナーは指示する。

「次は木のポーズです」

木のポーズを指示する W i i f i t トレーナー

ピーチはバランスを崩すが、サムスは

平然とやり遂げる。

その後、トレーナーは英雄のポーズなど

様々なポーズを指示

しかし疲れてるピーチに配慮し

最後深呼吸をし

終わらせた。

「はい、お疲れ様でした。これで体験レッスンは
終了です」

「ハア、ハア」

ピーチは疲れてる様子だった。

しかしサムスは疲れてる様子はなかった。

「流石です！ サムスさん！

平然とやり遂げるとは憧れますね。

しびれますね。

是非、うちのジムに入会を」

期待しているトレーナー。

サムスは戸惑いこう言う。

「すまないがこの後用があつてな……」

「そうですね……せめて入会だけでも……」

サムスはw i f i t t r e i n e rの表情を見て断れず
やむなく契約した。

「わたしも」

そこにピーチも名乗りあげ契約した。

「いいのか？」

「体鍛えなきゃー！」

ピーチはつかれた様子だったが

やる気がある様子だった。

「二人ともありがとうございます」

w i f i t t r e i n e rが感謝する。その時

「出たぞー！ 落書き犯だー！」

急いで外に出るトレーナーたち

するとトレーナーが驚く！

「ああー！ 私の店がー！」

店の看板におおきく落書きされていたの
だった。

すると犯人が現れる。ピーチは驚く。

「マリオ?」

落書き犯の姿がマリオそっくりだったのである。

「知り合いか? ピーチ?」

サムスが聞く。

「マリオは私の王子様よ。私を助けてくれた。

でも、あれは違うわ。全身が青く

第一マリオが落書きを無意味に

こんな迷惑なものをするわけないわ」

「ですがあれは紛れもなく

マリオです!」

トレーナーは怒っていた。

すると全身が青いマリオはピーチに向かっていった。

「やめろ!」

サムスがニセマリオからピーチを守ろうとする。

しかし、サムスの攻撃を避け、ニセマリオは

ピーチをさらう。

「えー! ちょっと!」

「ピーチ! くっ!」

ニセマリオはピーチを持って逃げる。

サムスは走っていく。

「待てっ!」

しかしニセマリオは街の建物の屋根に登り

サムスから逃げる。

「あの女早いな! ホントに人間か!」

感心する偽マリオ。ニセマリオに片手で

抱えられてるピーチは抵抗する。

「離してっ! ニセモノ!」

ニセマリオは一旦立ち止まる。その時
ボールのようなものがかすれる。

「くっ！ 外した！」

それは Wiifit トレーナーがスマッシュした
バレーボールだった。

「危なっ！ その使い方まずいだろ！」

ニセマリオが突っ込む

「バカ！ ピーチにあたったらどうするつもりだ！」
怒るサムス。

「ですが私の店の看板を汚したやつですよ」
Wiifit トレーナーは言い返す。

その間にニセマリオは逃げるのであった。
しかし、ニセマリオに電撃が迫る。

「今度はなんだ？」

それはピカチュウであった。

ピカチュウはサムスとは違うルートを使い

ニセマリオに近づいていたのだ。

しかしニセマリオは逃げ切る。

「くそ！ はやいな！ あのポケモン！」

こうなったら」

ニセマリオは大きな筆を使い、
クツパの部下クリボアの絵を

何体か書いた。

するとクリボアの絵が実体化し

ピカチュウの行く手を阻んだ。

「ピカア！」

クリボアを避け近づこうとした

ピカチュウだったが

ニセマリオには追いつけない。その時。

「プープリン♪」

「な、何だ……眠けが……」

ニセマリオは寝てしまった。

それはプリンの歌声だった。プリンは

自分の歌を聞いてほしくて歌っただけだったが
結果的にニセマリオを眠らしたのである。

これにプリンは納得いってなかった。

「やったのか？」

ピカチュウやピーチは寝てしまったが

サムスとトレーナーは離れていたため

効果がなかった。

二人はニセマリオに近づく。

ピーチ姫は地べたで寝ており

ニセマリオは居眠りしていた。

「とりあえず拘束しよう」

「ええ」

二人はニセマリオを取り押しさえようとした。

その時。

「うっ！」

「きやつ！」

ニセマリオが二人の胸を掴んだのである。

「油断したな！　ピーチ様は逃してやる。

さらばだ！」

ニセマリオは逃げていった。

その時ピーチは起き上がる。

「あれ？　私なんで寝てたのだろうか？」

あれ？　サムスにトレーナーさん

なんでこんなところに？」

ピーチは二人の顔がどこか怒ってるように見えた。

「あいつ、次あったらどうしてくれようか」

「全く！　許せませんね！」

ピカチュウとプリンは彼女たちと合流する。

ピーチはサムスとWii Fitトレーナーが

怒っている理由がわからなかったが

彼女たちについてき

店に戻った。

店に戻りサムスが早速話す。

「そういえばゼルダは？」

「ゼルダなら馬小屋の方にいるわ

馬を見たいってたわ」

「馬小屋？ 住宅街のこんなところに

そんなのがあるとは……」

「それよりもサムス。宇宙船の部品は？」

「この街で揃えられるものは揃えた。

だがこれだけでは直せなさそうだな」

「そう…… とりあえずゼルダと合流しましょう」

「ああ。お前たちはどうする？」

サムスはピカチュウとプリンに聞く。

「ピカッ！」

「プリッ！」

肯定的な返事をする2匹。

「そうか、ついてくるのか。いいだろう」

喜ぶピカチュウとプリン。すると

W i i f i t t トレーナーが言う。

「私も付いていきます」

驚く一同。特にサムス。

「何故だ!? というより店はどうするんだ？」

「店はしばらく閉店にします。」

あのマリオもどきを捕まえなければ

安心できませんからね。

それに……」

「？」

サムスは W i i f i t t トレーナーの言葉に疑問を感じる。

するとトレーナーはサムスの肩を触る。

「ひっ！」

そして後ろから話しかけるトレーナー。

「サムスさんがなぜこのような体型なのか
気になります」

サムスの腹を後ろから触るトレーナー。

(こいつに明らかに狙われている。)

私はこの先大丈夫なのだろうか？)

自分の身を心配するサムスだった。

一方馬小屋ではゼルダがいた。

ゼルダはリンクの愛馬エポナをなでていた。

そこにリンクが歩いてきた。リンクは

マルスに断り、馬小屋による許可を得たのであった。

エポナをなでてるゼルダをみてリンクは反応する。

するとゼルダもリンクに気づいた。

「この馬はあなたの馬なの？」

良くてなづけてるわね」

リンクはゼルダに近づく。するとゼルダは

リンクのマスターソードを見て反応する。

「あなたはもしかしてー！」

驚くゼルダ。彼が自分の探していた

リンクと察したようだ。

(伝承では緑の服と帽子をかぶっているはず。

でも間違いない。彼はリンクだわ。

それにしても……すごくイケメン！)

リンクはゼルダの顔を見て思わず彼女を抱きしめた。

(えー！ えー！ えー！ えええええ！)

ゼルダは顔を赤くし興奮してしまった。

リンクは思わず抱きしめてしまった

ゼルダに気づき、彼女から離れた。

するとゼルダは怒り出した。

「あ、あなたねえ！ 初対面の人を

しかも女の子を、こ、こんな、いきなり

抱きしめるなんて！」

ゼルダは慌てながら怒鳴る。

リンクは申し訳ないようにする。

そこにピーチたちが近寄るが

彼女たちはゼルダにまだ会わなかった。

「何か私たちお邪魔そうね」

「あの説教が収まってからのほうが良からう」

ピーチとサムスはこう話していた。

W i i f i t t トレーナーやポケモンたちは

よくわからない様子であった。

ニセマリオの謎

ここは交番。

そこには犬のおまわりさんがそこにいた。

「すいませーん」

そこに探偵のタマゴの女子高生、橘あゆみだった。

彼女は今朝ニュースをみて自分が

殴り倒したゴロツキの件にて自首しに来たのだ。

「詳しいことは私もわかりません。」

でも、殴って飛ばしたのは覚えてて」

すると犬のおまわりさんはこう返す。

「大丈夫ですよ。橘さん。」

あなたはいつも捜査に協力してくれるし

そういったことができる人とは

思ってません。

あのゴロツキは罪状が多く、こちらも

手を焼いております。

あ、そうそうゴロツキはどうやら

命に別状はないそうです」

「そうですか…… よかった……」

ホッとするあゆみ。

(あんなゴロツキに同情するとはさすが橘さん)

おまわりさんがそう心で思う中をあゆみは言う。

「ところでおまわりさん協力してほしい

ことがありません」

「お願いとは？」

首を傾げるおまわりさん。

「実はマリオと思われる人のラクガキ事件について

なのだけど……」

あゆみはおまわりさんと話をしていた。

一方、マルスとあゆみの友人、織部つばさ
そして彼女についているシーダは

ポーラのひみつきちへやってきた。

「いらつしやい。あれ？ あゆみは？」

「あゆみなら交番にいるわ。昨日ニュースであった

ゴロツキが公園で壁に埋め込まれてる

あれはあゆみがパンチでふつとばしたから

らしい」

「そうなの？ あゆみが暴走して

大変だったわね。つばさ」

ポーラは電話で何があったかは聞いていた。

するとヨツシーはつばさの後ろにいるマルス

に反応する。

「マルス！」

「ヨツシー！ ここにいたのか」

マルスとの再開に喜ぶヨツシー。

カービイもマルスに気づく。

「ホントだマルスだ！ 剣の修行は終わったの？

リンクは？」

「まあ、とりあえずは。リンクなら馬小屋で

エポナの様子を見に行った。

後で合流する」

するとポーラの近くにいた、ネスとピットが

つばさの隣にいるシーダを気にしていた。

「あの？ あなたは？」

ピットが聞く。

「私の名はシーダ。つばさの友で、マルスとは……

その……」

「君がシーダか」

ヨツシーが反応する。

「確かマルスの婚約者の」

「えっ！ 婚約者！」

ピットは驚く。

「えっ！ まあ。その……」

「隠さなくていいよシーダ。僕とシーダは

そういつた関係だ。シーダはどうなったか

心配だったがこのような形で彼女と出会えて

僕は安心している」

「マルス……」

マルスはシーダをフォローしていた。

イカボーイがシーダの姿に見とれていた。

「ちよっと！ ボーイ！ 今あの人のおっぱい

見てたでしょ」

「いやいや！ ちがうよ」

口論しているイカガールとイカボーイ。

そこにつばさが割り込む。

「やめなよ。君たちお友達でしょ」

つばさが止めに入る。すると二人はつばさを見て

黙る。

するとつばさにダックハントの犬が近寄る。

「あ、ワンちゃんだ。かわいい」

つばさは正座してダックハントを自分の膝の上で

寝させる。

つばさは犬をなでる。

すると犬はつばさの膝をなめる。

「きゃ、くすぐりたい」

するとダックハントはつばさのスカートを

あげスカートの中に入ろうとする

「えっ！ 何！」

するとシーダは犬を持ち上げる。

「だめでしょ！ 何やってんの！」

犬を叱る。シーダ。

(羨ましいぞ。ダックハント)

ワイルドガンマンは心の中で思っていた。

ポーラの連れである。ネス、ジエフもそれを見て頬を赤くしていた。

するとポーラは仕切る。

「本題！ 本題！」

みんななんのために来たか。そこにいるマリオの冤罪を証明するためよ」

マリオを見てそう言うポーラ。するとポーラが説明する。

「最近、このオネットで落書きの事件が

多発している。しかもそれがマリオの仕業という話しかも賞金首扱い。落書きでこれはおかしい」

ポーラの説明にマリオの帽子であるキャツピーが話す。

「おそらく、何者かがマリオに変装して

犯人にしておいつめるのが目的だろうね。

賞金首にするのは無理やり感はあるが……」

そうキャツピーが話すとピットが話し返す。

「そういうえば、さつきジエフにも行っただけど

金髪の少年にポケモン使われ追いかけられた。

たぶん賞金目当てだったかと」

するとポーラの連れである柔道着の少年プーが言う。

「そいつはポーキーだな。オネットでも

有名なガキ大将だ。でかい口叩いて、

嫌なことは自分で手を汚さず、他人にやらす

目的のためなら手段を選ばない

そんな男だ。あいつは気にするな」

「そんなやつか。わかった」

ピットは納得する。そしてポーラは話を続ける。

「ポーキーみたいなクズがやってるように

賞金目当てでマリオを狙ってるやつもいる。ただけど街の人たちはみなそれを信じていない。さつきマリオの帽子が言っていたように誰かがマリオを追い詰めるためのものと思ってるわ。

まず、それが誰の仕業か」
するとヨッシーが提案する。

「わかることは一つ。クツパの部下だろう」

「クツパ？ クツパってマリオが倒した

あのクツパ？ 死んだんじゃないの？」

「クツパは何度も生き返り、マリオと戦う。

毎回そのオチさ。」

マリオに変装するということは

マリオを知っているはず。

するとクツパ関係者という可能性がある」

ヨッシーはそう感じる。

すると外から誰かがやってきた。

「みんな、ごめん遅くなった」

それは橘あゆみの姿だった。

「待ってたわ！ あゆみ」

ポーラがあゆみに話す。

するとあゆみはさっそく

警察と話した内容を皆に説明した。

「住民の目撃を元に調べたことがあるそうよ。」

まず私やマルス様たちが巻き込まれた事件は

昨日の18時から21時のこと。

昨日のその時間には

公園やカフェの付近には落書きがあった。

それは私が見てるから覚えいる。

で、住民の話だと12時頃までは

その場所に落書きはなかった様子よ」

「なるほど。つまりその時間帯にマリオが何をしていたか裏付けすればいいかか。

その時間帯は住宅街や公園でイカカツプルと戦ってたからマリオには落書きに行くスキはない少なくとも夕方にはすでにこのポーラのひみつきちに来ていたわけだから」

ピットはそう言い返す。

そしてあゆみは続けて言う。

「あとさつきなんだけど、フィットネスジムで落書きの被害があったそうよ。目撃者の特徴はマリオと一緒にだったそうよ」

「それなら、もうマリオの疑いは晴れるようね。

だって今日までマリオやここにいる

仲間たちはみんなここにいることが

証明できるのだから」

ピットはホツとしてそういう。それにあゆみは返す。

「その人と今から会うためカフェに行こうと思うの

みんなも行くよね」

マリオたちはうなづく。するとポーラは言う。

「それならマリオたちはあゆみと

一緒にカフェに行くのね。

私とプー、ジェフ、つばさとシーダは

基地に残って調査よ」

「私もですか?」

つばさはポーラに返す。

「あなたとシーダは私たちより戦力がある

だから私たちといてほしいの」

するとシーダはつばさに言う。

「つばさ、ここはマルス様やマリオたちに任せましょう

私たちはポーラを守る方で」

するとマルスはシーダを心配そうに気遣う。

「シーダ、彼女たちを守ってくれ」

「マルス様もお気をつけて……」

そこでポーラはネスに言う。

「ネスもマリオたちについてって。」

あなたには超能力をみんなで教えた。

それで彼らを守ってあげて」

ネスはうなづく。そこであゆみは一つ言う。

「あー、そうだ。もう一つ重要なことが」

「重要なこと？」

ピットが聞き返す。

「弓矢の件。私やあと

おまわりさんに聞いたらそのワンちゃんや

あとイカちゃんたちも被害にあった

暴走した原因の弓矢。

あれもマリオに似た誰かがやったということらしいわ」

「そうか！　じゃあそいつを追い詰めれば！」

ピットは確信する。

「2つの事件がまさか一人の仕業だったとは

マリオ！　これはどうしても解決しないとね」

マリオの帽子、キャップィーがマリオに話しかける。

こうしてマリオはヨッシー、カービィ、ピット、

イカガール、イカボーイ、ダックハント、ネス

マルスを連れ、あゆみと共に

待ち合わせのカフェ向かった。

マリオたちは Wiifit トレーナーの女性に
コンタクトし、あゆみが聞いた。

「あなたが被害者のトレーナーさんですか？」

「はい、そうですが……あなたは？」

「先程お電話した橘です」

「あ！ あなたがああの探偵事務所の！」

「はい。ラクガキ犯についてお聞きしたいのですが……」

「警察にも言ったわよ」

「それとは別に、私達には彼がいるので」

「彼？」

W i i f i t t トレーナーはマリオを見る。

「あなたはマリオ！ さつきはよくも」

トレーナーは怒る。

「違うんです。彼は本物のマリオで

今、彼の冤罪を証明するためこちらに来たんです！」

必死に説得するあゆみ。するとW i i f i t t トレーナーは

少し考えこごういう。

「わかりました。話を聞きましょう。」

確かに私が見たのはマリオであって

マリオでなかった

そのことをお話しましょう」

するとそこに誰かが話しかける。

「そうよ！ マリオが女性の胸を揉むことなんて

するわけがないわ！」

そこにいたのはピーチであった。

マリオは驚いた。

「マリオ！ やつと会えたわね」

ピーチは嬉しそうな顔でマリオに近づく

「あれがピーチ姫だね！ さすがマリオ！

あんな美人に注目されるなんて

有名な冒険家は伊達じゃないね！」

ピーチはマリオの帽子であるキャツピーが

気になってるようだった。

「あ、僕はキャツピー！ マリオが帽子を失くしてさ

かわりに僕がマリオの帽子になってんだ。

後ろの黄色いのはポンプさ」

キヤッピーが自己紹介するとマリオは早速

ポンプで Wi i f i t ジムにある落書きを消していった。

「さすがマリオ。やっぱりマリオはこうじゃなきやね」

するとゼロスーツサムスは二人を見ていた。

（あれがマリオか……さっきのやつに似ているが

あの様子だとさっきの犯人とは別人のようだな）

するとピットがゼロスーツサムスを見てこう思っていた

（あの女の人なんて胸が大きいのだろう）

するとサムスはピットに気づく

「誰だ？ 私のことが気になるのか？」

「いえいえ。きれいな人だなあと思い。」

僕はピット」

「私はお前のその羽が気になるが……」

ピットの羽が気になるサムスにピットが答える。

「こ、これはですね。僕らの種族というか

なんというか、まあ生まれつきでした」

「そうか。この世界にはまだ私の知らない

種族がいるようだな。

私もピーチのボディガードをしていた。

お互い大変だったな」

ピットはサムスにそう言われ、顔が少し赤くなっていた

一方ゼルダとリンクはカフェの席で

向かい合わせで座っていた。

（うわあ、緊張するなあ。でも聞かないと……）

ゼルダは緊張しながらリンクの顔を見て喋る。

「あ、あの…… あなたはリンクですよね。」

先程はすいませんでした。

何か私のことで知ってます？」

リンクは首を横に振る。

「そう……記憶がないとはお聞きしましたが」

ゼルダは残念そうな顔をする。しかし、リンクは

彼女の顔を見て自ら守らなければならないと
心の中で感じたのであった。

するとゼルダは返す。

「お、お互い知らないもの同士だけど、

これからよろしくお願いします！」

緊張しながら言うゼルダにリンクは彼女と
握手をした。

ゼルダは少し照れていた。

するとリンクに誰かが声をかける。

「リンク、ここにいたのか。」

合流できてよかった」

「リンク、あの人は？」

問うゼルダにリンクがマルスのことを紹介する。

「そう、あなたリンクの仲間のね。よろしく」

微笑むゼルダにマルスは少し照れる。

「こちらこそ」

握手をするマルス。リンクは少しヤキモチを

焼いてる様子だった。

一方ネス、インクリングの二人、ダックハント

ヨッシー、カービィ、ピカチュウ、プリンは

合流してカフェで食べ物を注文していた。

「カービィ、食いすぎないですよ。これ全部

ポーラの金だから」

「わかってるよ」

しかしカービィは7つくらいの食べ物をたらふく食べていた。

ネスやインクリングの二人は驚いていた。

(ねえ、ボーイ？ あれってどこに入るんだろうね)

(さあ?)

二人のインクリングが話してる間、

ネスはハンバーグを

美味しそうに食べ、ダックハント、

ピカチュウ、プリンはポケモンフードを食べていた。すると向こうからカービイたちが聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「いやあここはいいとこだ。食べ物美味しいし」「ホント！ この街に来てよかったよ」

そこにはププランドの食料を盗んだデデデと彼の仲間になったドンキーコングと

デーディーコング、

そしてWi iフィットトレーナーに似た服装の男性がカフェのテーブルで楽しそうに団欒していた。

「いやあ、助かりましたよ。あなた達が私を助けてくれたようで」

「いいんだよ、そんなこと。いきなり

襲われてびっくりしたけどドンキーが

みねうちでパンチしてそれから元通りに

なったからよかった」

4人は楽しそうに話していた。

するとカービイは近づく。

「あー！ デデデ！ なんでこんなところに！」
デデデは驚く。

「お前はあの時のー！」

するとドンキーとデーディーはカービイを見て戦闘態勢をとる

「こいつがデデデの言ってた食べ物泥棒だな！」

「ちがーう！ 食べ物泥棒はそっち！」

カービイは反論する。するとデデデはあせり

「こ、こいつの言ってる方がデタラメだ！

ドンキー、DDお願いだ」

構えるドンキーとディーディーすると、そこに女性のWiiFitトレーナーが現れた。

「あなた！ こんなところで何をやってるの？」

するとWiiFitトレーナーに似た服装の男性が反応してこう言う。

「お前！ どうしてここに！」

するとその会話を聞いてたピーチが尋ねる

「えーと…… トレーナーさん？ 彼は？」

「あ、彼は私の夫です」

「えっ！」

女性トレーナーが答えるとピーチは驚く。

(結婚してたんだ……)

「あなたこんなところで何してるの？」

「ああ、実は道を歩いてたら突然頭が痛くなり

気がついてたらこちらにいる

ドンキーさんたちがいたんだ。

彼らが言うには突然私が

暴れだしていたようなんだ」

「そんなことがあったのね。でも無事でよかったわ

実は今、例の落書き騒動だけでなく

その凶暴化する人の件についてこの娘たちが

調査してるのよ」

男性のWiiFitトレーナーとはなしてる

女性WiiFitトレーナーはあゆみやマリオをみせる。

「そうか！ 君たちが調査をしてくれるのか

是非頑張っ欲しい」

「もちろんです！ マリオさんの疑惑や

暴走してる人たちの話。解決してみせます」

あゆみは自信を持って男性トレーナーにこう返す。
するとドンキーはマリオに気づく。

「マリオ！ ここにいたのか」

「マリオあれは誰だい?」

キャッツピーの問いにマリオはここに来る前
自分が戦ったドンキーコングと答える。

「なるほど、あれがああの有名なドンキーコングか」

「マリオ! どうやら凶暴化して

戦ったようだがあの時と同じにはいかない!

勝負だ!」

勝負を仕掛けようとするドンキー。しかし

ここで大きく誰ががいう。

「待った!」

それはカービィであった。

「それよりもデデデが先! さあ食べ物返してもらおうよ!」

どさくさ紛れに逃げようとしたデデデが動きを止める

「だから食べ物はない! だから許して」

「許せるか!」

それぞれ対立するもの立ちがめぐりあい

場の空気が不穏になりそうになった。その時

「まっデシ」

誰かがとめた。傘を被った小人である。

「ブキチだ。どうしてここに?」

食事をしながらイカガールが疑問にこういう。

ヨッシーは聞く

「あれは誰だい?」

「ブキチだよ。私たちの武器を売ってるんだ」

イカガールがこう返すと、ブキチは

カービィとデデデに向かってこういう

「君たち勝負をするなら殴り合いでなく

いい方法があるデシ。

それで勝負してもらおう!

そこでご飯食べてるみんなも手伝ってもらおうデシ」

すると場にいるみんなは別の場所へ移ったのであった。

ナワバリバトル

オネットにある大型モニター。そこにて番組が始まった。

「アオリです」

「ホタルです」

黒い髪の元気そうなアイドルアオリと

大人しそうなホタルという白髪のアイドル二人が

テレビ越しに挨拶する

「2人揃ってシオカラーズです！ イカよろしくー」

シオカラーズというアイドル2人は早速話を始める

「皆さんイカがお過ごし？ 今日特別な

ナワバリバトルだよ」

「何が特別なの？」

ホタルが問う。それにアオリが

嬉しそうに答えた

「今回はお客さんが来てるよ。」

かの有名なマリオなどです！」

「など？」

「マリオのお連れさんと別の客人が揉めてね

そんで戦うことになったみたいだよ」

「あーね」

「そんで、ナワバリバトルで戦うことになったんだけど

みんな未経験者だから一緒にいたインクリング2人を

中心にチーム分けして戦うみたいなのね」

シオカラーズの2人はテレビで会話していた

アオリは元気そうに戦いの詳細を話した

「ステージはオネットでやるのは迷惑とのことだ

オネットから離れたナワバリバトル用の

スペースを使います。障害物があちこいおいてあり

段差はあるものの初心者でもやりやすい地形だよ！」

ノリノリで進行するアオリ

「で、選手紹介！」

女の子のイカちゃんがリーダーの方は

マリオ、ヨッシー、カービィとなってるよ！

マリオからはあのポンプという凶器は

明らかに反則なので一旦預かってまーす」

「まあ、うちらにしたら凶器よね、あれ。

それぞれ武器違うわね。スプラシューターを

持つてるのがヨッシーとマリオ

イカちゃんが巨大ローラー型のアイテム

スプラローラー、でカービィは筆型のホクサイね」

解説するホタル。アオリが進行する

「で、相手チームは青い男の子のイカくん

メンバーはドンキー、デューディー、デデデ

となってます」

「デデデとドンキーは巨体だから狙われそうね

デューディーは身軽そうで厄介ね。

使ってる武器はイカくんがスプラチャージャー

デューディーがスプラマニニューバ

ドンキーがスプラブラスターで、

デデデがスプラスピナーと。

うーん、癖のある武器が多いな」

「ドンキーやデューディーはその武器が

使いやすいつて話だよ

ちなみにインクリング以外は

みんな初心者だったので

事前に練習はしてるよ！」

「中でもマリオとヨッシーはペイントゲーム

の経験者だとか」

「なるほどー！ 期待できるね！」

じゃあみんなCMの後試合だよ！

よろしくね！」

すると街頭テレビは二人の会話からCMにうつった。オネットの住民の家のテレビの多くはこれらが映っていた。

このテレビはマリオたちの仲間たちでベンチに座っていた人たちも見ていた。そのうちの一人のゼロスーツサムスが女性のWiifitトレーナーに話しかける。

「あれはなんだ？」

「あー、あれはシオカリーズですね

有名なアイドルですよ。

インクリングたちのナワバリバトルを

ああいう形で司会良くしてますよ」

「ナワバリバトル？」

疑問に思うサムスはWiifitトレーナーに聞く。

「ナワバリバトルはインクリングたちが

インクをフィールドにかけてナワバリを

とる陣取りゲームみたいなものです。

今マリオたちがするのもそれですよ」

「なるほど、ゲームで決着をつけると」

納得するサムス。集まったマリオの仲間たちは観客席のベンチにいた。

一方準備室ではマリオチームのリーダー

イカガールが打ち合わせをしていた

「私がローラーで塗っていくから、

マリオとヨッシーは敵をお願い

カービイも」

マリオたちは頷く

「楽しみだねマリオ！ ポンプは預けられたけど僕は君と一緒にいるからね」

マリオの帽子のキャップイーがこう話す。

一方チームドンキーのリーダー、イカボーイも打ち合わせをした

「ドンキーとデデデのブキは強力だが出は遅い

デーデーと僕は敵を攻撃しつつ

塗っていく。特にイカガールは先に潰そう

ローラーは強力だ」

ドンキー達はうなづいた。

一方 シオカラーズの2人はスタジオで

飲み物を飲んで休んでいた。

ホタルはアオリに聞いた。

「聞く話によるとカービィとデデデの食べ物泥棒は

どっちかと言うのをはつきりするため

このナワバリバトルをした訳だが

なぜテレビに？」

するとアオリは答える笑いながら答える

「ふふっ、ホタルちゃんはわかってないな

これは作戦だよ！ 作戦」

「作戦？」

ホタルはアオリの言葉に疑問を持つ

「マリオが落書きで指名手配されてるのは

知ってるでしょ？

でも疑い始めてる人達がいる

警察に相談したらいいのよ

そこでテレビにマリオを映して

落書きをするマリオがその時間に

犯行すればマリオのアリバイが

取れるじゃん。

そして警察が調査する。

そういう作戦よ」

「なるほど」

ホタルは納得する。するとホタルは疑問に思い尋ねる

「でも、犯行する前にこのテレビに犯人が
気づいて犯行せず大人しくしてたら
どうするん?」

するとアオリはかたまる。

「あれ? どしたん? アオリちゃん

まさか? そこまで考えてなかったと?」

ホタルは尋ねる。するとアオリは何事も無かったかのようにこう言う。

「あ、CMあけるよ! そろそろ準備しなきゃ」

「えっ! ちよつとまだ話が……」

そしてCMがあけた。そしてアオリが元気よく言う

「さーて、両チーム準備が出来たようで

これから試合が始まります

さあ、ホタルちゃん一言!」

「えっ!」

アオリのフリに戸惑うホタル。

戸惑いながらも答えた。

「えーと、ドンキーの方はパワータイプで

すばやさには不利ですが頑張つて。

マリオチームも!」

「では!スタート!」

時間は3分です!」

アオリはスタートの掛け声をし掛け声とともに
両チームが動き始める。

試合が始まるとアオリは椅子に座つてジュースを飲んだ。
(こんなんで大丈夫か? マリオのアリの件

まあ両チーム楽しんで戦えるからいいか!)

ホタルは心配になりつつもマリオチームと

ドンキーチームの戦いをみまもるのであった。

試合の方はまずイカガールがローラーを転がし敵を避けながら色を塗っていった。

しかしそこに何かが襲う

それは二丁拳銃型のスプラマニューバを使う
デューデーの姿だった

ローラーで色を塗るイカガールの邪魔をする
デューデー。

しかし何者かの攻撃が

デューデーにあたる。

それはマリオのスプラシューターだった。

デューデーはマリオに妨害され

攻撃を避けることに専念する。

その間イカガールはローラーで塗ることに
専念した。

だが邪魔はまだいた。大きなたまが

イカガールを襲うイカガールは避けながら

ローラーで進む。そのたまの正体は

ドンキーが出したスプラブラスタの弾だった。

それに対してシオカラーズのふたりが解説する。

「パワフルなドンキーならではのやり方だね

しかもあの武器を軽々と持つとは」

「ローラー使ってるイカガールはあれを華麗に

避けてるね。しかし、ナワバリバトルは

陣地取りゲーム。弾の当たった地面は相手の

陣地の色になる。ローラーでせっかく縫ったところが

ドンキーのチームの色になりつつあるね」

そんな中イカガールはスプラローラーのインキが

きれ始めてることに気づく

(まずい補充しないとー)

イカガール直ぐに自分の陣地の色に行き

インキを補充しようとする。するとどこからか

弾が向かう。素早いスピードで遠くからきた弾を避けるイカガール。その弾はイカボーイのスプラチャージャーだった。

その近くにはスプラブラスターを持ったドンキーがいる。インキの補充をしようとするイカガールだがやむを得ず自分の陣地の色のインキにイカの姿になり隠れる。

しかしイカボーイは容赦なく撃つ。

いつの間にかイカボーイの陣地の色に周りは染って言った。

イカボーイは夢中でうち続けてた。その時バシッ！

後ろから何者かがイカボーイの頭を叩いた。

「カ、カービー！ なぜこの高台に！」

カービーは風船のように体を膨らませ空を飛びイカボーイに近づいたようだ。

これを見てたホタルはこういう。

「あれって反則じゃない？」

「いいんじゃない？」

あの高台は飛べなくても行けるし

ジャツジくんも反応してないから

大丈夫だよ！」

「いいのかなあ？」

シオカローズは放送席で話していた。

カービーは筆型の武器ホクサイをふりまわして

イカボーイを襲うが、イカボーイは

イカの姿になり自分の陣地のインキに隠れ

逃げていった。

カービーはインキを吸い込もうとする。その時

「カービー！ さすがにそれやったら反則！」

ホタルが放送席から大声で指摘した。カービーは

吸い込むのをやめてイカボーイを追うのだった。

一方デューディー1人に苦戦していた。

マリオとヨッシー。そしてそこに容赦なく

別の攻撃が降りかかった。

それは連射してるインキの弾だった。

マリオとヨッシーはその容赦無しの攻撃に歯が立たない
それを出してるのはデデデのスプラスピナーであった。

「大王！ オイラにも当たってるぞ！」

指摘するデューディー。

「勝つには多少の犠牲はつきものだ！」

ヨッシーとマリオ、そしてデューディーは

良ければ容赦なく当たる。

「マリオ！ 僕にかまわず逃げて！」

ヨッシーはマリオを逃がそうとする。

しかしマリオは逃げようとしなかった。

するとデデデの攻撃がやんだ

「な！ 弾切れか！ インキの補充しなければ！」

しかし、インキの補充に時間のかかる武器であるため

デデデは身動き出来なかった。

「いまだ！ マリオ！」

マリオの帽子、キャツピーが言う。

マリオは急ぎデデデに向かい

スプラシューターの銃口を向け連射した。

「なにい!？」

デデデはインキまみれになった。

「くそっ！ 体が動かん！ ギブアップだ！」

デデデは諦めた。するとヨッシーやデューディー
もギブアップする。

「僕ももうダメだ。あとはマリオ任せるよ！」

ギブアップをした。よっシーの言葉に頷き

マリオは先へ行く。

一方イカガールはローラーで色を塗りまくっていた。そこにドンキーがスプラブラスターを持って追いかける。

その時、ドンキーの攻撃を邪魔しているものがいた。それはマリオであった！

「マリオ！ 大王やディーディーを倒したようだな

このような形で勝負することになるとは

やはり俺たちは戦う運命にあるようだな！」

ドンキーはスプラブラスターを

マリオに向けて攻撃。マリオは攻撃を避け

スプラシューターで攻撃する。

2人が争ってる間に残り1分が過ぎていった。

「さあ、ラストスパートだよ！」

どっちが勝つかない！」

「今のところ有利なのはマリオチームね」

シオカラーズのふたりがこう話してる間に

カービィはイカボーイを探していた。

するとカービィはどこから来たか

分からない弾に襲われていった。

カービィは当たりを見返すがイカボーイは見当たらない

カービィは飛んで探そうとするが、飛ぶ前に

弾に狙われる。

するとそこにイカガールがローラーを持ったまま

駆けつける。

「カービィ！ 見えない敵を追うより

色塗り優先して残り数秒だし！」

「わかった」

カービィとイカガールはどこから来てるか

分からないイカボーイの弾をよけつつ

色を塗ってくのであった！

そしてその間ドンキーとマリオは戦ってた

その間にシオカラーズが
カウントダウンを始めた。

「5」

「4」

「3」

「2」

「1」

「0」

「終了！ さあ時間になりました！」

結果はただいま集計します！」

両チームは武器をしまい、結果を待つ。

そして結果発表になった。

「結果は……なんと引き分け！」

「ええっ！」

アオリが引き分けと言うと驚くホタル。

「よりによって引き分けか！ これだと

カービィとデデデのいざこざ収まらないね」

「それでも無いみたいだよ！」

「えっ！」

シオカラーズのふたりがこう話してる間。

デデデをドンキーとデューディーが

じーっと睨んでた。

「大王！ なんてことしたんだ！」

仲間に向かってなんてことを！」

ドンキーが大王に怒鳴る。

慌ててデデデが弁解する

「あれは作戦だ！ ヨッシーとマリオを巻き込めて

良かったじゃないか！」

「よくなーい！ デデデア！」

見損なつたぞ！ カービィの言ってることを信じる！」

怒るデューディー

「しかし肝心な食べ物はないんだ」

カービィはその事を聞いてじーつとデデデを睨む
するとWiifitトレーナーが話しかける。

「食べ物にお困りなのですか？」

そしたら街の皆さんに声をかけて

集めてもらいますが」

するとデデデは少し考えて言う。

「いやいい、こちらで何とかする

そこまでしてもらうのは良くない」

「良くないだと！ 村の食べ物盗んで」

カービィは怒る。そこでヨッシーが止める。

「カービィ、デデデも反省してるようだから

もういいでしょ」

カービィは納得行かない様子だった。

その一方ネスはポーラのテレパシーをキャッチする。

そしてその内容を仲間に伝えた。

それはニセマリオを発見したという情報であつた

ラリーは静かに暮らしたい

ここはオネットのどこか。時間は夜だった。夜の闇に筆を持ち落書きをしているものがいた。その姿はオーバーオールを着て帽子をかぶっている背の小さな男だった。

懐中電灯を持ってた警備員がそこを歩き
発見する！

「待てっ！」

警備員が追うが男は逃げた。男の姿は
かつてキノコ王国を救ったヒーローマリオに
姿がそっくりと証言した。

こうしてマリオはオネット内で指名手配されることになったのであった。

指名手配の紙を見た金髪の少年ポーキーは賞金目当てにマリオを探すことを違うのであった。

その一方マリオが犯人というのは何かの間違いと
思う人達も多かった。

オネットに在住してるキノピオもその1人で
マリオとかかわりのある彼はそれを信じてなかった
ある日彼は1人の男とすれ違いにぶつかる。

「あつー、ごめんなさい」

キノピオは謝った。

「いえいえこちらこそ。互いによそ見しないよう

気をつけよう」

「はい！ えっ？」

キノピオは男を見て疑った。その姿は
マリオの宿敵クッパのいとこの1人
ラリーだった。

「なんでお前が！」

キノピオは慌てる。ラリーは弁解する

「待つてくれ！ オイラは改心したんだ！

クツパ Jr の坊ちゃんは無茶ぶりに耐えきれずここに移住したんだ」

「嘘だつ！ さてはお前がマリオさんの名前をかたつてらくがき事件を起こしたな！

いまマリオさんは疑われてんだぞ」

キノピオは問いつめる。ラリーは説得する

「確かにオイラはマリオの敵として戦った。

しかし今は違う。ただ静かに暮らしたいだけなんだ」
「静かに暮らしたい？」

キノピオは怒りを抑えラリーの話を聞く。

「オイラはクツパ様の命令で坊ちゃんの元にいた。

最初は和気藹々と友達のような仲だった

しかし、彼は過剰になり自分の城を作って

クツパ様を超える魔王になりたいと言った。

それ自体は夢があつていいんだ

しかしながらまだ無名なのに

自分のグッズを作ろうとしたり

歌の練習してライブに1回立てただけで

ライブのグッズを作ろうと言い出したり

付き添いで買い物に行った時に

商品目当てで勧誘に引っかかり

高いもの買わされ

散々な目にあつたんだ」

(なんとという自分勝手……)

少しドン引きするキノピオ。ラリーは話を続ける

「あのわがままにはついてこれない

なにか反論するとクツパ様に言いつけて

何かしらペナルティがある

なので逆らえない

だからこの街オネットに来たんだ」

キノピオはラリーの話聞いて少しは同情していた。しかし彼の言うことを全ては信じてなかった。(クツパジュニアに不満はあるのは

ホントのことかもしれないがそれだけでオネットに来るのはおかしい

ここは…)

「わかったよ」

キノピオは納得する。

「ほんとか！ すまない！」

今まで悪いこととしてすまなかったなピノキオ！

「謝るラリーだが名前を間違えたキノピオは怒る

「僕の名前はキノピオだ！」

「そうか悪かった！ じゃあこれで」

ラリーはその場を走り去った。

キノピオはある人へ電話で連絡した

「もしもし……」

電話に出たのは女の子だった。

「橘さんですね。僕ですキノピオです」

「キノピオくんか！ どうしたの？」

電話に出たのは橘あゆみだった。

「確かあなた探偵さんの助手でしたよね？」

実は調べて欲しいのですが……」

キノピオはラリーのことをあゆみに伝えた。

あゆみはラリーのことを調べた。

そしてキノピオに伝えた。

「キノピオくん？ ラリーは今、配管工のバイト

をしてるそうよ。それだけではなく

家の補修とか工事とか真面目に働いてるみたいよ

とても真面目に働いてるそうね

彼が偽マリオというのは時間的にも

断定できないわね」

「そうですか……分かりました」
ピノキオは納得入ってなかったがあゆみの言うことに従うことにした。

そして時は流れてマリオたちがナワバリバトルをしてる最中キノピオは試合を見ていた。

「マリオさんだ！ マリオさんがこの街に来たんだ

しかし、偽マリオの事件は結構前からある

マリオさんが今になってテレビで公にでるという

ことはやはり落書きのマリオは偽物だ」

キノピオはテレビで得た情報をもとに

調べ会場へ着いた。

「姫様！」

キノピオはマリオたちの試合を観戦してる
ピーチに気づく

「キノピオ？ あなたこの街に住んでるキノピオね」

「そうです姫様。マリオさんがテレビに写ってて

慌ててきました」

するとゼルダがピーチに尋ねる。

「ピーチ？ この子は？」

「この子はキノピオよ。」

私のボディガードのひとりよ

お城に何人もいるのよ」

「へえー、よろしく」

こう言ったにつこり笑うゼルダに顔を赤くする

キノピオ。

「よ、よろしくお願いしますー！

あ、姫様はなぜこちらに？

あまり外に出られるとクツパにまた狙われますよ」

「クツパのところから逃げ出して今ここにいるわ

マリオとも再会できたし。マリオと一緒にいるわ」

ピーチは嬉しそうに話す。キノピオは話を真剣に返す。

「そういえばマリオさんが落書き犯として

指名手配されてるのですが、姫はどう思います」

「それは……」

「キノピオくん？」

ピーチ姫が偽マリオについて話そうとした時

誰かが話をとめた。それはキノピオと

以前話してたあゆみだった。

「どうしたの？」

「あゆみさんもこちらにいましたか。

今姫とお会いして偽マリオについてお話しようとしてたところです」

「なるほどね。私もそのために来たのよ。

話によるとWiFiFitトレーナーさんの店を

襲って、その後逃げられてね。

跡をたどってるのかなの。

で、警察やテレビに頼んでマリオを

テレビに移してアリバイを実証する

ということなの。今」

「なるほど！ では犯人がテレビを見て

逃げないうちに捕まえないと」

納得したキノピオ。その言葉に一同が固まる。

「あっ！ そうか！ それはまずい！

急いでポーラに連絡しないと」

あゆみは犯人の逃走を考えておらず慌てる様子だった。

すぐに仲間のポーラに連絡し、街の警察に

連絡した。

そしてキノピオは話す。

「そういえば、ラリーですよ、ラリー。

彼の動きを見た方がいいと思います」

「でもラリーは無理なんじゃない？」

「時間的に犯行は？」

キノピオの言葉にあゆみが言い返す。

しかしそこでさらに言い返した者がいた。

「絶対にそいつが犯人でない確証はあるのか？」

それはゼロスーツサムスだった。

「仕事をして忙しいから反抗ができないというのは

ひとつの考えだ。だが決めつけてはいけない」

「そうそう。実際に彼のところ行ってみないとね」

するとピットも話に参加する。

あゆみは考えをなおした。

「そうよね……あうやくきめつけて

真実を逃すところだった実際に

ラリーのところ行きましょう」

するとWi i F i t t レーナーも話に参加した。

「私も行きます。あどこのワンちゃんも」

ダックハントを連れてきてこう言う。

あゆみは次にこう提案する。

「ピーチとゼルダはここに残ってた方がいいね

また襲われるとあれだし」

「でも……」

ピーチは不安になる。

するとマルスとリンクが近づいた。

マルスはこう言う。

「大丈夫だ、僕とリンクがいるから。

ネスもいるし」

こうしてキノピオ、あゆみ、ゼロスーツサムス

Wi i F i t t レーナー、ダックハント、ピットは

ラリーの元へ向かうのであった。

キノピオ達はラリーの元へ訪ねた。

すると彼は仕事で家にはいなかった。

帰ろうとした時一同はラリーを目撃する。

「な、なんだ！ お前たち！」

驚くラリー。するとラリーはキノピオに気づく

「キノピオ！ お前また！ それに見たことない連中ばかりじゃないか

またオイラを疑いに来たのか！」

キノピオはラリーを、じつと睨んでる。

「そ、そんなに睨むなよ。ほらマリオが

テレビ出てるじゃないか！ これでマリオが

ラクガキ犯かどうか疑いが晴れるだろ」

するとピットはこういう。

「今僕達は一言もマリオのこといつてないけど？」

「そ、それはだな、キノピオがオイラを

疑ってるのは目に見えている。

だからだよ」

ピットの言葉にムキになり返すラリー。

するとラリーは急いだ様子で支度した。

「じゃあ俺は仕事があるからな。オイラは今から3つの

バイトをする。この間に事件が起きても

オイラにはアリバイがある。オイラを

疑ってもそれは的外れってことよ。じゃあな」

するとラリーは走っていった。

「困ったな。ありや疑いを向けても

ほぼほぼシロだ。容姿で判断しても

それは言いがかりでこちらが訴えられてしまう」

ピットは悩む。

するとあゆみが提案する。

「こうなったら片っ端から聞いてみましょう！」

「聞くって誰に？」

「決まってるわ。ラリーのバイト先によ！」

「えっ！ でもどこでバイトしてるかなんて分かるの？」

驚きを隠せないピット。しかしあゆみは話し続ける。

「前に私調べてるのよね。それでだいたい知ってるわ
彼は工事のバイトをしてたり、大工の仕事を
してるらしいわ。その人たちに聞いてみるわ。
みんなも手伝って！」

「えっ！」
怯む一同。しかし、あゆみに言われた通りバイト先の人
達に聴き込む。しかし普段は真面目に働いており
ニセマリオになり落書きをするような不審な
動きは見られないようだった。

「困ったな。これじゃ証拠が分らないぞ」
ピットが悩む。そこでWifiittレーナーも悩む。
「話を聞くと私たちが襲われた時も
バイトをしていたようで、

しかもかなり距離離れてますね」

「もしかして休憩時間とか？　そこで悪さをすれば」
言い返すピット。しかし、あゆみは言い返す。

「確かにそしたら私の見た落書きの時間帯も

辻褄が合う。12時頃に目撃されてるわけだし

その時間ラリーが休憩してることは

さっきの聞き込みで裏付けされている。

でも1時間は現場からかかるわけよ

距離的には」

するとWifiittレーナーが話す。

「私の店を落書きした時とやはりバイトしてましたね

その距離から店までは時間がかかりますね

やはり」

「地面ではなく屋根をつたってとか？」

「それはありえませんが。運動神経がある私や

サムスさんのように素晴らしい体力を

お持ちの方でも時間はかかりますね
建物登る時間とか考えても」

ピットの言葉に W i i f i t t レーナーが言い返す。
サムスも話す。

「小柄で早めに行けば屋根の上も行けるが

それだと目立つはずだ。目撃者もいるはずだ

例えそれをして、多くの人が目撃をする

ので不自然だ。そらをとぶことも

難しいと思う」

悩む一同。すると空を飛んで見回りをしていた。

カモがあるものを拾ってきた。それは時計だった。

時計の臭いをダックハントのイヌが嗅ぐ。

これの匂いを辿るようにダックハントは
歩き出した。

「ワンちゃんが時計の匂いを辿るようね」

着いていく一同。するとさきこについたのは

先程訪れたラリーの家だった。

「ということは、この時計はラリーのものか」

ピットは言う。するとサムスはカモに聞く。

「これはどこに落ちていた？　これがあつた場所に

なにか手がかりがあるかもしれない」

カモは飛ぶ。それに着いてく一同

するとその場所はラリーのバイト先の付近であつた。

(うー、結構歩いたな……)

クタクタのピット。するとそこはラリーの

バイト先の職場の近くだった

「またか！　さつきから同じところをー！」

ピットが喚く。するとあゆみが話す。

「ピット君。わがまま言わないで、

それに無駄じゃないかもよ。これを見て」

するとそれは。人ひとりが入れるぐらいの

大きな緑色の土管だった。

「これがどうしたの？」

ピットは疑問に思う。するとダックハントのイヌが匂いを嗅いでいる。

「ワンワン！」

「ワンちゃんがこの土管が気になるらしいよ

中に入ってみましょ！」

「えっ！ 入るの？」

あゆみの提案にピットは戸惑う。しかし、ほかのメンバーは入っていった。

ピットも続いて入っていった。

土管の中に入り下に降りるとそこは下水道だった。懐中電灯をつけ当たりを照らしているのがあった。そこは匂いが臭く。下水道なのにゲツソーというイカが泳いでいた。

(こんなところにイカが何故?)

疑問に思うピット。辺りを見回す一同の中

サムスはひとつ思う。

「確かにここならば道は繋がってるし、

ショートカットも容易い」

「ワンワン！」

するとダックハントが吠える。

「これは！」

キノピオが驚く。それは小さい足跡だった。

「これは亀族の足跡！ これがラリーのものなら

実証はつく。あゆみさん写真を！」

あゆみは写真を撮った。しかしWifiトレナーが疑問に思う。

「仮にこの足跡がラリーのものとして

彼が認めますかね？ あっても仕事の時についたもの
と
言い始めるし」

するとサムスが提案を出す。

「ダックハントの持ってきた時計と、ここで証拠に

なるものは写真に撮っとけばいい

それに、私はやつに言い訳できないよう策をねってる」

そしてマリオたちのナワバリバトルが終わった。

バイト終わりのラリーは影に隠れた。

「ふう。あいつらにバレたらいままで

オイラのつんだものが水の泡だ。

マリオの試合がそろそろ終わる

テレビの中継が終わればオイラへの疑惑は

少ない。テレビの中継が終われば

動き時だ！」

「さて、中継は以上です。

お相手はシオカラーズでした

まったね〜」

シオカラーズのふたりが中継を終わった。

テレビの放映は終わった。

「よし今だ。だがここではマリオの変装は

不自然だいつも通りで……」

ラリーは土管の前に駆けつける。

「よし、今なら！」

すると後ろから何かがラリーに当たった。

「なんだ痺れが！」

それはサムスのパラライザーだった。

駆けつけるキノピオたち。ラリーはかこまれた。

「な、なんだ！ うわっ！」

「バウバウ！」

ダックハントのイヌが噛み付いた。

するとダックハントは何かを取り出した。

それは透明なマントと筆だった。

「こ、これは？」

キノピオが驚き、聞く。

「こ、これはな、たまたま拾ったんだ」

するとキノピオは時計を見せる。

「そ、それは！」

「下水道で足跡をみつけた！　そしてこの時計も

ここにいた犬がそれを証明した！」

キノピオは断言する。しかしラリーは言い返す。

「そんなのそこにたまたま落としただけだろう！」

それだけで事件の証拠にするのはおかしい！」

するとあゆみがダックハントのカモを見せつける。

「ここにいたピーちゃんが見せつけよう！」

するとカモの首輪についてるカメラから

メモリーカードを取り出す。

あゆみは持ってきたパソコンに映像を映した。

「よし今だ。だがここではマリオの変装は

不自然だいつも通りで……」

こういったラリーが変装しようとする。

「こ、こんなの口で言ってるだけだろ！」

慌てるラリー。そこにシオカラーズの

ふたりがやってきた

「あなたはさっきテレビで映ってた方々。

何故ここに？」

「実はその子がしらばつくれないうように

証拠を持ってきたの

私たちって有名だから人間はもちろん

イカからもフォロワー貰ってるのよ」

アオリが素晴らしい、ホタルはSNSの写真を見せつける

すると下水道で、ニセマリオに着替える写真があった。

他にも数枚証拠となるような写真があった。

「な、なんで！」

口を開け驚くラリー。ラリーは閃く

(そういえばあそこにはゲツソーがいた。)

まさかあいつが、裏切り者め!)

「さあ、観念しろ!」

ピットがそういう。するとラリーは開き直すように言う

「うるさい! オイラはなただ静かに

暮らしたかったんだ。ジュニアぼっちゃまの

ワガママから逃れつつ与えられた任務を実行

してただけたさなんだ!」

「だが、そのせいでマリオは疑われたんだ!」

サムスが興奮するラリーに言う。ラリーは

怒るように返す。

「うるさいデカ乳女! マリオもオイラの同族を

殺したんだ。クツパ様の部下という理由で」

「なっ! 貴様!」

「サムスさん! 落ち着いてください!」

だけどマリオさんに罪をきせるなんて

ダメです! ラリー!」

キノピオはムツとなったサムスを止めて

ラリーを諭す。

「ラリー、君を誤解していた。

ジュニアが嫌になって逃れたことは

本当だったんだね。あの時は悪かった」

謝るキノピオにラリーは申し訳なさそうにしてた。

「だが、オイラは媚びないぞ。キノピオ

オイラもコクツパ軍団のはしくれ!」

するとラリーは伸び縮みできるマジックハンドである

ウルトラハンドを取り出し、ダックハントから

筆を奪還した。

そしてニセマリオに変身した。

「もう静かに暮らせようが関係ない

この静かなまちオネットももう終わりだ。

オイラがめちやくちやにしてやる」

ニセマリオになったラリィは早速逃げ出す。しかしどこからか大量の水がかかってきた。

「うわっ！　なんだ！」

ニセマリオは滑って転ぶ。すると誰かが叫ぶ

「PKフリーズ！」

するとラリィにかかった水が凍り出した。

「う、動けない！」

そこにはマリオたちがいた。

あゆみからの連絡を受けポーラたちも駆けつけた。ポーラはラリィをせめる。

「観念なさい。私がかけたPKフリーズ

はそう簡単に解けないわよ！」

ラリィの手足は氷で固められていた。

「俺はただこの街で静かに暮らしたいのに

なぜこんなことを……」

「あなたが余計なことをしたからよ。

さあ、弓と矢はどこなの？」

抗うラリィにポーラが追い詰める。

するとラリィは返す。

「知らない！　そんなものは知らない！

ホントなんだ！　落書き犯の汚名を

マリオに着せるのが目的なだけで

そんなものは知らない！」

「そんな嘘を……　！」

するとポーラは何かを察知する。そしてネスに命令する。

「ネス！　ラリィに向かってPKファイヤー

今よ！」

ネスは一瞬躊躇ったがPKファイヤーをラリー
目掛けて撃つ。

「おい！ マジか！ やめろ！」

PKファイヤーは叫ぶラリーに向かって
放たれた。しかしラリーは無事だった。

そしてそこには焦げた矢が落ちてた。

ピットがそれを拾い呟く。

「これは？もしかしてブラピの矢？」

ラリーに向かってこれが撃たれたってことは

ラリーが犯人じゃない！ 誰なんだ？

ブラピはこの矢を持ってなかったし」

すると向こうから声がする。

「くそっ！ もう少しだったのに！」

振り向く一同。そこには黄色い帽子を被った

太ってるいかつい顔のマリオに似た服装の男がいた。

マリオの帽子であるキャツピーが聞く。

「君は一体誰なんだ？」

男は答えた。

「俺だよ！ ワリオだよ！」

暴かれる真実

ニセマリオの正体はクツパ軍団のラリーであった。しかし、落書き犯なのは事実だが、

弓と矢を使い市民を暴走させていた犯人とは別だった。その男は鼻が赤く、いかつい顔で、マリオに似た服装の下品な男ワリオだった。

彼はマリオたちの目の前で鼻くそをほじりそれをその辺につけた。

周りの者たちはひいていた。

「この矢の力を使えば、俺様の思うままに

兵士を作り、金儲けのきっかけになろうとしたのに

よくも邪魔してくれたな」

そういったワリオにあゆみが言い返す。

「酷い！ そんなことでワンちゃんやイカちゃん

たちが大変な思いしたのに…」

「サイテー」

「下品！」

他の女性たちもヤジを飛ばす。

するとマリオの帽子であるキャツピーがマリオに聞く。

「そういえばあのワリオってやつマリオに

似てるけど知り合い？」

聞かれたマリオは横に首を振る。

するとワリオがすぐに反応する

「なんだと！ マリオ！ 俺様を忘れたのか！」

マリオは頷く。悔しがるワリオ。

するとピーチ姫が怒るように聞く。

「あなたさつきからマリオみたいな格好してるけど

なんなの？ 不愉快だからそういうのやめてくれる？」

たじろぐワリオ。しかし開き直りこう言う。

「俺様はマリオの幼なじみだ！ かつてマリオとも戦ったことがある！」

あの時はわざと負けてやったのだ。ガハハハ
あと服は俺様はまねたわけじゃない！

真似たのはマリオだ！」

笑いながら説明するワリオ。しかしピーチは怒っていた。

「マリオ！ あいつやきつくして！」

マリオは炎の力を強めワリオに向かって

発射しようとする。しかしワリオは

命乞いをする。

「待ってくれ！ わかった！ 矢は捨てる。」

これで許してくれ」

ワリオは弓と矢を手放した。しかし

心ではこう思っていた。

(馬鹿め！ ここに1本矢を隠し持っている。

これを投げれば…… ってあれ?)

ワリオは隠し持っている矢をマリオに投げて

当てようとしたが矢がない。すると

後ろからワリオは何者かに頭をぶたれた。

「あたー！ 誰だ！」

「誰だじゃねよ。手こずらせやがって！」

「ブラピー！」

ピットが呼ぶ。ワリオを殴ったのはブラピと

そのそばにいるパクションフラワーだった。

「その名で呼ぶな！ こいつは返してもらおう。」

そして今ここでお前らを消してやろうか？」

弓と矢を奪還したブラックピットは狙杖を

ピットに迎えて構えてた。

すると後ろから何者かがパクションフラワーを捕まえた。

「捕まえた！ パクションフラワー様！」

ブラックピットはそれに気を捉え構えをやめた。
「なんだ！ お前、おいやめろ！」

嫌がるパツクンフラワーから離れてないのは女性であった。それはダツクハントが暴れた時カフエの店員をしていたモナという少女だった。パツクンのトゲが刺さってるのにも関わらず話さないモナに呆れてるパツクンだった。

「モナ？　なんでこんなところに」
ポーラと共に来た女子高生、織部つばさが尋ねる。

「つばさ？　あゆみ？　なんでこんなところに？」
モナが聞く。つばさのパートナー、シーダはつばさに聞く。

「知り合いですか？」
「同じ学校なの」
「なるほど！　お友達なのね」
つばさとシーダは楽しそうに話す。

あゆみはモナの問いに答える。
「みんなでマリオの濡れ衣を調査してて
そしたらあそこに変なおじさんが現れて」

「変なおじさん？」
あゆみに言われモナはワリオを見る。

「おじ様！　何してんの！」
「おじ様？」

叫ぶモナにあゆみが疑問に思う。
「モ、モナ！　これはな理由があるんだ

聞いてくれ！　偶然拾った弓と矢をあそこにいる
ワンコロに撃ったら。暴走したんだ。

そしてそいつらを従わせるため、何人が撃ったんだ
するとモナは怒りながらワリオに問い詰める。

「おじ様！　それでみんな迷惑してるのよ！」

あゆみがチンピラを倒すほど凶暴になったとか聞いたけどまさかそれおじ様?」

「覚えてないが、多分……」

襲ったチンピラを狙ったのだが照準が

ズレたんだ」

モナは言葉が出ない様子。あゆみは反論する。

「ひ、酷いわ! サイター!」

「私の友達になんてことを!」

ワリオにビンタするモナ。

「おじ様なんてだついキライ! 今日から

私の憧れの人はパツクンフラワーよ」

モナの発言にピーチ姫はこう思う。

(なんか男を選ぶセンスがアレよね。あの子……)

するとブラックピットとパツクンフラワーは

そのいざこざに紛れ逃げようとする。

そこにポーキーという金髪の悪ガキが

現れる。

「おいお前たち! その矢オネットを騒がした

矢だよな? 俺によこせ」

脅すポーキー。ブラックピットたちは頑なに断る。

「は? お前に渡せるわけねえだろ。」

そこどかねえと脳天ぶちまけるぞ!」

狙杖をポーキーの頭に当てるブラックピット。

ポーキーは言い返す。

「下見てみるお前」

「下? な、なんだこれ!」

ブラックピットの下にはトリモチがあつた

足から離れない様子だった。

「スキあり!」

ポーキーは狙杖をブラックピットから奪い捨てた。

「何すんだ! お前!」

バックンフラワーが反撃するしかし、ポーキーはバックンフラワーにスプレーをかけた。

「ギャー！　なんだこれは！　力が……」

「除草剤だよ！　矢は貫うぞ」

沢山の矢をポーキーはブラックピットから盗んだ。するとマリオとピットはポーキーの動きに気づく。

「何をするつもりだ！」

ピットがとめる！

「お前たちはいつぞかの！　だが遅い！」

この力で俺は新世界の神になるんだ！」

ポーキーはそう言い張る。

ピットは周りに声をかける

「みんなポーキーを止めろ！」

周りのものたちはポーキーに向かって走る。

「イヤ、限界だ！」

今だ！　俺は人間をやめ新しい姿になるんだ！」

ポーキーは大量の矢を自らに刺した。

するとポーキーはその場で血を流し倒れた。

ブラックピットはトリモチから逃れ、ポーキーの

近くにある大量の矢を拾い、着いてる血を拭き取った。

「全くやれやれだな！　救いようもない

死に方をして」

除草剤で弱ってるバックンを連れていきその場を立ち去ろうとするブラックピット。

その時

ポーキーが動き出した。

「なっ！」

驚くブラックピット。

するとポーキーは巨大な姿になった。

オネットにある一軒家の屋根と巨大化した

ポーキーの腰が同じ位置にあった。

ポーキーはブラックピットを平手打ちでパツクン諸共吹っ飛ばした。壁に打たれ2人は気絶してしまった。巨大化したポーキーはオネットを歩く。アスファルトは割れ、建物は1部壊れる逃げ惑う人たち。

「みんなポーキーを止めるのよー」
ポーラは指示する。

ピットは高くジャンプし屋根に上がる。ピットは矢を当てるしかし矢は全て弾かれた。

「くそっ！ どうすればー！」
すると上から何か落ちてきた。それはブラックピッドが持っていた狙杖のいろちがいだった。

「これは？ もしかしてパルテナ様が！ よしー！」
一方インクリングのガールとボーイは屋根上からスプラシューターでインクをポーキーにぶちまけていた。

「ボーイ！ 下に撃ってー！」
ボーイはガールに言われた通り下に撃つ。ガールはポーキーの目に向かって撃った。インクがポーキーの目にあたり、ポーキーは目を塞いだ、そして足下にあるボーイが撃ったインクの後の上で滑らして転び仰向けに倒れた。

「よし！ 今だー！」
ピットは狙杖で狙いを定める。そして撃った。しかし狙杖の玉は跳ね返ってきた。ピットはかすれたが当たることは無かった。

「うわー！ なんだ」
ピットはポーキーを見る。すると全身がメタル化されていた。ポーキーは口と

両手から、何かを生産した。

それは元の大きさのポーキーだった。

元の大きさのポーキーが大量に現れた。

その数は何十人にも及ぶ

量産されたポーキーたちは街の住人を

襲い始めた。

店の食べ物を食い散らしたり

子供の遊具を横取りしたり

恐喝したり、やりたい放題だった。

「こんなガチャガチャしてたら狙杖が

使えないじゃないか！」

ピットが悩んでると、巨大ポーキーは動き出した。

しかし起き上がるのに時間かかるようだった。

そこにドンキーがバレルジェットで飛んでる

デーデーにぶら下がり空から降りてきた。

ドンキーは空からポーキー目掛けて

拳をおろし空襲する。

拳は命中するがメタルの体のポーキーには

傷一つつかなかった。

デーデーは二丁拳銃のピーナツポップガンで

周りのポーキーの分身を倒す。

ドンキーは何度も叩くがメタルの体には効かない。

そこに何者かがきりつけた！

「喰らえー！」

するとメタルの体に傷がついた。

切りつけたのはベレットのもとで修行していたエイト
だった。

「メタル切りだ！ 参ったかー！」

メタルの体が傷ついたポーキーは起き上がる

そして等身大のポーキーの分身を出して

ドンキー達を足止めした。

一方ネスの友達のジェフは小型ミサイルで
ポーキーの分身を破壊、プーは超能力で応戦した。
ポーラに手足を氷漬けにされてるラリーは
逃げられない様子だった。

そこにポーキーの分身が襲いかかる。

「うわぁー！ 助けてくれー！」

その時何者かが火を放ち、ラリーを封じ込めてた
氷を溶かした。

それはネスだった。

ラリーは急いで逃げていった。

（馬鹿め、お人好しがー！これでオイラは自由だ！）

ラリーは自由になり逃げたがそこには

ポーラに襲われてる街の人達が居る光景だった。

そこにはモナとあゆみが襲われており、

カルネージフォームになったつばさが2人を

守っていた。

しかし、応戦してるつばさは疲れ切っていた。

「つばさ？ 大丈夫？」

心配するあゆみ。するとポーキーの一体がつばさを
おそう。

その時、ポーキーの分身は何かに当たり消滅した。

そこにはラリーが杖を持って現れていた。

「助けてくれたの？」

あゆみが尋ねる。ラリーは黙って頷く。

「ありがとう、みんなを助けてくれて。

さつきは追い詰めてごめんね」

あゆみは笑顔で返す。ラリーは照れながら

「べ、別にお前のためじゃないぞー！」

これは街のためだからな！

そんなことよりもここは危ない

オイラに任せろ！」

するとあゆみとモナは安全なところへ隠れる。

しかしつばさは下がらなかった。

「私はみんなを守る。だから下がらない」

するとそこで、何者かがポーキー達を撃ってきた。

そこにはダックハントがいた。

ダックハントはガンマンに頼んで

ポーキー達を撃ってもらった。

ダックハントはあゆみ達を安全な場所へ案内した。

辺りそこら中には落書きを顔にされてねてた

ポーキー達がいた。

そこに怒ったプリンがいた。

プリンと合流したダックハント達、

そこにはピーチとゼルダを守っている

リンクとマルスがいた。

リンクとマルスはポーキーの分身に対して

必死に応戦していた。

するとピーチに襲いかかろうとするポーキーの分身。

「いけない！ 姫下がって！」

キノピオがピーチを庇った。するとその体当たりで

ポーキーの分身が消滅した。

「すごいじゃないキノピオ！」

褒めるピーチに照れるキノピオ。

しかし油断したキノピオの背後にポーキーの分身が

襲いかかる。すると

それを何者かがペイント弾で倒す。

「大丈夫！ キノピオ？」

声をかけたのはシオカラーズのホタルだった。

シオカラーズの2人が助けたようだ。

「油断しちゃだめだぞ！」

アオリはキノピオに注意した。

一方

ゼルダはデインの炎で敵を寄せつけていないが、
りがない様子。つばさとダックハント、ラリー
が助太刀をする。

そこに、大きなポーキーが迫る。

ゼロスーツサムスとWiifittレーナーが

屋根の上からそれぞれパラライザーと太陽礼拝を

出して足止めをする。しかしそれは聞かない様子だった。

「お前、そんなのが出せるのか？」

太陽礼拝を出すトレーナーに驚くサムス。

ポーキーがピーチ達に襲いかかろうとする。

その時、何かを追うようにポーキーが進路変更した。

それは小さいタイヤだった。小さいタイヤが

ポーキーを誘導していた。

「お前たち大丈夫か？」

ドンキーとデューデューを背負ってデデデが

現れた。

「今カービィはオネットのはずれに誘導してもらってる

　　マリオがヨツシーに乗ってはずれに向かっている

　　トドメはマリオがさすつもりだ」

ポーキーはタイヤになったカービィを追って

はずれに向かって歩いて言った。

しかし街の人を見て、襲おうとする。

その時狙杖の玉のような一筋の閃光がポーキーをかすれた

それはベレトの家からだった。ベレトが矢を放ったのだ。

オネットの外側に誘導された、巨大ポーキー

そこにヨツシーに乗ったマリオがジャンプ

マリオがマリオファイナルという炎の玉の

連続攻撃をお見舞した。

するとポーキーはそばにあった湖に落ちた

そしてピカチュウが雷を起こし

その雷がポーキーに見事に命中するのであった。そしてポーキーは倒れ、元の姿に戻った。

ポーキーは湖の上でプカプカ浮いていた。

「やったー！ これで全てが終わったんだ」

駆けつけたピットは喜ぶ。インクリングたちやネスたちも駆けつけた。

するとプカプカ浮いてるポーキーは警察に連行された。

一方ラリーも警察に連行される様子だった。

「待って！ その子は私を助けたのよ！」

あゆみはラリーを庇う。

「いいんだ。俺は一回捕まる。だがマリオとの

戦いが終わった訳では無い。

「そうだこれを受け取ってくれ」

するとラリーはどせいさんという謎の生き物を

あゆみにあげた。

「これは？」

「この先役に立つみたいなんだ。俺らのボスが

言っていた。マリオに負けたらこれを渡す

よう言われたんだ。いずれは取り返す。

だからこれをお前たちに預ける」

そしてラリーはパトカーに乗り連行された。

一方逃げようとするワリオ。

「おじ様！」

モナが通せんぼする。

そこにはマリオたちもいてワリオを囲んでいた。

「くそっ！」

「矢の件はまだ終わってない！ 覚悟しろワリオ！」

マリオの帽子キャツピーが言う。

(こうなったら)

するとワリオは力み始めた。

「これは！ みんな逃げて！」

「もう遅い！ さらばだお前ら！ また会おう！」

モナは叫ぶもワリオは強大なオナラをしてそのまま飛んで行った。オナラは大きく前が見えないほどだった。

「くつき！ なんだアイツ！ 逃げやがって！」

ピットはそういう。そこに、矢がピットをかすれる。

放ったのはパツクンフラワーを抱えてる

ブラックピッドだった。

「勝負はお預けだ！ またな！」

「待て！ ブラピー！」

ブラックピッドは逃げていった。

オナラが綺麗に無くなったあと。ポーカーに破壊された街を市民と一緒に立て直す。マリオたち。

すると放送が流れた。

「マリオさん。市長からお呼び出しがあります

今日中に市役所へ来てください」

新たなる旅（オデッセイ）

ワリオやポーキー、そして偽ワリオ事件を解決したマリオたち。しかしマリオは放送で市長に呼び出しされた。ピーチと同行したマリオは市長室へやってきた。そこには可愛らしい犬のような姿をした女の子がいた。

「ようこそいらっしゃいました。私、市長の秘書のしずえと申します。市長はこちらにいます」

するとそこには赤い服を着た男の子が市長の席に座っていた。マリオとピーチは辺りを見回す。

「市長なんてどこにもいないじゃないか！

いるのは子供と君だけ」

マリオの帽子、キャツピーがこういう。

すると男の子としずえはショックになる。

「そこにいるじゃないですか！ ほら赤い服を着た

人がそこに！ その人が市長です」

しずえは必死にそう言うともマリオたちは笑う。

「だって、その子は子供じゃん」

キャツピーはそういうのが怒ったしずえは説明する。

「こちらにいるのがオネットの市長です！

前任の市長が金を持ち逃げし、新しく

就任した市長なんです！ 子供とは

失礼な！」

しずえが必死に弁明するとマリオたちは驚く

「ホントに市長なの？」

ピーチが聞くと市長の男の子は頷く。

「それはごめんね。子供と思って知らなかったんだ」

謝るキャツピー。市長はソファに座るようマリオたちを促し、そしてしずえと市長はマリオとピーチと

対面するように座った。そして、しずえが話す

「ではお話をします。早速ですがマリオさんには

この街の修理をしていただきたいのです。

ですがそれには莫大な予算が必要です

それを支払っていただきたいと」

「そのお値段は？」

ピーチが恐る恐る聞く。するとしずえは紙を見せる。

ピーチは驚く。

「こ、こんな額払えるわけないじゃない！」

ピーチは怒鳴る。怯える市長としずえ。

しかししずえは提案します。

「そ、そんなことかと思うので、実はマリオさんに手伝っていただきたいことがあるのです。

それをすれば我が街でどうにか負担できるゆえ」

「それは？」

慌てふためくしずえにピーチが尋ねる。

「それはですね、ニードンクシティの市長と

交渉をするのです。中でもマリオさんは

その市長と昔交流があったようで」

しずえはこう言うがマリオは思い当たることがなかった。

「なので私と市長とマリオさんで交渉して

上手くすれば援助が受けられるはずなんです。

協力して頂ければ」

マリオはそれに頷く。ピーチは少し戸惑っていた。

(マリオもしあれなら私の財産の一部を……)

ピーチはそう言うがマリオは断った。

(マリオ……私のことを思って)

ありがたく思うピーチ。しかしキャツピーは疑問がある。

「市長がいない間、オネットの市長は誰がやるんだい？」
すると奥のドアから誰が来た。それはピンクの髪の毛の

女の子だった。

「この子は？」

「市長の古くからのお友達です。この方とたぬきちさんが代理をされるようです」

笑顔で微笑む女の子。その後しずえと市長の男の子は女の子に託しマリオと共に市役所の外へ出た。

すると外にはポーラと今まで一緒に戦った

仲間がそこにいた。

「みんなどうして？」

ピーチが尋ねる。

「何って、これからみんなが何をすべきか

ここで決めようと思ってね」

ポーラがそう言う。

ポーラは近場の公園に移動しそこで話をした。

「今から言うわ私が夢で見た70人の戦士にて

正確には70を超える戦士が私の夢にいた。

ここにいるメンバーではマリオ、リンク、ドンキー

ヨッシー、サムス、ピカチュウ、カービィ、プリン

ネス、ピーチ、ゼルダ、デューデュー、デデデ

マルス、インクリング、WiFitトレーナー

ダックハント、ピット、市長、しずえとなってるわ

そういえばあのワリオや黒いピット

パクションフラワーなんかもいたわね」

「プリンに市長やトレーナーが！ しかも敵である

アイツらもか！」

驚くピット、ポーラは頷く。

「私やつばさ、モナは入ってないのね」

少し残念そうなあゆみ、そこでキノピオが言う。

「あの？ 僕は？」

「あなたは確かピーチの盾にされてたわね」

「盾！」

ポーラの返しに驚くキノピオ。

「盾か、なんて光荣な…… ピーチ姫の盾なら

光荣です」

(それってMだぞ。キノピオ)

堂々と言うキノピオに心の中でこう思うピット。

そしてポーラが話を続ける。

「おそらくここに集まった人は各々の目的があつて

集まったと思うけどいずれはひとつの終着点

に着くようにはなっているわ。

だからここは各自の目的を優先しようかと

思ってるの」

するとゼロスーツサムスが言う。

「私はそもそも船の部品も集めに来ただけだ。

部品が集まり次第、私は船に戻り

そのまま、ピーチやゼルダが囚われてた

巨大戦艦に向かう」

「ピカッ！」

するとピカチュウが自らもついて行くと

言わんばかりに鳴く。

「お前も行くのか、確かに来てくれたら頼もしいな」

ゼロスーツサムスはピカチュウを撫で、

ピカチュウは喜んでる様子だった。

するとWi i F i t t レーナーが返事する。

「私も行きます！」

「いや、ダメだ。危険な戦いになる。

それに船には入れない」

ゼロスーツサムスは断る。

(ここいつについて来てもらうと色々厄介だ。

彼女のためだ)

ゼロスーツサムスは呆れるように心の中で思ってた。

「サムスさん部品のことなら僕もお手伝いします」

ネスの仲間のジェフが返事する。

「そうか、君は詳しそうだからな。頼むよ」

サムスはジェフを頼りにしてる様子だった。

一方ドンキーとディーデーは話していた。

「オイラ達どうする？ ドンキー？」

「そうだな……」

すると空からドンキーを呼ぶ声がした。

「おーい！ ドンキー、ディーデーー！」

それは大きな檻をぶら下げてた大きなカラス型
ポケモンアーマーガアの姿だった。

その檻にはドンキーのジャングルの長老

克蘭キーコングがいた。

「克蘭キーー！」

地上に降りた。克蘭キーとアーマーガア。

克蘭キーはアーマーガアに話す。

「ありがとう。ドンキーのアニマルフレンドより

乗り心地が良かったぞ。これは礼じゃ」

すると克蘭キーはバナナを一房、アーマーガアに
差し上げた。

「これは駄賃じゃ。わしらには金貨の概念がない

これが金貨の代わりだ」

するとアーマーガアは一房のバナナから二本
バナナをクチバシで取り笑顔を見せ、

そのまま帰っていった。

「なんじゃ、安い駄賃じゃのう。まあそれはさておき

ドンキー、ディーデーー。あの弓の秘密が

わかった」

「あ、それなんだけど克蘭キー」

ディーデーは克蘭キーにここの説明をする

「なるほど。その黒い天使があやつってた弓矢が
人間が手にし、悪しき力を宿したと。ほうほう

そしたら影虫とは関係なのかもしれない」

「影虫？」

克蘭キーの話に疑問を持つドンキーとディーディー
克蘭キーは話す

「ドンキーみたいに、悪しき心に支配されてた

者達はほかにいる。そヤツらからでてきたのが

影虫じゃ。これは原因がわからんが

どうやら悪しき心を持つ成分を持つとるようじゃ

お前たちにはこれを探してもらいたい」

「でも、そう言われてもどこにあるかわかんないんじゃ……」

ドンキーは言い返す。

「そしたらしばらくの間お前たちが着いてたあの

大王がいるじやろう。あのお方についていけば

いずれ影虫の手がかりも終えるじやろう」

克蘭キーはデデデの方を向いた。

「あ、まあ、そうだな」

デデデは顔を背けそう言う。

「待ったー！」

そこでカービイが待ったをかける。

「デデデにはまだあれだ食べ物の件がある！

あれを返してもらわないと」

怒るカービイ。デデデは少し悩み答える

「わかった。食べ物返す。カービイとドンキー、

ディーディーはワシに着いてこい」

すると男のWi i Fi t t レーナーが女のWi i Fi t t レー

ナーに

言う。

「私は店番をする。お前は好きにすればいい」

「あなた…… しそたら私はマリオさんについて行きます」

Wi i Fi t t レーナーは決心する。

「私も行くー！」

「俺も！」

「ワンワン！」

インクリングの2人とダックハントはマリオに乗り気だった。

「僕もマリオについて行くよ」

ヨッシーもマリオと一緒に行くことを決める。

「じゃあ僕も……」

ピットが決意しようとした時、ピットの体が宙に浮く。

(ダメですピット。これ以上は人間の世界に干渉しては

なりません)

「えっ！ パルテナ様！」

ピットはどんだん地上から離れていく。

「ピットくん！」

橘あゆみが空に引かれるようにもどりゆくピットを呼ぶ。

「みんな僕は一旦天界に戻るけど、

そのうちみんなと会うからねー」

こうしてピットは天界に強制送還された。

「ピット君、行っちゃったか」

「あゆみはどうすんの？」

ガツカリしている橘あゆみに織部つばさが聞く。

「わたしはここに残るわ。やる事あるし

つばさは？」

「私はアイドル事務所に行くためニユードンクシティへ

行くわ。ちょうどいいタイミングだし」

2人が話しているとプリンが話に入ってくる。

「プリン！」

「えっ？ あなたも行きたいの？」

でも私はマリオたちと旅するのは違うんだけど」

「プリン！ プリン！」

つばさの返しに怒るように言い返すプリン

「えっ？ あなたもアイドルになりたいの？」

プリンは頷く。

「うーん。わかった一緒にいこう」

「プリンッ！」

喜ぶプリン。しかしピカチュウは不安そうだった
プリンの歌声でみなが眠ってしまったわかないかと。

一方ポーラはネスと話す。

「ネス、あなたはマリオと行きなさい。

わたしやプーの超能力教えてあるから

それを役に立てて」

ネスはOKといい頷く。

「待てネス。俺も行く」

ネスの仲間プーが話しかける。

「ニュードドンクシティには格闘大会が

あるようだ。それに俺も出る」

ネスは頷く。

一方つばさのミラージュとなっていたシーダは
考えていた。

(つばさがアイドルとしてはばたいてゆく。

私も見守りたいが、私は……)

「つばさ、後で話が」

「えっ?」

話しかけるシーダに戸惑うように反応するつばさ。

一方リンク、ゼルダ、マルス、勇者エイトは

話していた。

「僕は祖国へ戻る。祖国が心配だ」

マルスがこう話す。リンクは自分も行くこと頷く。

「君には君の目的があるはずだ。巻き込めない」

「いえ、マルス様。これはみんなの問題です。

いずれはあなたやマリオたちと力を合わせガノン
を倒す。そのためには仲間であるあなたの地へ行き
手助けしたいのです」

「だが……」

説得するゼルダに言い返すマルス。しかしリンクの真剣な目で考え方を変えた。

「わかった。協力してもらおう」

するとエイトが笑顔でマルスを見ていた。

「お前も来るのか？ エイト？」

「俺も行きたいとこだが、ベレトのところで修行して

俺は俺でやる事あるからな。まあまたどこかで

会おうと思うぜ。きつと」

「そうだな。頑張れよ」

笑顔でエイトを励ますマルス。

一方キノピオはピーチと話していた。

「僕はもちろんピーチ姫に着いてきます」

「いいの？ キノピオ？ あなた盾になるのよ？」

「構いません。盾だろうが、なんだろうが」

「ありがとう」

(いいのかな？これ)

ピーチはキノピオのアピールに戸惑いながらも

受け入れた。

そしてポラが各々の目的を確認した。

「みんなやることは決まったようね。そしたらまとめるわね」

ニュードンクシティ組

マリオ、ピーチ、ヨッシー、インクリングボーイ

インクリングガール、ダックハント、

Wi i F i t t レーナー(女)、プリン、ネス

むらびと、しずえ

同行

キノピオ、織部つばき、プー

サムス組

ゼロスーツサムス、ピカチュウ

同行ジエフ

マルス組

リンク、ゼルダ、マルス

ドンキー組

ドンキー、ディーディー、デデデ、カービィ

天界

ピット

行方不明

パクションフラワー、ブラックピット、ワリオ

オネット残留

橘あゆみ、ポーラ、WiFitトレナー（男）

むらびと（女）

別の道

勇者エイト

「あとはベレトさんね。彼も別の地へ行くそうよ」

「ベレトはそうなのか。わかった」

ポーラの言葉にマルスは納得する。

そしてそれぞれは向かうことにした。

マルス達は馬を取りに行きそのまま向かう。

ゼロスーツサムスたちは

ジェフの提供した部品を持ち

サムスの宇宙船、スターシップへ向かった。

そしてドンキーたちはデデデが奪った食べ物を

返してもらったため彼について行った。

そしてマリオたちはという。ホテルに泊まることに

なった。たぬきちがマリオたち専用の船を

作るからだそうだ。

こうしてマリオたちはホテルにしばらく泊まることに

なった。

するとエントランスで待ってるマリオたちの

前に橘あゆみが来る。

「あの、これどうぞ」

マリオにラリーから貰ったどせいさんをあげた。

「これ、よくわかんないけどあの亀の男の子が

言つてたの今後役に立つてたからマリオ

が持つてた方がいいと思つて」

マリオはどせいさんを受け取つた。

「あの。本当は私も皆さんと一緒にいきたいんです

でも戦えないので」

「大丈夫よそのうちまた会えるわ。

だからあなたは自分のしたいことをしなさい」

ピーチはあゆみにさういう。

「ありがとうございまいすー！」

あゆみは感謝をしそのままホテルの入口から出た。

こうしてマリオたちはしばらく

オネットに留まるのであつた。

一方、ある場所があつた。

それはオネットから遙かに離れている、夜のような

暗い場所だつた。そこにはひとつの大きな城があり

コウモリたちがわんさかいた。

その城の中に一人フードを被つた男が入つていくのであつた。

ドラキュラ城編 帰ってきた緑の男

マリオたちは一部の仲間と別行動し、

ポーキーに壊されたオネットを治すため

ニュードンクシティへ向かう船が完成するまで

ホテルに泊まっていた。

エントランスにてピーチがマリオに言う。

「そういえばマリオあの人どうしたの?」

マリオはなんのことか分からなかった。

「わからないの? ヨッシーは分かるよね?」

ピーチの問いにヨッシーもわからない様子だった。

するとピーチは立ち上がり怒鳴るように言う。

「もう! あなた達わからないの? ルイージよ

マリオの弟、ルイージよ」

するとマリオはしばらくして思い出した。

マリオはルイージを探すため旅をしていたことを

今思い出したのであった。

ルイージがいる場所はオネットより離れている。

常に夜のようにくらい、そんな森の中だった。

しかし彼は何者かにより助けられ、

小屋のベッドに寝ていた。

「うーん……」

「気がついたか、ルイージ?」

ルイージは起きた。そして目の前には

小さい背の博士がいた。

「ルイージ君? じゃな? あのマリオの弟の」

「あなたは?」

状況の読めないルイージは聞き返す。

「わしの名はオヤ・マーじゃ。各地にいろんな
発明家を作つとてな、今気になることがあつて
ここに来たんじゃよ」

「気になること?」

「ルイージ君。ここにはあの伝説のドラキュラが
住んでいる城があるのじゃよ」

「ド、ドラキュラ!?」

ルイージは腰を抜かす

「おや? ルイージ君には刺激がつよかつたかのう?」

「そりゃ、ドラキュラっていったら

怖くなりますよ。でもドラキュラってとうの昔に

死んだのでは?」

「ドラキュラは何度でも甦るさ。そこで君に頼みがある」
ルイージは恐る恐る博士の話を聞く。

「君には早速ドラキュラ城に……」

「無理です」

「まだ話は終わつとらんじゃろ!」

即答するルイージに博士は怒る。

「僕、ああいうところは嫌いなんですよ。」

お化け怖いし」

「あのマリオの弟というものが情けない……」

博士は頭を抱えていた。すると博士は閃く。

「そういえば、女性の叫び声が城からしたの

綺麗なドレスを着ておった。もしかしたら

キノコ王国のピーチ姫かもしれんぞ」

「えっ!」

ルイージは耳を傾けた。

「ピーチ姫がドラキュラに攫われて、それを

弟の君が見捨てたとマリオが知ったらどうなるか?」

ルイージは博士の言葉にげっそりとなる。

「わ、分かりました。行きますよ」

「そう来なくてはなルイーダ君！ 早速、わしの発明品を持ってくる」

ルイーダは嫌な顔をしていた。すると博士は大きな掃除機と懐中電灯、携帯ゲーム機を持ってきた。「これって掃除機とゲーム機じゃないですか？

これでどうやってドラキュラを倒せと」

「馬鹿者！ それはただの掃除機ではない！

オバキユームと違ってな幽霊を

吸い込む万能アイテムじゃ。

そしてそのゲーム機は通信機じゃゲームはできん」

「でも、ドラキュラはこれでは倒せませんけど」

「ならニンニクを持ってけ！ グズグズしてると

姫の命は危ないぞ」

するとルイーダは博士からニンニクをもたされオバキユームなどを装備しドラキュラ城の前に無理やり行かされた。

怖がるルイーダ。するとコウモリの大群がでてきた。

「うわあー！ あ、なんだズバットか
紛らわしい」

コウモリ型のポケモン、ズバットの大群にはさほど驚かなかったルイーダだったが

ドラキュラ城の入口に入るのには躊躇っていた。

怖さで足がガクガクするルイーダ。

入口に入ると黒い玉のお化けが驚かした。

「出た！ お化け！ ってポケモンのゴースか

これなら大丈夫だ」

ルイーダの予想外のリアクションに

あっけに取られたゴース。

あたりは暗く、月のあかりと懐中電灯の灯りが

頼りだった。

しばらく探索していると物音がした。

「なんだ、またポケモンか？」

ルイージは音のした方を向くとそこには

「ガ、ガイコツだつー！」

剣を持った骸骨の群れがそこにいた。

慌て逃げるルイージに追いかける骸骨。

ルイージは急いで階段に駆け上がった。

するとそこにはミイラ男がいた。

「ギャー！」

ルイージは猛ダツシユで逃げる。目の前にドアがあり

そこに急いで入る。

「ふうー、ここには誰もいないようだな。」

そこは書物庫のようでルイージは探索していた。

しばらく歩くとまたドアがあり

そこをあげ別の部屋に入った。

そこは広いリビングのような部屋だった。

「ここも誰もいなさそうだ」

安心したルイージは部屋にあるソファに座る。

すると、目の前に骸骨の顔をした鎌を持った

巨大な死神がいた。

(でたつー！)

ルイージは叫ぼうとする。しかし足も動かず

声も出ない。

死神の鎌がルイージを襲おうとしたその時

死神に何かが当たった。

怯む死神、ルイージは死神に鎖のようなものが襲う

のを見た。そして後ろを振り向くルイージ。

そこにはフードを被った男がいた。

男はフードを外した。そして姿を現した。

それは金髪で筋骨隆々の鎖のような鞭を持った男性だった。

十字架を投げた男は死神を倒した。

「君！ 逃げるぞー！ こっちだ」

ルイージは男について行った。そして部屋を急いででて通路に出る。

すると骸骨の群れが男とルイージに襲いかかる。

恐れるルイージ、しかしムチの男は水の入った瓶を投げた。

骸骨たちにそれはあたり骸骨は燃えだした。

「燃えた？ 水なのに」

「あれは聖水だ。 邪悪なものは燃え尽きる」

燃え尽きた骸骨の大群を避け通路を抜ける二人。

出た部屋は崖のようになっており！ ドアまで距離があった。

鞭の男は当たりを見た。

天井にフックのようなものがあり

そこにムチを引っ掛け、ルイージを抱えた。

「君！ 捕まってるんだ」

「えっ！ まさか！」

男はルイージを抱えたまま、ターザンのようにムチを使い向こうのドアがある崖に渡った。

「うわあー」

叫ぶルイージ。

「大丈夫か？ その程度の勇気でドラキュラ城に

入って生き残れるとは大したものだ」

「ええ、全くです……」

目を回すルイージ。そこで男が声をかける。

「俺の名前はシモン。君は？」

「ルイージです。」

「なかなか威厳のある名前だな、度胸はまだまだだが。」

「どうしてここに来た？」

ルイージは何故ドラキュラ城に来たかをシモンに説明する。
「なるほど、博士に頼まれたのか？」

「ここは君が来るところではない、
すぐに帰った方がいい。」

「囚われてる姫は私に任せて」

「ええ、そうさせていただきます。僕には
場違いと思うので」

ルイージはシモンに言われ帰ることを決意する
するとルイージの目の前に

「ギャー！ お化け！」

ルイージは驚かすお化けを見て、驚き慌て逃げる。

「落ち着け！ ルイージ！」

落ち着かそうとするシモン。シモンは十字架を投げた。
しかし十字架はお化けをすり抜けてしまった。

「なんだと！」

すると怯えるルイージに通信機に連絡が入る。

「ルイージ君、お化けの反応を確認した。」

君は今、お化けと出くわしているようじゃな」

それはオヤ・マー博士からのものだった。

「今こそ、オバキュームを使うのじゃ、懐中電灯の灯りを
相手に当てて、油断したところを狙え」

ルイージは戸惑いながらも懐中電灯をお化けに当てる。
するとお化けは怯んだ。

「ギャー！」

叫ぶお化けは油断してる。そしてルイージは
オバキュームを使った。

「ギャー！」

お化けは徐々にオバキュームの中に吸い込まれていく。
そして完全にオバキュームの中に吸い込まれて
しまった。

ルイージは腰を抜かす。

「なんて……物だ」

ルイージは驚く、シモンは手を貸す。

「どうやら私の言ってたことは間違いだったようだ

君は勇気があるようだ。私と共に行くか？」

「えっ？ いや僕は……」

断ろうとしたルイージ。しかし、自分の力が

シモンを助けたことを自覚し彼について行くのであった。

部屋を出て通路を歩いている二人。すると誰かが

向こうから歩いてきた。

「ほう、貴様がシモン・ベルモンドか」

「誰だ!？」

シモンが問う。すると向こう側にはハチマキをした

青年がいた。シモンとおなじ鎖のような鞭を持っており

「俺と同じ高貴な血を持つもの、ここで戦えるとはな」

「お前はいったい？」

「俺か？ 俺の名はリヒター・ベルモンド！」

リヒターという男はムチをかまえ、

シモンに挑む様子だった。

ベルモンドVSベルモンド

お化けや魔物を退けドラキュラ城を探索してる
シモンとルイーダ。

そこにハチマキをつけた1人の青年が現れた。
青年はシモンとおなじ鎖のようなムチをもち
自信をリヒターと名乗っていた。

そしてムチを構えシモンに襲いかかろうとした。
「待て！　なぜそのムチをもってる？」

そして、そのムチを持つ者が私と戦うことなど
ありえないはずだ！」

シモンが問いかける。

「普通ならそうだろう。だが俺には戦う理由がある。

シモン・ベルモンド！　あんたと戦いたかった
それだけだ」

「何?！」

シモンは言い返すリヒターに向かい構える。
するとシモンは気づく。

(このリヒターという男、邪気を感じる。

これはいったい?)

シモンがそう考えてるとシモンのムチが何かに絡む。
それはリヒターのムチだった。2人のムチが

絡み合い、綱引きのように互いに引つ張りあっていた。
「何故だ！　私たちがたたかうことはないだろう！」

「関係ない！　俺と戦え！　シモン！」

するとリヒターはシモンに向かって斧を投げた。
シモンに当たりそうになる。しかし斧は何かに

吸い寄せられた。それはルイーダのオバキウムだった。
「なんだとー！」

リヒターは悔しがる。するとリヒターはルイーダに
聖水の入った瓶を投げる。

「あちっ！」

「どうやら邪悪じゃないものでも効果はあるようだな」
聖水から出た火にルイージは怯む。

シモンはルイージを気にする。

その時リヒターはシモンに向かってナイフを投げた。

しかしシモンはリヒターのムチと絡まった

自身のムチを解き、ムチでナイフを弾き返すのであった。

「くっ！」

悔しがるリヒター。するとリヒターの後ろに何者かが
現れ、背中に剣をつき、リヒターを脅した。

「そこまでだ！ ベルモンドの者よ」

リヒターは後ろをちらつとみてこう言う。

「何者だ？」

「私の名前はアルカード。お前を助けに来た」

「アルカードだと！」

剣をリヒターにつく男はアルカードと名乗り
リヒターに聞く。

「教えてくれ！ なぜベルモンド家のお前が

同じベルモンドのものだとたたかうのだ？」

「俺はただ強いものと戦いたいそれだけだ！」

するとリヒターは聖水をわざと落とす

火を出した。

「くっ！」

アルカードは怯む。

そしてリヒターは隙をみて逃げ出した。

「待てっ！」

アルカードはリヒターを追おうとするが、

そこでシモンが止める。

「お前こそ待て！ お前はいったい？」

アルカードは剣を収め、シモンの問いに答える。

「私の名はアルカード、ドラキュラの息子だ」

「ドラキュラの息子だと!」

シモンはムチを構える。

「待て! シモン・ベルモンド! お前と戦うつもりは無い俺はあの男リヒターを救いたい! そして我が父を倒すことが目的だ」

「ドラキュラを?」

シモンはムチを収め、アルカードの話聞く。

「悪魔となった父はかつて人間の女と結婚した。

その間に生まれたのがこの私だ。

だが、人を憎み、悪魔と化した我が父を

倒すために現れたのがお前たちベルモンド家だ。

私の血には人間である母の血が通っている。

ベルモンド家の男とそのような私と

共に戦った。

人間を守るために私は父を倒すと決めたのだ」

するとルイージが疑問に思う?

「でも、自分のお父さんを倒すって、そんなこと……」

「だが、しなくては行けない。この世界のために!」

するとシモンは言う。

「わかった、お前に協力しよう。だがその剣を私に向けたら

わかってるな」

「もちろんだ」

アルカードは微笑んでこういう。そしてルイージに向かいアルカードはさらに言う。

「ところでお前の持つてるニンニク、それは我が父に

聞かんど。だが私もそうだが少しだけ体調が悪くなる」

指摘されたルイージは窓の外にニンニクを放り投げた。

こうしてシモンとアルカードとルイージは共に

ドラキュラを倒しに行くのだった。

ルイージはこう心の中で思っていた。

(しかし、めんどくさい事になったな。

こんなことに巻き込まれるなんて

あの、博士の言つてたピーチ姫のことだつて
僕を誘うための嘘だろう。

今頃兄さんとピーチは飛行船にでもつて
都会にでもいつてるんだらうな)

すると、アルカードはルイージに言う。

「そういえば、ここに連れ去られた。」

姫君がいるそうだが、もしかして君の友人か？」

「えっ？」

ルイージは驚く。

「それってドレス着てて冠つけてましたか？」

「ああ、父の標的にならないように部屋に匿っている」
ルイージは内心喜ぶ。

(ピーチ姫、やはりここにいたのか

これは兄さんに先駆けて……)

ルイージは企んでいた。

シモンとルイージはアルカードに導かれ

部屋の前に着いた。ルイージは部屋のドアを開ける。
するとそこにはドレスを着た冠をつけた姫がいた。

「誰？ アルカード様？」

姫は問う。そしてルイージはこう思った。

(この娘、ピーチ……じゃない！ 誰だ?)

「あなたは？ マリオー！」

姫はルイージに抱きついてきた

第三の姫

ドラキュラ城にて、探索していたルイージとシモンはリヒターという青年の戦いをえて、アルカードというドラキュラの息子と出会っていた。

そしてそのアルカードの導きで囚われの姫を出会ったルイージ。

ルイージはピーチ姫と思い込んでいたが

それはピーチ姫とは違う姫だった。

「マリオー！ 会いたかったわー！」

ルイージをマリオと勘違いして抱きつく姫。

姫はピーチ姫に似てる可愛らしい女性で

ドレスの色は黄色とオレンジ、冠は銀の冠だった。

「ちよつと待って、僕はマリオじゃない！」

あなたは一体誰です？」

「えっ？ マリオじゃないの？ あ、ほんとだ」

姫はガツカリしてる様子だった。

（なんだよー 紛らわしい格好しやがって

恥かいたじゃねえか！）

姫は心の中でこう思う。するとルイージは言う。

「あの……マリオは僕の兄です。名前はルイージ

兄とは何か？」

「あ、あなたマリオの弟だったのね！ それはそうと

言ってくれば！」

姫はルイージの方を叩き笑う。

（なんだよー だからこんな格好なのかよ。

しかしルイージって……ウケる！）

ルイージに対してこう思い少し笑った姫は

自らの名前を名乗る。

「私の名はデイジー、サラサランドの女王よ！」

マリオはそこで助けて貰ったのよ。

悪い奴らから」

「あ、そうなんですネ」

(兄さんピーチ姫以外の姫も助けてたんだ)

ルイージは心の中でこう思う。するとデイジーはルイージに聞く。

「あんた私を助けにしてくれたの？　ありがとう！

マリオの弟だからさすがに姫である私をおいて

逃げるってことはしないでしょうしね」

「えっ！　ええ、まあ……」

ルイージは慌てながら返す。

するとルイージの後ろからシモンが話しかける。

「ルイージ、この人が君の探してた姫か？」

「いや、この人は……」

ルイージが言おうとするとデイジーが前に出る。

「そうよ。私はかつてこの人のお兄さんに

助けてもらったのよ。」

ルイージは戸惑いながらデイジーの話を聞く。

「そうか。それは良かった」

後ろからそう誰かが言うとなアルカードがそこに来た。

「アルカード様」

「無事だったようでありよりだ。プリンセスデイジー」

アルカードはデイジーの身を案ずる。

デイジーはアルカードに見とれていた。

アルカードについてきたシモンがルイージに問う。

「その姫は君の知り合いか？」

「いえ、僕ではなく兄が助けたようで」

「そうか。私の名はシモンだ。よろしく」

デイジーに挨拶するシモン。するとデイジーは

戸惑いながら挨拶する

「よろしく……」

(すごい筋肉。汗臭そう……)

心の中でデイジーはそう思っただけだ。
その後4人は部屋から出た。
4人は月明かりが照らす暗い廊下を歩く。
あたりは少量のロウソクの火が灯っていた。
怖がりながら歩くデイジー。すると
声が聞こえてきた。

「ケケケケケ」

立ち止まるデイジー。

「きゃあ、助けてルイージ」

ルイージに頼るデイジー。

しかしルイージは恐怖で身動きができなかった。

(えっ? どゆこと?)

デイジーは疑問に思う。するとルイージは頭を抱え
震えながらしゃがんでしまった。

(もしかしてこいつ臆病者か?)

デイジーはそう思う。するとオバケの声が喋る。

「ケケケ、誰かと思ったらルイージか。マリオ

　　だったらまだしもルイージじゃ楽勝だ」

すると辺り一面に白いお化けがでてきた。

「こいつらは一体」

シモンは十字架をもち警戒し、アルカードも剣を構える
するとルイージはつぶやく。

「テレサだ……」

「テレサ?」

アルカードが疑問に思う。ルイージは答える。

「僕とマリオ兄さんが戦ったお化けだ。」

　　あれはただでは倒せない」

怯えるルイージ。デイジーがルイージに声をかける

「あんた男でしょ! ここのまで来たんだから

　　戦いなさい!」

ルイージはしゃがみ込んだままだった。

するとシモンはテレサの大群に向かって十字架を投げる。

しかしシモンの十字架はテレサの大群を通り抜けブーメランのようにシモンの手に戻った。

アルカードも剣で刺そうとするが通り抜ける。

「無駄だ。喰らえ！」

「ぐっ！」

テレサが体当たりするとシモンがダメージをウケる

「何故だこちらの攻撃は当たらないのに」

なぜアイツらの攻撃は私たちに当たるのだ！」

「ケケケケケ」

笑うテレサたち。するとルイージの持つ

通信機から連絡が来る。

「ルイージ君！ 何をしとる。

オバキュームを使うのじゃ。

テレサはたしかに普通じゃ無理だ。

テレサは明るいところに誘うのじゃ」

「誘うって言っても……そうか！」

するとルイージは逃げ出す。

「おい！ ルイージ！ 何逃げてんの！」

ルイージに向かって叫ぶデイジー。するとルイージは

デイジーの手を取り一緒に逃げる。

（えっ？ なんで？）

シモンとアルカードはルイージの行動に気づく。

「どういうつもりだ！ ルイージ！」

ルイージの行動に疑問を持つシモン。

アルカードはあることに気づく。

「シモン！ テレサを引き寄せるんだ。

そしてルイージに気づかれないように」

シモンはアルカードの指示に従い

テレサをおびき寄せるため、ルイージに向かい走る。

「ケケ、どういいうつもりだ？ バンパイアハンターも臆病になったのか？」

するとテレサ達は知らぬ間に1箇所が集まった。そしてその瞬間何者かが閉じているカーテンを開いた。

「なんだこれは？ 月明かりか！ 眩しい！」
今まで真っ暗だった部屋は月明かりが照らされテレサ達はおびえる。その時、テレサ達は何かに吸い込まれていった。

「な、なんだこれは！ うわあああ！」
テレサ達はどんだんにかに吸い込まれていった。それはルイージの持っている掃除機型のマシンオバキュームだった。
オバキュームにどんだん吸い込まれるテレサ達。テレサの数はみるみる減っていく。

「畜生！ 覚えてろよ！」
生き残った数少ないテレサは逃げるように姿を消した。

部屋にはあかりが灯った。

「な、なにこれ？」
デイジーが驚く。

「あのお化けたちが去ると明かりがつくように
なってたのかもしれない

ルイージとシモンが1箇所に誘い

私と姫がカーテンを開け、退けた。」

アルカードが説明する。シモンは詫びる。

「すまないルイージ。私はお前が逃げ出したのかと」
「私も謝るわ。ごめんねルイージ」

シモンと一緒に謝るデイジー。
そしてルイージが答える。

「いや、そんなに謝らなくていいよ。

それよりもあれだけの多くの

テレサがいるということはこれはクツパが関わって
いる可能性がある」

「クツパ？」

シモンは訪ねる。

「クツパはマリオ兄さんが倒した。大魔王だ。

僕は何者かに操られたドンキーというゴリラに
吹っ飛ばされてここまで来たんだ。

それもクツパに違いはない

ここまで来たなら、僕もじつとしてられない」

ルイージは決意する。デイジーは心の中で思う。

(マリオは私を助けた時以外でもそんなすごいのと

戦ってたのか。そしてこのルイージも)

決意を固めたルイージは進もうとするが

いつこうに動かない。デイジーは気になって

肩を叩く。すると

「あ、これ気絶してるわ。痩せ我慢して

耐えきれなかったのね」

ルイージは立ったまま気絶していた。

アルカードは少し考えこういう。

「ルイージの目が覚めるまでここにいよう」

ルイージ達はテレサを倒した部屋で休むことにした。

一方何者かがいるくらい部屋があった。

「おろかものめええ。貴様らはベルモンドだけでなく

帽子の男もおせぬのかあ！」

敗走したテレサたちを怒鳴りつけるのは

黒いコートを着た青白い顔をした大男ドラキュラ伯爵
だった。

「まあ良い、リヒター！ お前も負けるなよ

負けたらどうなるか、わかってるだろな？」

「任せとけ、俺をこんなおぼけどもと一緒にするな」

ドラキュラのそばにいたりヒターは宣言する。

テレサ達は文句を言う。

「調子に乗るなよベルモンド！ お前は誰のおかげで……」

「黙れえええ！」

怒鳴りつけるドラキュラ伯爵。大人しくなるテレサたち

「貴様らも誰のおかげで生かしてるかわかれよ

リヒターもだ！ いいな」

ドラキュラ伯爵はテレサ達とリヒターに言い聞かした。

アルカードとドラキュラ

ルイージ達はテレサを倒した部屋で休んでいた。

テレサやお化けを倒せる掃除機型マシン

オバキュームを持つてるルイージが気絶したからである。

ルイージの目が覚めるまでシモン、アルカード、

デイジーは話をしていた。

「アルカード様、ドラキュラ伯爵がお父様なんですよ？」

本当に倒せるの？」

「姫、私はもうあの男のことを父とは思ってはいない

それよりも姫、あなたはルイージの兄に助けて貰った

と言ったが？」

「そう。昔助けてもらったのよ。マリオに

でも他のところでクツパってやつと戦ってたとはね

しかし、あのマリオの弟がこんな情けないような

やつとはちよつとガツカリだなあ」

ルイージは夢を見ていた。

ルイージはマリオと一緒に配管工の仕事をしていた。

カニやハエの退治をしつつ。2人で協力していた。

しかしマリオはその時恋人ポリーンと別れていた。

マリオは落ち込んでいた。

「兄さん、落ち込まないですよ。

また新しいひとと出会えると思うし」

しかしマリオはポリーンのことを諦めてはなかった。

そんな中マリオたちのすんでいたキノコ王国の

姫、ピーチが何者かにさらわれてしまった。

2人はピーチをさらったクツパの城へ挑むのであった

マリオはルイージより先に前に出て

クツパに挑んだ。

「お前何者だ？ 姫を助けに来たのか

愚かなやつだ！」

マリオはクツパに挑んだ。

クツパの炎をよけクツパのしっぽを掴む

そして遠くに投げ飛ばした。

「うおっ！ そんなー！」

投げ飛ばされたクツパはマグマに沈んでいった。

ルイージは遅れて到着する。

するとマリオはピーチ姫を助けていた。

「あなた名前はマリオというの？」

助けてくれてありがとう」

ピーチ姫は自分を助けたマリオの名前を覚えていた。

ルイージは自分が遅れてきたことを少し悔しがっていた。

いつも兄であるマリオに比べ劣ってる自分のことを悔しがっていた。

マリオはその後再び旅へ出た。ルイージはその度に

留守番をしていた。

ルイージはいつかマリオを越す。そう考えていた。

やがて目を覚ますルイージ。

「ぼ、僕は？ 一体？」

「あんな気絶してたのよ」

「そうだったのか！ それはすまない」

「別に謝らなくていいのよ。 あんたのおかげで

みんな助かったんだし」

デイジーは目を覚ましたルイージを励ます。

「ルイージが目を覚ましたようだな。

準備が出来たら進もう。俺たちはまだ

ドラキユラ城の中にいる。ここに在る限り

ドラキユラが何をするか分からないからな」

シモンはこういい、アルカード、ルイージ、デイジーと

共に部屋から出た。するとアルカードが言う。

「姫、いいのか？部屋にいらなくて？」
「あそこにもただ退屈なだけよ。」

あなた達解いた方が安全だわ

それよりもアルカード様？ 本当に大丈夫なの？

自分の父親に対して？」

デイジーの問いにアルカードは少し黙り答える。

「大丈夫だ……」

その時、突然何かが沢山現れた

「テ、テレサ！」

「何ビビってんのよ！ルイージ！」

オバキュームを構えるルイージ

ルイージは持つてる懐中電灯をテレサに
当てようとするがテレサは逃げまくる。

「ケケケ！ っここまでおいで」

ルイージはテレサを追いかける。

「待つて、ルイージ！ きゃあ。」

ルイージを追いかけようとしたデイジーが
何者かに捕まれ宙に浮く。

「離してよ！ 誰なの！」

「ケケケ、大人しくしてろ！」

それはテレサたちだった。テレサたちは

デイジーを捕まえどこかに行こうとしていた。

するとそれを足止めするかのよう

先回りするアルカード。

「どけ！アルカード まあ、お前に剣でつかれても

びくともしねえけどな」

テレサたちは油断する。するとアルカードは
剣でテレサを突いた。

「ぎゃあ！ 何故だ！」

テレサは痛がる。

「お前たちに対抗するため改良したのさ。」

ベルモンドの武器もだ」

痛がるテレサ。アルカードはルイージに言う。

「ルイージ！ 囹のテレサは構うな！」

姫を助けるんだ」

ルイージは油断しているテレサたちを

オバキュームで吸い込んだ。

しかしテレサの数が異様に増えた。

ルイージ、シモン、アルカードはテレサと戦ってた。

その間別のテレサがデイジーをさらっていった

「話してよ！ 誰か助けて！」

デイジーはそのまま部屋の壁をテレサと共にすり抜けどこかへ消えてしまった。

「デイジー！」

叫ぶルイージ。するとテレサたちは退いていく。

「くっ！ ドラキュラは最初からこれを！」

悔しがるアルカード。すると何者かの声が聞こえる。

「聞こえるか。ベルモンド、我が息子、そして

緑の帽子の男」

「この声はドラキュラ！」

辺り一面に響くその声はドラキュラのものだった。

アルカードは直ぐにそのことに気づく

「お前たちといふこの姫は我が手中にある。

助けて欲しければここまで来い！」

ドラキュラの声はそれつきりきこえなくなった。

アルカードはルイージたちに提案する。

「この先一斉に行っても全滅になりかねない。

ここは別れよう」

するとシモン、アルカードは

それぞれ違う道に行くことにした。

しかしルイージは怖がって中々動けなかった。

「そんな！ 僕一人じゃ…」

「ルイージ、弱気になってどうする。」

そうしてる間にデイジー姫は我々を待ってるのだ。

怖いのは君だけでは無い」

するとルイージはデイジーのことを思い出すのだった。

そして動き出すルイージ。アルカードは提案を出す。

「途中まで私についてこい。だが、我が父はほかに

協力者がいるはずだ。そのものと戦え」

こうしてアルカードはルイージを連れ闇の中へ

進んで行ったのであった。